

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1985
6



聖徒の道

1985年 6 月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：スペンサー・W・キンボール、マリオン・G・ロムニー、ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会：エズラ・タフト・ベンソン、ハワード・W・ハンター、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・バラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ボット

聖徒の道 1985年 6 月号第29巻第5号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

普通号250円, 大会号(1, 7月号)350円

International Magazines PBMA0584JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1985 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵致致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に資材管理部配送センターにご連絡ください。●「聖徒の道」についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820



表紙(表)：ソルトレーク・シティ中心部。グレン・トーマス・ブラウン撮影。(裏)：ワサッチ山系を背に広がるソルトレーク・シティ。1847年7月、開拓者たちはこの山並を越えてソルトレーク盆地に初めて入植した。写真はユタ旅行協会提供。

●——も く じ

互いを強める	ゴードン・B・ヒンクレー	1
「見よ、いつもあなたがたと共にいるのである」	チェリー・B・ワーノック	5
モルモン経の探求：第3部	ジョン・L・ソレンソン	7
秘密を守る	ラリー・ヒラー	13
F・エンツィオ・ブッシエ長老——地の果てまで	ジャン・U・ピンボロー	17
名誉にかけて	エズラ・タフト・ベンソン	22
自由、平安、安心感	ロバート・L・シンプソン	24
聖霊による証	アーリン・P・ネサー	26
家族会議で共に語り合う(家族のためのページ)		29
病んでいる仲間のために	マリリン・ブリック・タフト	32
主は完全なお方です。私は恐れません	ジョアン・ブレイ	34
あの場所は今(カメラによる教会史跡巡り)		
質疑応答——断食	J・ロジャー・フラマン	41
各地のたより		
子供のページ(別冊付録)		
わたしはします		1
むちの音	メアリー・ブラット・バリッシュ	2
音ぶあそび	パット・グレアム	8
イエスさまのようになろう		12

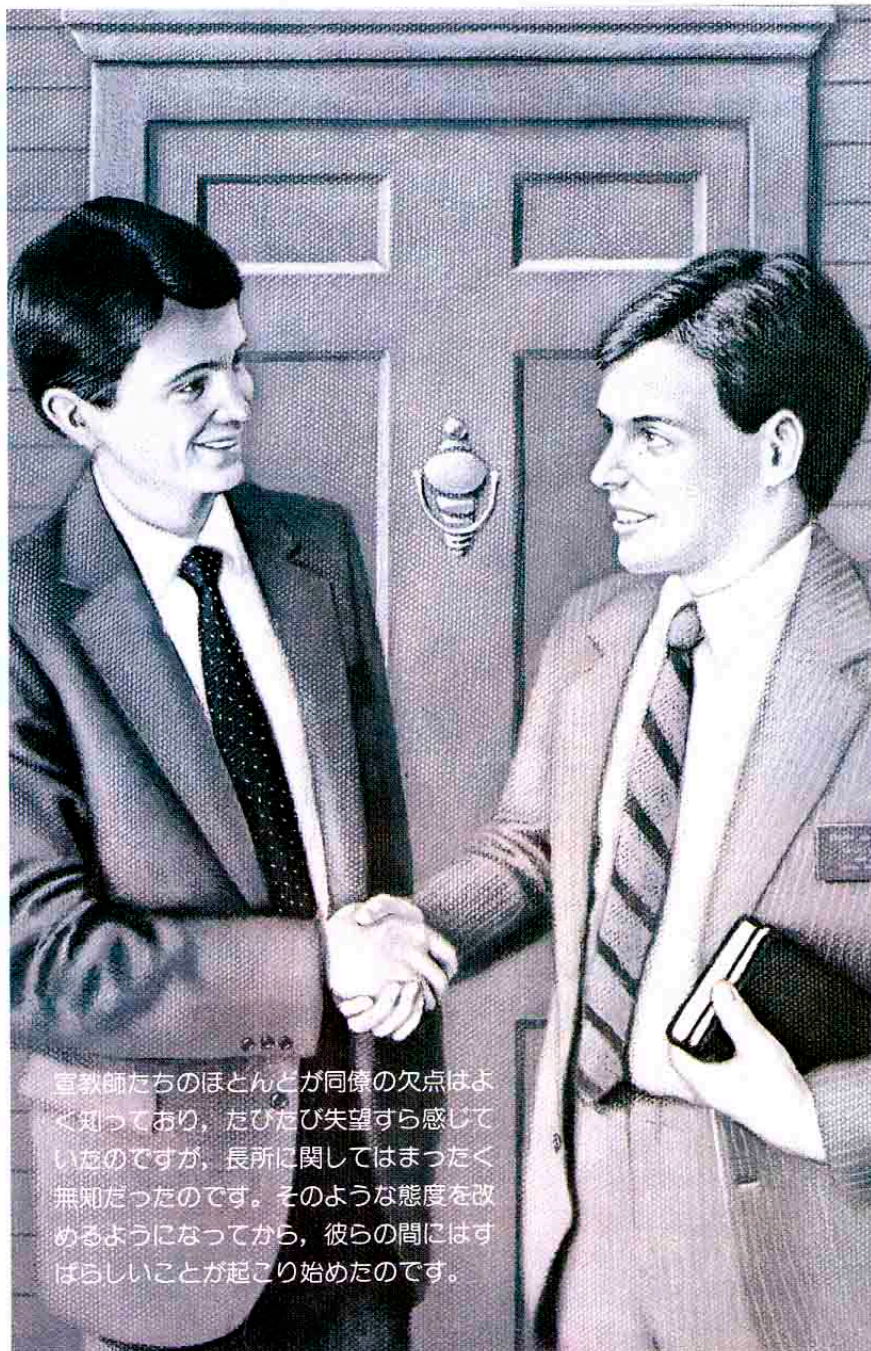
互いを強める

第二副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

私 たちはなんとすばらしい時代に生きていることでしょうか。この時代は、科学技術の発達において世の歴史上最もめざましい時代です。またそれぞれの神権時代のあらゆる力、権能が地上に回復された、福音の「時満ちたる神権時代」であり、大勢の人々と共に教会員として生活できるすばらしい時代です。また忠実な末日聖徒であれば、その行く先々で、末日聖徒であることを知ってもらうだけですぐに友を作ることのできる時代でもあります。

以前に、日本の天皇が合衆国を訪問されたときのことで。私は招かれて、カリフォルニア州サンフランシスコで開かれた歓迎の午餐会に出席し、日本に滞在していた方々と同席する機会がありました。彼らは会員ではありませんでしたが、教会の人々のことをよく知っていました。話が、異国の地で生活する人々の経験する、カルチャーショックのことに移ったときでした。外国生活の長いある知識人がこう言ったのです。「あなた方の教会の人ほど親近感を与え、くつろいだ気分にさせてくれる人はいませんよ。モルモン^{モルモン}の家族が日本に来ると、彼らには1週間とたたないうちに、友達がたくさんできるんです。ほかの人たちはそうはいきません。ひどい孤独感を味わったり、慣れるまで相当の苦勞をしています。」

私たちはひとりぼっちではありません。大勢仲間がいます。実に多くの人々が主のみ教えに従おうと努力しているのです。もちろん、仲間の少ない地域に住んでいる人々もいることは、十分承知しています。しかし幸いにも、ほとんど例外なく近くに同じ仲間がいます。心おきなく交際できる人々、尊ぶよう教えられてきた標準を守って生活できる末日聖徒がいるのです。



宣教師たちのほとんどが同僚の欠点はよく知っており、たびたび失望すら感じていたのですが、長所に関してはまったく無知だったのです。そのような態度を改めるようになってから、彼らの間にはすばらしいことが起こり始めたのです。



私たち教会員は、世界中で最もすばらしい友情で結ばれています。ひとりが落胆すれば、その人を慰め励ます責任が周囲の人にあるのです。

私は、すっかり自信をなくし失望していたある宣教師と面接をしたことがあります。彼は、異国の言葉をうまく話せず、悩んでいたのです。やる気をなくし、家に帰りがっていました。その伝道部には180人の宣教師がいて、彼はそのうちのひとりでした。

私は彼に、もし家に帰ってしまえば、ほかの179人の同僚の信頼を裏切ることになると言い、彼に、同僚たちは全員彼の友達であり、彼のために祈り、断食し、助けられることがあればどんなことでもしてくれるに違いないと諭しました。そして彼と一緒に働き、教え、祈ってくれること、彼を心にかけてくれる同僚たちは彼が言葉を覚えられよう助け、伝道がうまくいくように必ず手を貸してくれるに違いないと話しました。

うれしいことに、彼はほかの宣教師たちがみな彼の友達であるという、私の言葉を聞き入れてくれました。その後、仲間の宣教師たちが彼を当惑させるためではなく、励ましを与えるために押しかけました。彼の心の中からは、あのつらい孤独感がうそのように消えていきました。彼は、自分が勝利のチームの一員であることに気づいたのです。彼は立派な伝道をし、リーダーとなり、以後ずっと指導的な立場に立っています。

これこそ、私たちがお互いに対してなさなければならないことなのです。

パウロは、ローマ人に対してこのように書き送っています。「わたしは強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきである。そして次のようなすばらしい言葉をつけ加えています。「自分だけを喜ばせることをしてはならない。」(ローマ15:1)

今の世の中には、人々がお互いをけなし合うという悲しむべき傾向が見られます。人を傷つける言葉を言おうと思えば、簡単にそうできるのです。このことに皆さんはお気づきでしょうか。皆さんには是非その反対であってほしいと思います。相手に賛辞の言葉を送るように努めてください。

私は教会の責任として、長年アジア地域を担当していましたが、その間宣教師一人一人と個人的に面接する機会に恵まれました。私は彼らに、同僚のどんな点を尊敬し、自分の生活に取り入れたいと

思っているかを尋ねてみました。

そのような質問をすると、どの宣教師もきまって一瞬驚いた顔をするのです。ある長老は、同僚のことをそのように考えたことは一度もないと言いました。いつも相手の欠点や弱点ばかりに目がいき、長所を見過ごしていたのです。私は、彼ら一人一人に、少しの間同僚のことを考えてみるようにさせたのです。その結果、次のような返事が返ってきました。「彼はとても伝道に熱心です。」「彼は早起きです。」「身なりがとてもきちんとしています。」「彼は不平を言わない人です。」

これは実にすばらしいことでした。宣教師たちのほとんどが同僚の欠点はよく知っており、たびたび失望すら感じていたのですが、長所に関してはまったく無知だったのです。そのような態度を改めるようになってから、彼らの間にはすばらしいことが起こり始めたのです。

私たちはだれでも時折、失望することがあります。まただれでも、1度や2度の失敗はあるものです。聖書には、イエスでさえ涙を流されたことと記されています。予言者ヨセフ・スミスも、敵の手から逃れるためにミシシッピ川を渡ったとき、会員たちの中に逃亡者として非難している者がいることを知り、失意と無念さを味わったに違いありません。彼はこのように答えています。「私の命が友にとって何の値うちもないものなら、私自身にとっても価値のないものである。」彼は戻って来てイリノイ州カーセージに行き、その後間もなく命を落としたのです。

私は、デビッド・O・マッケイ大管長が涙を浮かべておられるのを見たことがあります。またジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長、ハロルド・B・リー大管長、スペンサー・W・キンボール大管長たちも同様にしておられるのを見てきました。だれでも失望することがあるのです。しかし私は、失望ということを考えるたびに、以前読んだ次のような新聞記事を思い出すのです。

「失望するようなことがあったら、この人のことを思い起こしてください。……小学校を途中で退学した人、田舎の店をやりくりして破産に追い込まれた人、その負債を15年かかって返済した人、妻をめとりながら不幸な結婚生活を送った人、上院議員、下院議員に立候補

し、それぞれに2度も落選した人、聴衆の無関心さをよそに、あまりにも有名になったあの演説をした人、日夜新聞の攻撃的となり、人々にさげすまれた人。こうした状況にもかかわらず、世界中のなんと多くの人々が、この不器用で物思いにふけるもじゃもじゃ頭の男、ただA・リンカーンとだけ署名していたこの若者に、勇気づけられ、励まされてきたことだろうか。」(ウォールストリート・ジャーナル)

皆さんが失望したり、悩んだときには、ほかにも同じような人がいるということを思い起こしてください。そして彼らの方が、あなた方よりもひどい、大変な状況にあるということを知っていただきたいと思います。また私たちの中のだれかが悩んだり、沈んでいるときには、友人としてその人を励ましてあげてください。そして人の気持ちを敏感に察してあげられるよう、感受性を高めていただきたいと思います。励ましが必要なときには、努めてそのようにしてください。また自分から人々に親しく接してみてください。必ず友達ができます。そしてきっと、すばらしい友を与えてくださったことを神に感謝するようになるでしょう。

また残念ながら、私たちの社会には自分自身を過少評価する傾向があります。どうしてもほかの人の方が自信ありげに、立派に見えてくるのです。実際は、だれでも何らかの劣等感を持っているものです。大切なのは、そのことをあまり自分に問いかけないことです。だれもが皆、背の高い、ハンサムな人間、スマートな美人になることはできないのです。大切なのは、今自分の持っているものを最良の状態に保つことなのです。

自己れんびんにむだな時間を費やさないように、そして自分を過少評価しないように気をつけましょう。皆さんは神の子供なのです。このことを忘れないでください。皆さんには神聖な生得権があり、皆さんの内には神の性質が宿っているのです。詩篇にはこう歌われています。

「わたしは言う、『あなたがたは神だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ。』」(詩篇82:6)

ダビデは、星空の下で腰をおろしながら、この大いなる可能性に思いをはせていたのでしょう。彼はこう書いています。

「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。」

ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、

これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。」(詩篇8:4-6)

だれにでも偉大な可能性があるのです。主は啓示を下し、このように言われました。「汝、須らく謙遜なれ、さらば主なる汝の神は手を取りて汝を導き汝の祈りに応えん。」(教義と聖約 112:10) 何とすばらしい約束であり、個人の進歩のためにふさわしい言葉でしょうか。

個人の進歩に関して、もうひとつ目立った傾向をあげさせてもらうなら、それはこの学問の進歩した時代の、知的面でのよう慢さではないでしょうか。そのようなものは、見かけ倒しの偽善にすぎません。見かけ倒しや偽善は人間を利己的な存在だとする考えを生みだし、いずれは何らかの形で失望へとつながっていくのです。

モルモン経の予言者はこのように言っています。「おお悪魔の狡猾な謀ごとよ。おお人間の虚栄と意志の弱さと愚さよ。人間は学問があると自分は賢いと思って神の訓戒に耳をかさず、自分独りで解ると思って神の訓戒をうち捨ててから、その智慧は愚であって何の益にもならず、かれらはついに亡びるのである。」(IIニーフアイ9:28)

教会歴史の中に、興味深い話があります。かつては偉大な人が、ごう慢になったために墮落していった話です。ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、その人のことに触れ、このように言っています。「オリヴァ・カウドリに出会ったとき、私は彼の足元の地が震えているのではないかと思ったほどです。みたまの力を受けた彼のあのような強い証を私は聞いたことがありません。しかし、彼が神の王国を去ったとき、まさにその瞬間、彼の力は稲妻のごとく地に落ちたのです。デリラのひざの上のサムソンのように、彼は力を刈り取られてしまったのです。彼はそれまでに抱いていた力と証を失い、教会員として世を去ったものの、生きている間に再びそれらを完全に取り戻すことはできませんでした。」(スタンリー

R・ガン「オリヴァ・カウドリ：第2の長老および筆者」p.73)

年月の経過とともに、私たちは特に進歩を必要とし、みがきをかけていかなければならない分野で、様々な問題にぶつかります。教会のことや教会歴史、教義、儀式などに疑問を感じるようなときがあるかもしれません。私はこれら主のみ業に関して、皆さんに証したいと思います。私は半世紀以上にもわたって、主のみ業に親しく携わり、ヒーバー・J・グラント大管長に始まり今日に至るまでのすべての大管長と共に働いてきました。グラント大管長、ジョージ・アルバート・スミス大管長、デビッド・O・マッケイ大管長、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長、ハロルド・B・リー大管長、スペンサー・W・キンボール大管長、これらの方々と個人的にも親しく接してきましたし、彼らの副管長として働いてきた人々、十二使徒評議会の人々とも親しくなることができました。彼らは人間です。ですから当然、彼らは人間としての特性を身につけ、人間としての弱点も持ち合わせていたと思います。しかし彼ら一人一人の生活には、それを超越して余りある、圧倒されるほどの神の靈感が満ちていました。大管長に召された方々は、いずれも真の意味で予言者でした。私は彼らの上に注がれる啓示のみたまをこの目で見てきました。彼らはいずれも、十二使徒定員会の会員として、またそのほかの責任を長年にわたって経験した後、大管長会に召されています。主は彼ら一人一人に失敗や失望を、そして病やときには非常な悲しみを経験させ、彼らをみがき、鍛えてこられました。それらはすべて、大切な訓練の一過程として、彼らの生活にすばらしい影響を及ぼしてきたのです。

福音に生きる私の愛する友である皆さん、これは確かに神のみ業です。この教会は神の教会であり、神の愛する御子のみ名を有する真実の教会です。神は、偽りの者が頭として立つのをお許しにはなりません。予言者を指名されるのは神であり、神ご自身が彼らに靈感を与え、導かれるのです。ジョセフ・スミスは、この時満ちたる神権時代の幕開けの偉大な予言者でした。私たちは次の歌詞を喜びを持って心から口ずさむことができます。

「たたえよ、主の召したまいし、主と語りし予言者を」(「讃美歌」144番)

神は私たちに信仰を、そしてこの偉大にして聖なるみ業に対する証を祝福として与えてくださっています。願わくは、この末日にあって、神の大いなるみ業に関する計画を完うする私たちに、神が喜びを与えてくださいますように。

主はこのように言うておられます。「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され、福音はここより転じ行きて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて、ついに全世界に充ち満つるが如し。」(教義と聖約65:2)

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. だれでも時折失望するものであるということを知っておくことは大切である。
2. 人の気持ちに対する感受性を高め、励ましが必要なときには努めてそのようにすべきである。
3. 自己れんびんにむだな時間を費やさないように、また自分を過少評価しないようにする。
4. 人をほめ、力づけるよう努める。
5. 主は、教会の大管長一人一人に失敗や失望を、そして病やときには悲しみを経験させ、みがき、鍛えてこられた。彼らの生活に明らかに影響を及ぼしたこの大いなる鍛練の過程は、私たちも生活の中で経験することである。

話し合いを進めるために

1. 失望を克服することについて、あなたの感じていることや経験したことを述べる。家族の人々に感じていることを話してもらう。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくとよい。必要な励ましについて、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

「見よ、いつもあなたがたと 共にいるのである」

チェリー・B・ワーノック

7歳のときの私はバプテスマが遠く感じられて、私の番が全然来ないように思えたものです。日曜学校の同級生がバプテスマと確認の儀式を受けるのを胸をわくわくさせながら見つめていました。バプテスマを受けた後の彼らが別人のようで、何か偉くなったように見えました。

ついに夏が来て、教師のネルソン姉妹が教室の生徒たちに次は私の番であると発表しました。とうとうその時が来たなんて私には信じられませんでした。末日聖徒には開拓者記念日として知られる7月24日が私の誕生日で、その日にバプテスマを受けることになっていました。バプテスマの水の傍らで私は確認の儀式を受け、さらに聖霊をいつも友とすること

ができるという約束を受けました。幸福な思いと満足感で一杯でした。

ところが月日がたつにつれて、何かしら失望感にとらわれ始めました。いつも傍らにいる友であるはずの聖霊が困ったことに沈黙を守っているのです。与えられた特別な約束と祝福にふさわしい生活をしていないからではないかと考えたことも幾度ありました。

やがてバプテスマから2度目の夏を迎えました。私は10歳になり、年齢の割には大きい方でした。家の仕事を急いで済ませてしまうと、家を抜け出し、少し遠くにある祖母の農場の家に行ったものです。羽が生えたように軽やかな足どりで一番大好きな人のもとへと一心に飛んで行きました。

干草を作る時期で、急いで通る道すがらの牧草畑ではすでに男の人たちが草を干しているところでした。祖母のところでは、農園で取れた物や焼きたてのパン、木いちごのパイなど、素晴らしい食物で長いテーブルが重そうでした。

祖母と過ごした特別な夏の日々がいつもそうであったように、その日もあつという間に過ぎ去ってしまいました。祖母に別れを告げて帰ることを思うと、とても気が重くなります。祖母の家の心地よい台所の、幸福で温かい雰囲気に別れを告げるのはいやでしたが、家の向こう側にある木々や丘にさす影の長さが伸びているのも気になります。帰るのが遅ければ、家に着く前に暗くなってしまうことはわかっていましたし、たとえ遠く川



私は恐ろしさのあまり心の中で祈り始めました。「天のお父さま、私を祝福してください。」

確かに聖霊が共にいたことを知って
感謝するとともに、幸福でした

下に明かりがともった我が家の窓が見えたとともに心配です。

玄関の上り段にしばらく腰をおろし、裏庭に漂うランやバラの甘い香りをかきながら考えていました。「どうして暗くなってしまうの。」

やがてあきらめの気持ちでため息をつくくと、私は歩道へ下りて庭の門を通っていきました。前の畑を通して丘の上の門を出たところで、あたりが暗くなっていることに気づきました。影も見えなくなっていました。険しい丘を下っているとけた石が坂道を転がっていくのが聞こえます。いつもなら坂道での石けりは楽しいのにその晩の音は夜の闇に消えるようで不気味でした。

丘のふもとに行き着いたとき、その日荷車が何台も通ってできたわだちの跡に大きな水たまりがいくつもできていたことを思い出しました。来るときは石から石へ飛び移りながら来たのですが、今はもう暗くてそれも無理でした。「まあいいや。暖かいし、靴も古いんだから」と思いました。石の上ですべて転び、泥だらけになりながら進んで行きました。

大きな声でケロケロ鳴っていたかえるも今では静まり、恐怖心が暗やみのお化けのように広がっていきました。「歌を歌おう。」そう思った私は、私のように恐れを抱く人のため書かれたのではないかと思える歌の一節を歌い始めました。「戦い進め、つわものよ。」(『戦い進め』『讃美歌』134番)

そのときです。私は思わず口をつぐんでしまいました。「静かに、聞きなさい」という声が心の中にこだましたのです。しばらく驚きで口のきけないほどでしたが、やがてそんなことは馬鹿げたことに思えて、前より一層大きな声で歌い始め

ました。「十字架負い進みゆけ。」歌を続けながら、消えそうな勇気を奮い起こして進みました。

しかし今度は、頭の中に「静かに、聞きなさい」という命令が一杯に広がってくるのです。

その場に急に立ち止まった私の胸の鼓動は、少し前までぬれた靴から出ていた音よりも大きく高鳴っていました。意を決して深く呼吸をすると、もう一度「戦い進め」と歌い始めようとしていました。ところが歌詞が出る前に、前より一層強く「静かに」といさめる声がしました。

私はその場に立ちすくみました。木の葉が突風に舞うように、残っていたほんのひとかけらの勇気も消え失せてしまいました。どうすべきなのでしょう。私は恐ろしさのあまり心の中で祈り始めました。「天のお父さま、私を祝福してください。」何をお願いすればよいのか全然考えもつかず、ただ繰り返し同じことを祈っていました。「天のお父様、私を祝福してください。」やがて恐れのお化けが取り、心地よい安心感が全身にみなぎりしました。「道からそれなさい」という言葉が聞こえてきたのはそのときです。

今度はすぐにその声に従いました。前は大きな音をたてて歩いていたのが、今度はできるだけ静かに、自分の行く手を目で見るといよりは心で感じ取るように歩きました。道に隣り合わせた畑を500メートルほど行くと、暗やみの中にすっぽり吸い込まれたような感じがして息が止まるかと思いました。辺りに聞こえる夜の響きに耳を澄ますと、容易に聞き分けられる音と、初めて耳にするため見当もつかない音があります。

すぐ前を小川が流れていて、門が近いことにすぐ気がつきました。門をよじ登

って越えるか、囲いを通り抜けるべきかです。考えている間もなく、「門を通るな」という答えが与えられました。

ではどこを通ればよいのでしょうか。もう一度立ち止まると、今度は蒲とやぶが全面を覆う沼地や小川を頭に描きました。昼間でもむずかしいのに、夜に渡れというのでしょうか。

そのとき、夜の空気に運ばれてくるある匂いをかいて恐怖心が走りしました。鼻につんとくる、あのタバコの煙の匂いです。確かに門の傍らにだれかいるようで、迫り来る危険に体中の神経が張りつめてくのがわかりました。

どうやってその沼地や小川を渡って対岸にたどり着いたのか今もって思い出せません。今でもはっきりと覚えているのは、無事に家に着くなり、無我夢中でその日の出来事を説明したことです。

父は何も聞かずに私の言葉を信じてくれました。父は長ぐつをはき、猟銃を手にすると、畑を通して暗やみの中へ消えていきました。何時間もたってから帰って来た父は何も言いませんでしたが、私のとった行動が確かに正しかったことを認めていることがわかって安心しました。

夕やみの中、家まで歩いた長く、しかしうれしいこの夜の経験はこれで幕を閉じたわけですが、私はこの経験から、確かに聖霊が共にいたことを知って感謝するとともに、幸福でした。聖霊が自分をいつも守ってくれているのだという確信を得たことに心から感謝しています。これがどんなに私の助けになっているか知れません。そして生涯にわたって助けになると信じています。主が約束しておられるではありませんか。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:20)

モルモン経探求：第3部

ジョン・L・ソレンソン



古代アメリカとその聖典に
関する理解の変遷

この連載も今回で最終回を迎える。これまで、モルモン経の正統性を実証し、ひいてはその内容を一層明らかにすると思われるような、学問上、および科学上の近年の発達に焦点を合わせて論考を進めてきた。先月号までは、地理、考古学の限界、人口、金属の使用、文字による記録といった分野を扱ってきた。

ほかに、政治機構、定住形態、通商、秘密結社といった大きな問題にも当然関心が向くものと思われるが、しかし今回は、ここ数年新しい光が投げかけられている広範な話題について、ひと通り紹介しておくことのほうがおそらくもっと価値があるのではないかと思う。学問の様々な分野の発達に伴うこうした例からは、モルモン経に関係する初期のアメリカ

文明について従来言われていたこと——高名な人々が持っていた知識も含まれる——が、必ずしも現在の研究の成果とは一致しないという事実がはっきりと浮かび上がってくる。

末日聖徒の著述家たちは、これまで、ニーファイ第三書（6：8；8：13）に書かれている「街道」や「道」といった言葉は、メキシコのユカタン半島に見られる石灰で表面を覆った盛り土の道路という意味だと考えてきた。20年ほど前までに確認されたこうした道路は、ほとんどみな、このユカタン地方にだけ集中しており、その年代もモルモン経時代よりはるかに後代のものと考えられていた。しかしながら最近の研究では、道路建設には長い歴史があり、しかも中央アメリカ

の端から端まで及んでいたことがわかっていく。

現時点で知られている最古の道路は、ユカタン半島の最北端のコムツェンにある。チューレン大学のE・ウィリス・アンドリュースと彼の同僚たちは、そのうちのひとつの年代を、紀元前 300年頃のものとして推定している。（注1）ペリゼ（以前のイギリス領ホンジュラス）のセロスにある道路は、紀元前50年から紀元 150年頃の使用されたものである。（注2）この後、時代が下るとメソアメリカの最北端にあるメキシコのツァカテカス州ラ・クエマダにも道路が建設されていた。（注3）そのほか、メキシコ・シティーのすぐ南にあるソチカルコには、3キロに及ぶ舗装道路が存在し（注4）、またメキシ

ボルジア写本の複製。これは中央メキシコで発見されたもので、紀元700年頃までさかのぼって王家の出来事と征服の様子を記録している。また、これは折りたたみ式の羊皮の「本」であって、マヤの写本の形式と同じものである。マヤの写本というのは、野生のいちじくの木皮をたたいて作った紙に書かれたものであって、その表面にしっくい塗り、その上に人物、文字とも、極彩色を施したものである。



コのモンテ・アルバンにも道路があった。(注5) これまで報告されている道路の中には、いわば地方道といった感じの短い道路も多いが、ユカタン半島では、1本で長さが100キロにも及ぶものもあった。(注6) 道路建設の年代とその性質に関する最新の知識から見て、^{たいい}「平な道」がかつて実際に存在しており、キリストが亡くなられた時代にそれが「そこなわれ」(IIIニーファイ8:13)たとする考え方に何の矛盾もないことは、はっきりしている。

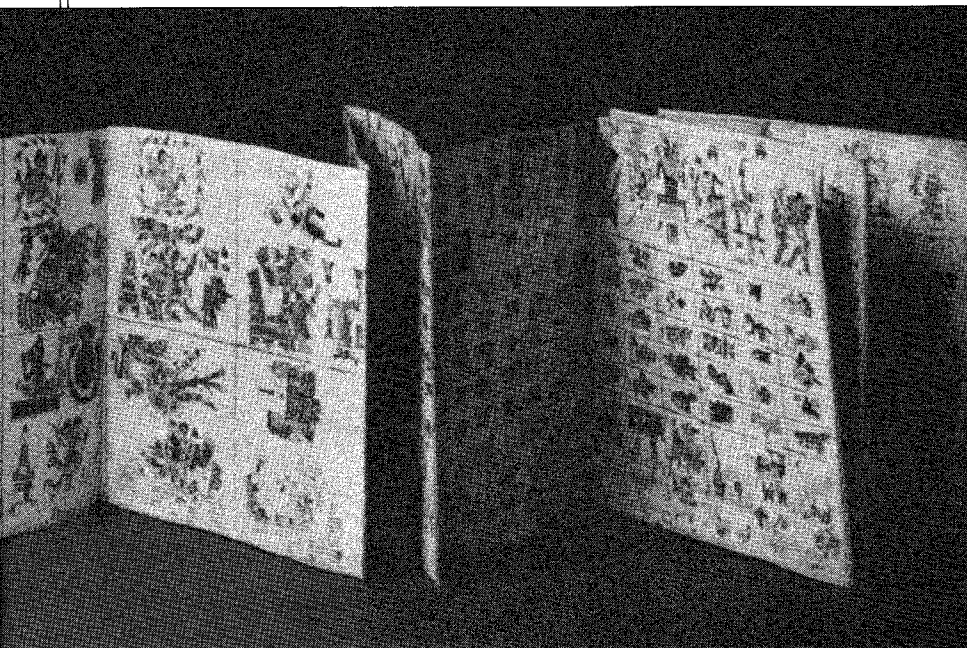
末日聖徒たちは、これまで古代のアメリカにおける「セメント」の存在について、長い間特別の関心を払ってきた。おそらくは、かつて専門家の中にも、そのようなものは存在しないと主張した者もいたはずである。しかしながら、ここ2世代の学者の中には、そのようなことを口にする学者はいない。メソアメリカ全域にわたって、様々な配合のコンクリートを使った構築物が散在し、しかもその耐久性も高いことがわかってきたからである。それゆえ、現在の時点で特別に関心を持たれていることは、単にセメントがあったかどうかということではなく、セメントを使いこなしたことに見られる、かなり高度な技術レベルのことである。たとえば、メキシコ・シティーの東にあ

るメキシコ湾に近いエル・タジンを例にあげてみよう。ここの屋根はコンクリートの一枚板で作られており、中には、支柱間を広さ75平方メートルにも及ぶ一枚板で覆ってある例すらある。この例の場合、セメントの配合成分は、細かくひいた貝がらに小さく砕いた軽石か陶器類の細片を混ぜた砂を加えたものであった。これが、あらかじめ用意されていた木枠に流し込まれたのである。ときには、家を建てる場合、まず部屋の中一杯に石や土を入れ、その表面を平らにしてコンクリートを流し込み、そして、そのコンクリートの天井が完全に乾いてから中の土や石を取り除く、という工法を使うこともあった。(注7) このタジンの遺跡の年代は、モルモン経の時代よりも後ではあるけれども、既にキリストの時代以前に、真正正銘のコンクリートが使われていたことを私たちは知っている。(注8)

モルモン経の中に登場する動物のことも、なかなか複雑な問題である。これは、ひとつには、馬、牛、山羊などと翻訳されている動物の名称が、こうした言葉を見たときに即座に脳裏に浮かぶ動物とは、必ずしも一致しないということにある。世界中どこでも同じだが、新しく移住して来た人々が動物に名前を付けるときの慣習のことを考えると、こうした過度に

単純な見方がいかに危険か、よくわかる。ひとつ例をあげてみよう。ニーファイの民は、初めて定住した土地で「山羊」と「野山羊」を発見している。(Iニーファイ18:25) それゆえ、「野」すなわち「野生の」という語の意味は、おそらく私たちが最初に考えるものとは異なっていたものと思われる。モルモン経の原文を読む限り、この2種類の動物とも、森の中で飼いならされていない状態で発見されたことが明らかだからである。以上のことから、この部分に記録されている動物が、私たちの考える山羊という動物と同じ種類のものであると推定することには、かなり無理があるということがはっきりとわかる。

動物(や植物)の名称の語義に関する問題は、いかなる文献であれ別の時代のものに解釈を施す場合、常に生じる。ほんの400年前に書かれた文献でさえ——ユカタン半島について書いたディエゴ・デ・ランダの文献のことである——現代の自然科学者がその意味を解明できないような表現をいろいろとしている。ある言語で表わされた名称や知識を、ひとつの文化から別の文化に移し替える作業には、絶えず様々な問題が伴う。それゆえ、スペイン人たちは、アメリカン・パイソン(つまり「バッファロー」)のことを、



単に「牛」としたし、アメリカ合衆国デラウェアに住むインディアンたちは、ヨーロッパの牛を、自分たちの言葉で「鹿」と呼んだ。また、現在のアメリカ合衆国ウィスコンシン州あたりに住んでいたマイアミ・インディアンたちは、私たちの言う羊に「牛もどき」という名前を付けた。さらにまた、マヤの低地民族は、スペインの羊を、面白おかしく「タマン」と呼んだ。これは、おおざっぱに翻訳すれば、「食べられる綿」ということである。僧正ランダは、ユカタン半島に住む小鹿を、「小さな野山羊の一種」として考えた。ランダはまた、「バク」について大きさはラバと同じくらいではあるが、ひずめは雄牛のようであると記しているものの、その「バク」に付けたスペイン語の名前は、翻訳すれば「むかしろば」というものであった。(注9)こうした特殊な用語法の問題はかなり複雑で、その解明には慎重の上にも慎重を期さなければならないことがわかっている。

科学的かつ歴史的な証拠を利用して、コロンブス以前のメソアメリカに実際に存在した動物はどれかということはかなり特定できるのだが、その作業からは、モルモン経に登場する動物がそれぞれ何に該当しているのか割り出せる可能性がかなりある。一例をあげれば、「家畜」と

いう語でまとめられている動物は、もしかしたら鹿かもしれない。コルテスの探検隊に加わっていた人たちが、マヤの国で、なかば家畜化された鹿の群れを見ているからである。(注10) また、エルサルバドルのある部族では、毎日の仕事として鹿の群れの番をしていたことが報告されている。また別の証拠から、らくだと同族で南アメリカにしかないはずのアルパカという動物が、南部メキシコにも存在していた可能性があることもわかっている。また、荷物を背負ったラマの立像が、北は遠くコスタリカあたりで出土している。人が動物にまたがっているところをとらえた立像——そのうちのひとつは間違いなく鹿の像である——も、メキシコやグアテマラで発見されている。(注11) 以上のことから考えて、おそらく、鹿が「馬」と呼ばれていたのではないかと推測することも可能である。

これまで述べてきたことをまとめてみると、現在入手できる限りの手がかりから判断して従来専門家が言ってきたような、コロンブス以前の時代のメソアメリカの民族は動物にはほとんど関心を示さず、また狩猟以外に動物を利用することは皆無に近かった、とする見解を受け入れることはできない。(注12) 現在のところ、モルモン経の中の動物に関するあら

ゆる記述が学問的な発見と合致しているわけではないが、ここ20年の間に、モルモン経の記述と学問的な発見の間に存在していた溝がどんどん埋められてきている。今後、一層研究が進むにつれて、おそらくは現在未解決のまま残されている問題点も、はっきりと解明されることであろう。

モルモン経には植物を栽培したことが書かれているが、そうした植物の中には、コロンブス以前の植物群の目録には見当たらないものもあって、そのためにモルモン経を読む人の中にはうろたえる人もいる。(批評家たちの意気はますます盛んになる) しかしながら、古代の農作物に関する私たちの知識は、今なお不完全である。これは、これまで考古学の研究の対象になった分野が、実際にはまだほんのわずかであったためである。(これまで発掘された資料の総数は、今後発掘が可能と思われる資料数のやっとな0.001パーセントに達したばかりであり、しかもこれまでの作業の多くがその精度に疑問がある、と考えたら少しは気が楽になるだろうか) つい去年のことであるが、「明らかに人の手で栽培されたものと思われる大麦が、新世界では初めて」アリゾナ州の南部から出土した。(注13) これが特に興味深いのは、モルモン経の中で、ニーファイの民の貨幣制度に関連して、大麦が日常的に使われていたと思わせる記述があるからである。(アルマ11: 7, 15参照) この例は、賢明な読者にも、また同様に専門家にも大きな警告となるはずである。「事実」も解釈もともに変化する。今日、歴史的かつ考古学的な記録から欠落している部分も、明日の研究で埋められるかもしれないのである。

最近、同じような性質の発見の報が、別のふたりの考古学者によって届けられた。このふたりは南アメリカで発掘の作業に従事していたのであるが、そこで「そこには存在するはずのない」植物を発見したのである。このテレンス・グリーダーとアルパート・ブエノ・メンドーサのふたりは、ペルーのコロンブス以前の遺跡から、マンゴーの実とバナナの葉の遺物を発見した、と報告している。これに

対し、ある考古学者からは、そのような物が「発見されるはずがない」とする反論が文書で出された。マンゴーやバナナが新世界に登場するのは、ヨーロッパ人がそれを持ち込んだ後の話だからというのがその理由である。しかし発掘者側は、これに答えて自分たちの発見したものの正しさを立証し、いささか憤激した調子で次のように述べた。「もし私たちが既に知っていることしか発見できないとしたら、だれが好き好んで発掘などという面倒な仕事をするだろうか。」(注14)もし発掘される資料の数が、現在の2倍に増えただけでも、私たちは、はるかに多い数の新しい資料に接することができるであろう。

大きな威儀を持つ新しい情報を生み出すのは、なにも発掘だけに限ったことではない。リンダ・シールは、ここ数年、マヤの絵文字の解読の研究で指導的役

割を果たしているが、とりわけ南部メキシコにあるあの壮大なパレンケの碑文には特別な関心を寄せていた。その結果、劇的な新しい情報が次々と生み出されているのである。

シールが明らかにしたことのひとつに、パレンケの支配者たちのおおよその統治期間を算定したことがあげられる。紀元600年から670年頃にかけて権力を握っていた支配者は、バカル大王という名前であつたらしい。この後にチャン・パーラムの統治が30年間続き、その後カクが40年間治めた。シールは「事実、マヤの王室の記録では、支配者が長生きしたことは例外的なことというよりも、むしろ標準的なことであつたものと思われる」と断言している。(注15)しかしながら、ここで算定した統治期間は、非現実的なほど長過ぎるのではないかと考える人々も

いる。その遺跡の「王家の」墓(ところで、この墓は際立ってエジプト的である〔注16〕)から発見された人骨を調査した自然人類学者たちは、一連の人骨がまだ若い男性のものであつたと考えているのである。

さてそうすると、ここで矛盾が生じることになる。人骨から出された事実と、記録から出された事実とが異なっているのである。しかしながら、この問題についてはまだ決着を見ていない。同様にモルモン経を批判する人々の中には、ジェレドの民の支配者たちの統治の年齢と期間には、信憑性がないとする人もいる。そうすると、モルモン経もマヤの碑文と同様に、科学と歴史との間でまだ最終決定を見ていない情報を握っていることになろう。重要なことは、ジェレドの民の記録が、ほかの古代の記録と似ているために、その信頼度が高まっているということである。

そのほかの広範な話題についても資料を分析してみると、モルモン経の内容と現在メソアメリカの専門家たちが持っている知識とが合致する点、次から次へと出てくるのである。それも大筋において合致しているだけでなく、ときにはほんのささいな点にまで一致が見られるのである。ゼニフの民に利用された穀物の中に、「シウム」(モーサヤ9:9)という翻訳されていない名称のものがあつたが、140年間の空白を乗り越えて、これは大麦を意味するアッカド語(バビロニア語)の「シウム」であるとうやく認められるに至った。(面白いことに、このシウムという語形は、ジェレドの民がメソポタミアを出発した紀元前3000年頃の語形であつて、後代のものではない。)(注17)マヤ語で金を意味する「ナブ」という語は、同じ意味を持つエジプト語の「ナウブ」と対応する。銅を意味するソーケイ語の「ハマティン」は、やはり銅を意味するエジプト語の「ハムティ」を連想させる。アルマとサムエルは、ある幾つかの周期の最後のときは重大な事件が起きると予言しており、その中には400年を周期とするものも含まれているが、マヤの予言者たちも同じようなことを予



メキシコのメキシコ・シティーの近くにあるティオティワカンの遺跡で土台を復元したもの。これを見ると、古代のメソアメリカでもセメントを使えるほどの技術を持っていたことがわかる。

言しているのである。(注18)こういった例は枚挙にいとまがない。

繰り返して

これまで繰り返して述べてきたことであるが、規模の大小を問わずメソアメリカの文化とモルモン経の民との間で、地理的にも歴史的にもさらにまた文化形式の上でも共通する点が見られたとしても、それは何かを結論的に「証明」していることにはならない。しかし、それでもなお、そうした共通点が数多く見られるという事実は、真理を愛する人々にとって大層意味のあることには違いない。このことを心に留めれば、「インディアンを起源とする」モルモン経の物語の正統性を裏づけるような「重要な考古学的証拠」などは何も存在しないと断言する(注19)学者や、真面目な気持ちでモルモン経と歴史的に重要な客観的事実とを比較検討しようとするなど物笑いの種だと主張する学者は、明らかに過ちを犯していることになる。(注20)

最新の情報に接している人々は、そのような時代遅れで大人気のないことを言うてはならない。もちろん、いかなる考古学者といえども、適切な資料の準備がなければ、モルモン経の史的確実性などといったことについては、むやみに口を差しはさむべきではなかろう。モルモン経に書かれている文化と、メソアメリカに関する莫大な量の資料との間に見られる一致点については、旧世界の文化との一致点について検証するまでもなく、これまでいろいろと紹介してきたが、これだけ紹介すれば、ひとりよがりの自称評論家たちも、しばらくの間は沈黙を保って、複雑に入り組んだ情報の山を丹念に調査することであろう。そして本気でこの問題について研究し、意見を述べる人々は、正しい方法に従って行なうときに初めてそれが可能なのである。

外部の資料から得られた様々な事実を丹念に比較検討した結果、私個人の考えでは、その検討作業の大半がまだ手つかずであったとしても、モルモン経は極めて感銘的な書物であると言える。しかしながら、モルモン経に関する学問的研究



人が鹿に乗っているこの像は、香炉のふたに施された装飾である。全長26.5センチ。鹿の角と人物の頭飾りの中央部分に欠損がみられる。グアテマラのポブタンから出土したもの。

がいかなる形で進もうとも、モルモン経自体は、そうした業績からは超越し独立した存在なのである。批判者であれ擁護者であれ、歴史を変えることはできない。できるのは、ある事実について注釈を施すことだけであるが、その事実は、えてして注釈の言葉以上に深い影響力を持っているものなのである。

今世紀の最初の30年間では、メソアメリカの専門家が握っていた情報も非常に乏しく、そのためこの地域の文明に関しても重大な誤解がかなりあったが、それは驚くには及ばない。当時の学者たちも、入手できる限りの情報を駆使して最善を尽くしたことは間違いない。ただ限界があったのである。今日も同じである。いかに優れた情報を与えられた学者であっても、長い目で見れば、古代アメリカに関する重大な問題について間違いを犯さざるを得ないのである。こうした過ちを

防ぐための最善の方法は、心を開いておくことである。

最近、メソアメリカを専門とする考古学者たちが、その仲間のひとりから厳しい批判を受けた。その理由は「もはや支持することのできない仮説に断固としてまた傲慢なまでに固執するかたくなさ。……新しい発見により、……昔の仮説には様々な疑問が投げかけられている。それにもかかわらず、そうした仮説は、スペイン人侵入以前のメソアメリカの住民に関する科学的な知識を無視してまでも、理論として提示され、熱烈に擁護された」ためであるとジュデス・アン・レミントン博士は語っている。(注21)博士の不満は、現在その道の指導者として認められている考古学者たちが、新しい解釈、すなわち従来の通説に合わない考え方などは、「ピラミッドの神秘的な性格だとか、異星人の来襲だとか、イスラエルの失わ

れた支族の探索などについて語ることに極めて近い、危険な……空想空論である」とみなしていることである。(注22)博士はまた、メソアメリカを専門に研究する新しい世代が興^{おこ}ってきて、もっと心を広く、そしてある著名な人物が言うように、従来の通説にとらわれない考え方をしたら「メソアメリカ研究の全分野が大混乱に陥る」のではないかなどということには目もくれず、ただただ真理を探究することにもっと関心を持ってほしいものと願っているのである。私たち末日聖徒は、新しい世代の人たちが現在の考古学上の発見と関連して、真面目にモルモン経と取り組んでくれるものと期待している。(注23)

しかしながら学者たちにその心の狭さのゆえに批判されたからといって、私たちは、我のみ正しというような気持ちを抱くことはない。私たちとて、ある分野、とりわけ考古学に関連する分野においては、事実に変えて、聞こえのよい「素人うけのする」説にあくまでも固執しようとする傾向があるからである。私たちは、古代のニーファイの民とジェレドの民について、新しい事実と新しい解釈が出てくることを期待している。確実に、そういう時代が来るからである。B・H・ロバーツ長老は、こうした心の広さについて次のように賢明な教えを説いている。

「ここで、今までのモルモン経の知識に新しい発見が加えられることについてひと言述べさせていただきたい。また、それと関連して、地上における主のみ業にかかわりのあるあらゆる問題についてもひと言申しあげたい。私たちは、いかなる意味でも恐れ^{おそ}れの気持ちでこうした研究の推移を見守っている必要はない。私たちが望むことは、ただ真理が明らかにされることだけである。真理を除いてほかに終わりまで持ちこたえることのできるものはない。そして、いかなる場合であれ、あるいはいかなる話題であれ、真理を明らかにし、真理を宣べ伝えることによって主のみ業が損なわれることはない。それ自体が真理だからである。私たちの先達の多くは、その望みに従い、真理を明らかにした業績のゆえに、名声を

受け、私たちの尊敬と感謝との対象になっている。しかし、たとえその人々が、ときにその考え方や推論で過ちを犯したからといって、驚くには及ばない。私たちの後に続く世代の人々が、現在まだ説明のつかない福音の真理の一部でも大々的に明らかにしてくれるときが来たら、私たちもやはりこの時代に、誤った概念を持っていたり、間違った推論をしていたことがわかるであろう。……」

(注24) モルモン経自体の内容からも、そしてまたモルモン経に関しても、新しい真理を見つけ出し、それを受け入れることができるように準備をしておくことは、とりわけ教会員に託された大切な使命なのである。

注

1. E. Wyllys Andrews V et al., "Komchen: An Early Maya Community in Northwest Yucatan." Paper given at 1981 meeting of the Sociedad Mexicana de Antropologia, San Cristobal, Chiapas, p. 15.

2. E. Wyllys Andrews V, "Dzibilchaltun," in J. A. Sabloff, volume editor, *Supplement to the Handbook of Middle American Indians*, vol. 1, Archaeology (Austin: University of Texas press, 1981), p. 322.

3. Pedro Armillas, "Investigaciones Arqueologicas en el Estado de Zacatecas," *Boletin INAH* 14 (Dic. 1963), pp. 16-17.

4. "Current Research," *American Antiquity* 45 (1980), p. 623.

5. Richard E. Blanton and Stephen A. Kowalewski, "Monte Alban and After in the Valley of Oaxaca," in J. A. Sabloff, op cit., p. 106.

6. Antonio Bustillos Carrillo, *El Sacbe de los Mayas: Los Caminos Blancos de los Mayas, Base de su Vida Social y Religion*, 2d ed. (Mexico: B. Costa-Amic Editorial, 1974), p. 23.

7. Instituto Nacional de Antropologia e Historia, *El Tajin: Official Guide* (Mexico: INAH, 1976).

8. David S. Hyman, *Precolumbian Cements: A Study of Calcareous Cements in Prehispanic Mesoamerican Building Construction*. (Baltimore: Johns Hopkins University Department of Geography and Environmental Engineering, 1970), p. ii. Maurice Daumas, ed. *Histoire Generale des Techniques*, Tome I (Paris: Presses Universitaires de France, 1962), p. 403.

9. John L. Sorenson, *An Ancient American Setting for the Book of Mormon*,

(Provo: FARMS, in press). 第7章では、文書の調査が詳細にわたって取りあげられている。

10. Dennis Puleston, "The Role of Semi-domesticated Animal Resources in Middle American Subsistence," 1972年, アメリカ考古学学会の第37年次大会で読みあげられた論文。

11. A. V. Kidder, "Miscellaneous Specimens from Mesoamerica," *Carnegie Institution of Washington, Notes on Middle American Archaeology and Ethnology*, no. 117 (Mar. 1954), p. 20, Fig. 4e. 関係する文書調査は次の拙論にある。"Wheeled Figurines in the Ancient World," *Foundation for Ancient Research and Mormon Studies, Preliminary Report* (Provo, 1981), p. 14.

12. Eugene Hunn, "Did the Aztecs Lack Potential Animal Domesticates?" *American Ethnologist* 9 (1982), pp. 578-88.

13. Daniel B. Adams, "Last Ditch Archaeology," *Science* 83 (December 1983), p. 32.

14. "Letters to the Editor," *Archaeology* 34 (May-June, 1981), p. 7.

15. Linda Schele, "Sacred Site and World-View at Palenque," in E. P. Benson, ed., *Mesoamerican Sites and World-Views* (Washington: Dumbarton Oaks, 1981), pp. 112, 116-17.

16. Alberto Ruz L., *Costumbres Funerarias de los Antiguos Mayas* (Mexico: UNAM, Seminario de Cultura Maya, 1968); Alberto Ruz L., *Palenque: Official Guide* (Mexico: INAH, 1960), p. 46.

17. Robert F. Smith, "Some 'Neologisms' from the Mormon Canon," in *Conference on the Language of the Mormons*, 1973 (Provo: Brigham Young University, Language Research Center, 1973), p. 66.

18. Sorenson, *An Ancient American Setting*, Ch. 6, pp. 28-33 of the manuscript.

19. Marvin Hill, "Review of *The Mormon Experience*," *American Historical Review* 84-85 (December 1979), p. 1488.

20. "7EP Interviews Sterling M. McMurrin," *Seventh East Press*, Provo, Utah, January 11, 1983, p. 5.

21. Judith Ann Remington, "Mesoamerican Archaeoastronomy: Parallax, Perspective, and Focus," in Ray A. Williamson, editor, *Archaeoastronomy in the Americas*, Ballena Press Anthropological Papers, No. 22 (Los Altos, Calif.: Ballena Press, 1981), pp. 200-2.

22. 同上, p. 202.

23. *An Ancient American Setting for the Book of Mormon* には、そうした事例の先駆けともいえる記事が紹介してある。注13参照

24. B. H. Roberts, *New Witnesses for God*, II, The Book of Mormon, in three volumes, Vol. III. (Salt Lake City: Deseret News, 1951 [1909]), pp. 503-4.

秘密を守る

ラリー・ヒラー

所 属のワード部で数年前に大きな資金獲得行事を担当したことがありました。行事が首尾よく終わって、一緒に働いてくれた人々は、ほっと息をつきました。しかし私にはまだひとつ大きな気がかり、つまり資金の集計を出すことが残っていました。必要経費の支払いがあり、また、支払った金額に対しては正確な領収書を送り状をそろえておく必要がありました。教会の資金を適正に運用したことに疑問の余地がないことを確認すれば、私の心も安まるのです。監督が私のことを信用していることはわかっている、一点の疑いもないようにしてお

きたかったのです。

最近別の出来事があって、他人の所有物を誠実に扱うことについてさらに深く考えさせられました。内密に個人的な問題を話したいと友人が訪ねてきました。事情を聞いているうちに、助言よりはむしろ話を聞いてくれる人を欲していることがわかりました。彼から聞いた話が他人に知れたら、彼はきっと窮地に追い込まれるに違いありません。私が彼の信頼を裏切らないと信じてくれていたのです。

手で触れる他人の持ち物をわざと粗末

に扱う人は少ないと思います。もちろん窃盗事件などは毎日のように耳にしますが、いわゆる財産に関しては依然として基本的に正直な人が多いようです。しかしながら、たとえば情報のように手で触れることのできないものについてはどうでしょうか。私たちの誠実さをそこまで表わしているのでしょうか。秘密を守ることの価値については長い間学んできましたが、教会でも一般社会でもその価値は大です。

情報は多くの点で貨幣のようなものです。政治やビジネスの世界では、信頼できる情報は売買、交換の対象になる商品

いわゆる財産に関しては依然として基本的に正直な人が多いようです。しかしながら、たとえば情報のように手で触れることのできないものについてはどうでしょうか。



なのです。価値ある情報を持つ人は、目的があってその情報を欲している人にとっては何をにおいても追い求められる存在です。

十分に裏づけのある情報は富と同じで、権力を得る手段として重要な意味を持ちます。さらにお金と同様に、情報は良くも悪しくも用いられます。誘惑と落とし穴はよく似ています。実際のところ、情報の誤用と金銭の誤用とは興味深い比較ができるのです。

「利己心の強い人」

自由にお金を使う（そのために借金をすることも）ことで、自分が偉くなったような気になりたい、あるいはそう見られたいと思う人はたくさんいます。同様に、人が知らないことを教えてあげることによって自分が偉くなったような気分になりたいものです。お金と同じで情報も、使わないことには人に認めてもらえません。使わせようとする誘惑は非常に強力です。人のことをおもしろおかしくうわさしたり、将来起こる出来事について自分がつかんだ情報を披露し合うような場に同席したことがある人は多くいると思います。話が進むにつれて、だれもが人の知らない話を提供しようとしています。これはもう利己心の問題です。

そういうときは憶測やうわさ、陰口といった自分の持っていない情報を「使う」誘惑に陥っているか、悪くすれば信頼を裏切るやり方で自分のものでない情報を提供する誘惑に駆られているのです。「信頼できる情報は持っているがしゃべるわけにはいかないんだ」と思着せがましく言う人もいます。（こういう認識には「でも話そうと思えばいくらでも話せるんだ」という思いがしばしば潜んでいます）

「にせ金造り」

この種の人は、正しい情報が得られないときには簡単に創作してしまいます。もちろん、真実の要素をたくさん含んでいるので、彼の創作が流布されれば、実際真に迫っているに違いありません。し

かし作りあげた結果はあくまでもうそののです。

にせ金造りが貨幣の価値を落とし、すべてのお金を疑わしくするように、うそや誤った情報がすべての情報を疑わしくしてしまいます。不正確な情報が社会に出現することで真実な情報の大半が疑いをもって受けとめられるので、大切な意思の伝達がより困難になります。にせ金造りとその役割を考えると、「偽りの父」という称号を受けている者の存在を忘れてはならないと思います。（モーセ 4：4）

「どろぼう」

他人の生活や行動に過度に興味を持つ人がいます。人を実によく観察していて、根掘り葉掘り質問をします。それを自分の考えと短絡的に結びつけて、真偽のほどが確かでない結論を出してしまいます。往々にして間違っている方が多いのですが、それは大した問題ではありません。むしろ自分が価値ありと思えることを見つけるやいなや、本当は自分のものではないものを悪用することが問題なのです。

別に詮索好きではなくても、たとえば偶然見たり、耳に入ってきたりすれば誘惑にかられることがあります。この種の情報はお金を見つけたようなものです。正直な人は他人の財布を見つけても中のお金に一銭も手をつけないと思います。どのようにしてでも持ち主に返そうとするでしょう。そして持ち主が現われるまでの間は、安全な所にしまっておくものです。

「詐欺師」

この種の人は友情や信頼を深めると見せかけて、他人のプライバシーに巧妙に立ち入ってきます。ときには打ち解けた雰囲気を作るためにわずかな情報をえさにして、積極的に新しい情報を探します。新しいお金が使いたいばかりに、どんどん自分のやり方を進めていく人です。

「浪費家」

銀行に残高のない人、あるいはポケッ

トにさえお金を残しておけない人がいるものです。持っていたら使わずにいられないのです。お金の力と買う楽しみを知ったばかりの子供には、ごくありふれた衝動です。しかし大人にとっては信用の失墜や破産をも招く悲惨な性癖です。

私たちの多くは情報の浪費家に会っています。この人はこちらが当惑するほど自分の生活をあからさまにします。自分に関する情報を流すときのなれなれしさに、親友にも同じことを求めるのです。問題は、この人々が自分と同じように他人の情報も軽率に扱う点です。慎重に扱うべき情報をそのような人に打ち明けることは、借りたお金をばくち打ちに預けるようなものです。

「投機師」

金融の世界では、投機師はお金が増えて戻ってくると期待できるものに投資します。経済情報や動向を見つめ、市場や商社の将来を予見しようと必死です。

情報の投機師も基本的には同じことをします。彼らは人や組織を実によく見ています。力強く成長している教会では組織やプログラムに比較的頻繁に変更があります。私たちはそれに慣れていますが、彼らにとっては興味の尽きないところです。あらゆる召しにやまを張ります。たとえば、現在の扶助協会会長は妊娠しているからやがて解任されるに違いないとか、ジョーンズ姉妹がつい最近ステーク部の扶助協会管理会員から解任されたばかりだから、「もう少し小さな」召しにつくのではないかなどということに注目しているのです。若い女性の会長会や初等協会の会長会で何度も働いてきたこと、ワード部の姉妹たちから好かれていること、小さい子がいないこと、ご主人が協力的であることなどを並べ立てます。彼女を選ぶことが一番良いと思い込むと、今度は彼女を召すように申し入れるだけではなくて、ジョーンズ姉妹が非常に親しくしているふたりの婦人を副会長に選ぶところまでやります。

もしジョーンズ姉妹が本当に扶助協会の会長に召されると、投機師たちは互い

に、思った通りと言わんばかりにうなずき合うのです。彼ら（彼女たち）が選んだ候補者がひとりでも副会長に召されたら、同じようにうなずき合います。もうひとりの思わくがはずれたときには、彼女は会長と仲たがいをしたのだろうとか、家庭に問題がある、あるいは監督と折り合いが悪いなどという理由をつけるのです。

このような思わくは靈感の入り込む余地を与えません。あるのは表面的な現象や人間関係、個人的な影響力だけです。思わくが当たったとき、彼ら（彼女たち）はだれに栄誉を帰すのでしょうか。主ではありません。みたまの確認を求めてそれを受けたすばらしい神権者でもありません。かけ引きや理屈が暗に名誉を得るのです。

思わくの対象にされた人はときとして傷つけられることがあります。私の知っているひとつの例では、ある人が監督に召されるだろうという推測が公然となされただけでなく、当人にも「候補者」として知らされたのです。言われた本人は召される感じがしなかったのですが、いざ別の新しい監督が召されて「慰め」の言葉をかけられたり、なぜ彼は召されなかったのだろうという疑問を耳にしたりすると、大変に不愉快な気分になったのです。

思わくは信仰を弱め、証を汚す力を持っています。両親からこういった思わくを聞かされる子供は一体何を学ぶのでしょうか。不活発会員や求道者は、手本となるべき活発会員がうわさや思わくにふけていたらどう思うのでしょうか。

「横領」

会社の従業員が任された会社のお金を横領して、そのために倒産という事態が起こる例が時々あります。同じように、内密の情報を託された人がその特権を乱用することがあります。

他人の生活にかかわる個人的な情報は、いかに私たちの耳に達しようとも、私たちが勝手に処理してはならないものです。もし人が私たちを信頼して打ち明けたと



うわさ話の大きな問題は、たとえ「本当」であっても言葉と行動だけ、つまり表面的なものだけが伝わる場合が多いことです。

したら、その情報は信用して預けられたお金のようなものです。持っているからといって使ってよいということではないからです。

多くの社会では、法律家や医師、聖職者たちが個人の秘密を誤用しないように人々を守る法律があります。しかし一般的には、公には知られたくないと願っている私たちのプライバシーを、友人や知人が守ってくれるという誠実さに信頼を寄せることになります。

家族（特に配偶者）には最も信頼を必要とされるのではないのでしょうか。しかも互いに最も信頼をおくことのできる間柄です。しかしその信頼を裏切る人もいます。18年近くも前に一緒に働いたふたりの人のことを今でもよく覚えています。私が婚約したことを知って、ふたりは自分の奥さんたちについてかなり私的な話を聞かせました。私は聞きたくなくて、なるべく早くふたりのもとから離れたいと願ったほどです。当時の私がもう少し大人だったら、そんな話は聞きたくないし、奥さんがふたりの裏切りを知ったらぞっとするに違いないとやさしく諭したものをと思います。それでも彼らが犯していた大きな過ちを見きわめるだけの分

別はあって、私は決してそんなふうに妻を裏切るのはいさうと心に誓ったものでした。

教会においても、私たちはだれでも情報を横領するという誘惑から身を守る必要があります。提案された変更や召しに関する情報を扱う立場にある人、あるいは他人の生活に深くかかわっている情報を持っている人は、適切さを欠いて情報が漏れることのないように特に注意しなければなりません。この忠告は監督やほかの神権指導者だけに限られたものではなく、補助組織の指導者やホームティーチャー、訪問教師、まさに一人一人に及ぶもののなのです。

信頼に足るということは、模範によっても教訓によっても、次の世代に引き継ぐべき望ましい特性です。現在、教会の広報部門を率いるリチャード・P・リンゼイは、信頼できる友人のひとりです。秘密を守ることにかけては絶対的な信頼をおいてよい人です。その彼が、貴重な教訓を得るものになった、青年の頃のある出来事について語ってくれました。

新婚間もないリンゼイ夫妻が75年の歴史を持つ所属のワード部が初めて分割されるという発表を聞いたときは、ちょう

どカリフォルニアへ旅立つところでした。リンゼイ兄弟の亡くなった父親がかつてそのワード部の監督を長い間務めたことがあったので、息子であるリンゼイ兄弟は監督の交代がとても気がかりで仕方なかったそうです。しかしふたりはちょうど町を出るところだったので、新しい監督について詳しいことを耳にするのはしばらく後のことになるはずでした。

リンゼイ兄弟の義父は当時高等評議員でした。そこでリンゼイ兄弟は、町を離れる直前に義父のもとを訪ね、新しい監督の名前をそっと教えてもらうわけにはいかないだろうかと頼みました。リンゼイ兄弟姉妹は、自分たちはすぐに町を出るので、ほかに話そうにも話す相手がないから、聞いても大丈夫だと考えたのです。

高等評議員である義父は、義理の息子であるリンゼイ兄弟を脇へ呼んでそっと尋ねました。「秘密を守れるかね。」

「大丈夫です。」リンゼイ兄弟は確信を持って答えました。

すると義父がこう言いました。「私も同じだ。秘密は守る。」会話はそれで終わりましたが、そのときの教訓は今でも生き続いています。

ボイド・K・パッカー長老は、教会職員への1980年度の説教の中で、ジョセフ・アンダーソン長老について尊敬をこめて次のように語っています。「長老は50年近くも大管長会の秘書を務めておられます。毎日大管長会と共に席に着き、その会議に耳を傾け、すべての議事録をつけていらっしゃるようです。50年の間一度も信頼を裏切ることはありませんでした。デビッド・O・マッケイ大管長はかつてジョセフ・アンダーソン長老についてこう言われました。『あの方は私の知るどの人よりも言葉に慎みがあります。』」

「市場」

お金を使う市場があるように、情報にとっても市場があります。そして使い方を誤った情報の大半はおそらく、あえて言えば「ゴシップ」とか「うわさ話」と呼ばれる市場で使われるのです。それも

野外の市場です。

はっきり言って、うわさ話について論じないで、信頼についての論議を終えることはできないでしょう。不幸なことに「ゴシップ」は多くの点で「悔い改め」によく似ています。この言葉を一番聞く必要のある人が、すぐにへ理屈という壁の陰に身を隠してしまうからです。

あまりにも簡単にもっともらしい理屈をつけるところに、うわさ話の大きな問題があります。ほかの人がそれをするからうわさ話なのです。本人がする分には、単なる打ちとけた会話ですみます。強盗は強盗であり、不義は不義であって、名称は行為のあとにしっかりくっついてくるものです。しかしうわさ話は別名で行き交うのが普通です。

非現実的なうわさについて、「いいではないか、根も葉もないことなのだから」と簡単に片づけてしまう人があまりにも多すぎます。たとえ一部が真実であったとしても、それは他人の干渉することではないのです。本当のことだからと言ってうわさ話を正当化することは、必要だから盗んだのだと言ってどろぼうを正当化することと変わりありません。また、みんな知っていることだからと言ってうわさ話の言い訳をするのは、「他人がやっている」からと言って罪を正当化することと同じです。

うわさ話は時に親切心の仮面をかぶることがあります。第三者の個人的な問題点や弱点について、意外だという気持ちを表わしながら、心に感じた否定的な面ばかりをこと細かに人に伝えて歩くのです。そしていつも、悲しいけれど事実なのだからと言って正当化します。ある書評に、登場人物のひとりがうわさ話の常習犯で、他人の不幸をかぎつくと「悲しみに生き生きする」存在として描かれていたのを思い出します。

うわさ話の大きな問題は、たとえ「本当」であっても言葉と行動だけ、つまり表面的なものだけが伝わる場合が多いことです。動機や情状酌量の余地、悔い改めている気持ちなどは往々にして伝わりません。たとえ動機まで含めた話だとし

ても、大体は推測です。人には、うわさになっている人に対する自分の感情を、話した人のせいにする習性があります。ですから、うわさを伝えた人が話題の主に心から同情しているとしたら、その動機は純粹なものとしてそのまま受け入れられるのですが、ひとかけらの同情もないとしたら、その動機は見下げはてたものとなってしまいます。

私たちが互に関心を示し合うのは当然のことです。情報交換の場も、もちろんあります。しかし注意しなければならないのは、話す前に動機を調べてよく考えることです。ひとたび公になったら取り消すのは不可能です。そして情報が誤って使われると、個人も組織も深い傷を負います。私たちが秘密を守ることで争いや不満の大半は避けられるのです。「たきぎがなければ火は消え、人のよしあしを言う者がなければ争いはやむ。」(箴言 26:20)

情報を扱うマナーはお金の場合と同じで、私たちの成熟度と誠実さを物語ります。主に奉仕するときの私たちの価値は、喜んで働く気持ちだけではなく、情報を守る能力の面において信頼に足る存在であるかどうかにもかかっています。安心して情報を託せる人は、品物を任せても大丈夫な人なのです。

私たちは、情報伝達に賢明な判断を下すことで信頼の絆を強めることができます。分別を働かせて話をすれば、敵が私たちを分裂させる機会は減り、敵の活躍の場は消えていくことでしょう。

言葉の賜や意思の伝達の能力は神から受け継いだものです。誤って使えば自分を傷つけることになります。「審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである。」(マタイ12:36-37)

* ラリー・ヒラー：現在教会国際機関誌編集主幹を務めているが、かつては監督として働き、今はテラーズビル・ユタ・セントラルステーキ部で高等評議員として召されている。



F・エンツィオ・ブッシュェ長老

地の果てまで

ジャン・U・ピンボロー

ブッシュェ長老は1977年に七十人第一定会員会会員として召され、現在は北アメリカ北西部担当地域会長会の任にある。(写真中) 8歳のエンツィオ。少年時代を過ごした家のテラスで。

七 十人第一定会員のF・エンツィオ・ブッシュェ長老の幼年時代は、田園詩的とも言える素朴なものでした。西ドイツのドルトムントでやさしい両親のもとに生まれた長老は、4人の姉妹と共に、父親がみずから設計し、建てた美しい広々とした石造りの家で育ちました。子供思いの彼の父親は、いろいろな動物を飼い、子供たちが外でのびのびと遊べるように広い土地を用意するなど、家族のために完璧なまでの環境作りをしてくれたのです。また彼が初めて手にしたハンス・クリスチャン・アンデルセンやグリム兄弟の童話は、彼に想像性に富んだ様々な背景を提供してくれました。

エンツィオがちょうど9歳になった1939年、ドルトムントは英軍による最初の爆撃を受けました。その後続いて起こった恐ろしい戦争は、彼の平和な世界を乱し、若者としての彼の夢を無残にも打ち砕いてしまいました。彼の家族は一時、ドイツ西部に避難し、その後南部に移動しました。そこで彼らは2部屋だけの生活を強いられることになったのです。

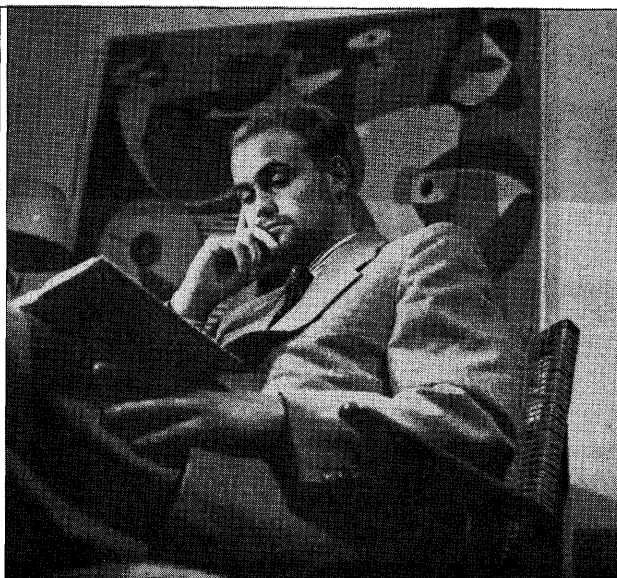
10歳になったエンツィオは、10歳から

18歳までの男子全員が入隊することになっていた、ヒットラー青年隊に入隊しました。やがて敗戦の色が濃くなってくると、ヒットラー青年隊の14歳以上の若者は皆、第三帝国の軍隊に召集されました。14歳になっていたエンツィオも、思いがけなく一兵士となったのです。しかし、ほとんど絶望的であったこの軍隊の一員として、恐怖と悲慘さを経験したわずか数週間後、彼は捕虜となり、米軍の収容所に連れていかれました。彼はそこで銃殺されるものと、覚悟を決めていました。ところが驚いたことに、彼は何の危害も加えられず釈放され、帰宅を許されたのです。

1945年6月、エンツィオが故郷のドルトムントに帰ってみると、彼の家は米軍の爆撃によって焼かれ、その焼け跡にはただ粗末な小屋が建っているだけでした。幸いにもブッシュェ家には羊がいて、ミルクを手に入れることができました。またいくらか土地もあり、彼らはそこで何軒かの家族と一緒に、じゃがいもの栽培にあたりました。皮肉なことに、ひとつの侵略行為が、ドルトムント郊外の人々を

その後数カ月間にわたって飢死寸前の状態から救うことになったのです。それは戦争終結直前に、アメリカ軍がドイツの軍用補給列車を襲ったことから始まりました。弾丸に打ち抜かれ、穴だらけになった貨車から糖蜜^{とうみつ}があふれ出てきたのです。町の人々は、手に手にあらゆる器を持ち、そのねばつく命の糧で器を一杯に満たしたのです。この蜜のおかげで、町の人々は2年間も生き延びることができました。

1946年には、ドルトムントの学校も再開されました。しかし若いエンツィオは、その残された高校生活に、深い疑問と悩みを抱き始めたのです。戦争が始まるまでは、教師たちもヒットラーの教えをドイツの病巣を癒す薬として賞賛していました。しかし今となって、彼らはその教えに触れることすら拒否し出したのです。一体どういうことなのか。大人たちは善悪の区別もつかないのだろうか。そうした状況に幻滅を感じた彼は、しんらつな、何事にも冷笑的な人間になっていきました。何かを求めながらも、彼の心はすっかりふさぎ込んでいったのです。



(左) 第2次大戦の終戦時に、捕虜収容所から解放された頃のエンツィオ。15歳であった。(中央) 1954年当時。この頃からブッシュ印刷会社の発展が始まった。(右) エンツィオ・ブッシュとジャッタ・バウムの婚約記念写真。1954年。

ボンとフライブルクでの大学生活を終えると、彼は戦禍からようやく立ち直った父親の経営する印刷会社で働き始めました。エンツィオはそこで、職人として必要な免許を取得するかたわら、印刷に関するより高度な技術を学んでいきました。

しかしなお、彼は心の底で、人生の真の意義を問うていたのです。歴史的見地から見たキリスト教に、彼は少しの感動も覚えませんでした。また哲学や東洋の宗教を学んではみたものの、そこには何の答えも見いだすことができませんでした。どうして結婚などできようか、この苛酷な予測できない世界にどうして子供たちを迎えることができようか、彼はそう考えていたのです。こうして彼は、忠誠を誓える価値のあるもの、意義のあるものを求め続けたのです。

エンツィオは、7歳のときに会った美しいジャッタ・バウムに、長年にわたり愛を注いできました。彼がおもちゃのブロックで、手の込んだ大きな教会堂をやっと完成させたときです。親しくしていた家族の2歳になる娘ジャッタが、彼の部屋に入ってくるなり、足でけり、その傑作を壊してしまったのです。しかしエンツィオは、彼女をすぐに許してやりました。

1955年、エンツィオが25歳、ジャッタが20歳のとき、ふたりは結婚しました。しかし、結婚後もエンツィオの心のジレンマは消えませんでした。それどころか

悩みは一層深まっていきました。というのも、結婚生活自体が彼の望んでいたようなものではなかったのです。新婚時代のふたりは、お互いの目的にずれを感じながら、ときには意見の違いや衝突から孤独感を感じつつ、そのままずるずると生活を続けていたのです。

そのしんらつで不幸な、しかし探究心の旺盛な若者であった彼が、今ではまったく謙遜にそして忠実にみたまの導きに従う、主の信仰あつい僕なのです。

教会本部ビルのF・エンツィオ・ブッシュ長老のオフィスの壁に、これまでの彼の生涯を物語ってくれるものをいくつか見ることができます。ひとつは、やさしい笑顔のお父さんの写真です。ブッシュ長老のお父さんは、1964年に亡くなっていますが、お父さんの示してくれた正直と正義の模範は、今なお長老の中で息づいています。もうひとつは、戦後修復され、今なおブッシュ長老の母親が住む、ドルトムントの家で撮った愛らしい幼年時代の彼の写真です。しかし、その彼がどのようにしてイエス・キリストの福音に改宗することになったかは、ブッシュ長老自身でなければ語ることはできません。

彼の生活のひとつの転機となった経験を、ブッシュ長老は敬虔さに確信を交えながら、静かにこう語ります。「私は死と直面したのです。」ブッシュ長老は、肝臓を悪くし、医師に見放され、生命維持装置をはずされたほどの重症患者だったの

です。家族の人々にとって、彼の苦しむさまを見るのはしのびないことでした。

だれもが彼の死を予測していたその日、彼は激痛にさいなまれながら、後の世を間近にしてひとり横たわっていました。そのとき突然、彼は「霊的現われ」と呼ぶすばらしい経験をしました。彼は肉体を抜け出して、自分の姿を見ていたのです。それは実に皮肉屋で気のきかない、恩知らずの、そして責任感のない、罪だらけの自分の姿でした。彼は、次の世に行くには自分あまりにも汚れており、備えができていないように思えたのです。「私はひどく心を痛め、だれかに代わってもらうか、清め、助けてもらわなければ、次の世に入ることができないと思ったのです。つまり、贖い主の必要性を感じたのです。」

彼は、もう一度やり直したい、清くなりたい、今までとは違った生き方をしたいと心から願いながら、数日間悩み続けました。そんな中で、彼は言葉では言い表わせられないような神聖な体験をしたのです。まぎれもなく権威ある者の声が、彼にこう語りかけたのです。「今祈りを捧げるなら、あなたは癒されるでしょう。」エンツィオ・ブッシュは、この声が現実の世界から聞こえてきたことに驚きました。そしてその方の権能によって、彼の今までのこの世での経験は、小さな、問題にならないものになっていったのです。彼は、単に主の祈りをくり返すだけでは不十分な気がしていました。しかし、彼に

はそのような祈り方しかわからなかったのです。彼は真剣に、次の言葉をくり返しました。「みこころがなりますように。」こうして彼の目に生氣が戻ると、あの暗い恐ろしい気持ちは、たちまち喜びと平安に変わっていきました。「私は、息子アルマが罪を許されたときに語ったようなことを経験していたのです。」ブッシュ長老はそう語っています。こうして彼は、必ず病から快復するという確信を得たのです。

病院のベッドに横たわりながら、エンツィオ・ブッシュは3つの決心をしました。その決心が、彼のその後の行動を決めることになったのです。ひとつは、これまでの生き方を変え、もうひとつの实在の世界を常に意識しながら生活すること、もうひとつは、この体験を決して否まず、自分が身をもって感じた力を常に人々に証すること、そしてもうひとつは必要とあらば、地の果てまでも出て行き、この力の源を捜し、その信奉者となること、これら3つを実行するという決心をしたのです。

「私は、自分の日々の生活を超越した、实在の世界を意識するようになりました。私は今までになくより痛烈に、より現実的にそのことを意識するようになったのです。そして、決して忘れることのない大切なことを学んだのです。それは、この世の哲学やこれまで自分が出会ってきた宗教には、共通してひとつ欠けたものがあったということです。つまりそれらはどれも、人間は安息に入る前に汚れなく、心魂に徹するまで正直にならなければならないことを教えていなかったのです。私は真に清くなるには、みずから全能の神のみ力に接してみなければならないということを強く感じました。その全能の神は、私たちの語るすべての言葉や引き延ばしの口実に対して、また軽率な態度や偏見、怠惰に対しては、自分で責任をとらなければならないと教えてくださっているのです。私たちは一生かかって自分を変え、悔い改めていかなければなりません。私たちは、清くなりたいたいという大きな望みを、私たちの贖い主、擁護者、救い主に託していかなければならないのです。」

ブッシュ長老はこの力の源を、まず、

5カ月にわたる療養生活を送ったカトリック系の病院に求めました。彼は病室の壁に飾られた十字架上のキリストの絵について、いろいろ調べ始めたのです。そして自分にあのような体験をさせてくれた方を見いだすという決心を胸に、食事のときと寝るときを除いて、彼は聖書の創世記の初めから、黙示録の最後のページまでを読み通しました。その結果、聖書の真実性に対する彼の確信は強まり、主イエス・キリストへの証も強まっていきました。

彼はまた、自分の病棟の看護婦長であった修道女を、じっと観察していました。「おそらく彼女は、私がこれまに出会った人の中で一番正直な、誠実な人だったと思います。」彼は当時のことを思い起こし、こう語っています。「彼女は、1週間1日も休まず、1日16時間働いていました。人のいやがる大変な仕事を、彼女は明るくこなしていました。その明るさとやさしさに、彼女の前では癒されない病気はないようにさえ思えたのです。」

ある日、彼は看護婦長に、カトリック教会はイエス・キリストの教会かどうかを尋ねてみたのです。「彼女はじっと考えていましたが、しばらくしてやっと口を開き、静かな威厳ある口調でこう言いました。『いいえ、あなたが求めておられるのは、^{すた}廃れた伝統的な教会ではなく、生けるキリストの教会なんですよ。』」

退院するとすぐに、エンツィオはルーテル派の牧師を訪ね、これまでのいきさつを話し、キリストの教えに従いたい旨を伝えました。しばらくの間いろいろな集会に出席していたエンツィオは、儀式や集会の荘厳さに満足はしたものの、そこで教わる教義や儀式がどうものみ込めませんでした。なぜ幼児のバプテスマが必要なのか、戦争に使う武器を、なぜ牧師が祝福するのか、これらの疑問に対して牧師や司祭は矛盾した意見を述べるだけで、教義的に納得のいく正しい答えを与えてはくれませんでした。

ある晩、エンツィオと妻のジャッタは落胆しながらひざまずき、主に自分たちの気持ちを打ち明けました。エンツィオはすでに、自分なりの祈りの仕方を身につけていたのです。「私は主に、主の教会が見つかるようにと祈りました。」彼はこ

のように語っています。「私は、初期のキリスト教の信者たちが迫害されたことを知っていました。ですから、私は主のまことの教会が目立たない、人々にあざけられている教会であってかまわないと主に告げたのです。」祈り終えたエンツィオの心には、再び病院で感じたようなあすばらしい平安が宿りました。

末日聖徒のふたりの宣教師が、ブッシュ家の玄関に立ったのは、それから数週間後のことでした。彼らの「目新しい」メッセージに接して、初めのうち少々懐疑的であったエンツィオも、宣教師たちの誠実さにはいつも感心していました。2年間の求道者生活の中で、彼は病院で経験したような神聖な、威厳ある夢を見たりして、数々の霊的な経験をしました。こうしてついに、彼は、末日聖徒イエス・キリスト教会の教えの中にみたまがあることを認めざるを得なくなったのです。もちろんその反面、これまでの社交生活や家族のしきたりを絶たなければならぬことに大きな不安もありました。

いよいよバプテスマを受ける段になって、彼は妻に同じ福音を学んでみるよう勧めました。妻のジャッタ・ブッシュは、時折長びくレッスンを聞きのがすことはありましたが、実はずっと以前から宣教師のメッセージにみたまを感じていたのです。そしてたった3晩の宣教師による福音の原則に関するレッスンで、夫の驚きをよそに、彼女も証を得たのです。こうしてふたりは、1958年1月19日、ドルトムントの公営プールでバプテスマを受けました。

ドルトムントの中でも一番汚い地域にある、古ぼけた校舎が彼らにとって最初の小さな支部となりました。そこに集っているのは、ほとんどが子供たちを皆アメリカに手離した年輩の人々でした。「主は食しくつましい状況をかえりみられないお方ではありませんでした。私はその支部に出席して、心が平安になるのを感じました。」ブッシュ長老はそう語っています。彼は最初支部書記の責任に召され、その後長老定員会の会長、MIA、日曜学校の教師に召されています。

この頃までには、エンツィオ・ブッシュも生まれ故郷において、尊敬される立派な有力者になっていました。1955年に

は、会社自体はまだ小さなものですが、父親と共にブッシュ印刷会社の所有者となりました。そして1963年には、彼がその会社の社長となりました。会社の経営は順調にいき、大勢の社員を抱え、西ドイツでも最大のオフセット印刷（出版）会社のひとつに数えられるほどでした。ブッシュ兄弟は早くから、このような競争の激しい市場においては、創造性を働かせ、社員をうまく動員していかなければ、スムーズに会社を経営していくことはできないと思っていました。教会の指導者としての経験から、彼はこれまでの権威主義的な経営方法に代わるすばらしい方法を身につけたのです。何度か祈ったあとで、彼は従来の方法を大幅に変えた、参加経営方式を取り入れることにしました。そして、重要な決定はすべて、関係者全員の同意があってはじめて有効というルールを作りました。その結果、立派に成長した従業員たちは、会社経営の苦しい時期や変遷期にも力を合わせ、この分野で最も大きな成功を取めた会社が作りあげられていったのです。

長老定員会の会長、支部長、そのほかいろいろな召しを受けるたびに、エンツィオ・ブッシュはいつも主に仕える機会に感謝してきました。「真に改宗すると、私たちは主のみ業を重荷としてではなく、大きな喜びとして果たすことができるようになります。もしホームティーチングをすることに喜びが感じられなかったり、主の王国建設の手伝いをさせてもらっていることに感謝の気持ちがわかないとしたら、その人は悔い改める必要があります。主のみ業をさせていただくことは、すばらしい特権なのです。」ブッシュ長老はこう語っています。

ブッシュ長老が副伝道部長として仕えていた、ドイツ中央伝道部の伝道部長であったスティーブン・C・リチャーズ兄弟の心の中には、彼に対するなつかしい思い出があります。それは、ドルトムントに教会堂を建てる話が持ち上がったときのことです。土地を買収するにあたって地元の人々の反対があったとき、副伝道部長の彼が間に立ってうまく話をまとめ、土地が手に入るようにしてくれたのです。ブッシュ長老はまた、大勢の教会員が証を得られるように手助けをしてきました。

たびたび家庭集会の場となったブッシュ家は、いつも宣教師たちに解放されていました。またブッシュ夫妻は何人かの若者たちのスポンサーとなり、彼らの伝道を援助してきました。リチャーズ伝道部長はこう語っています。「彼は本当に主に愛されています。彼は、主が望まれることは疑わず、なんでもやる人です。」

真理を見いだすためには地の果てまでも行くという、初期の頃の彼の決意は、1977年によりやく試されることになりました。当時、スペンサー・W・キンボール大管長が、ポーランドと東ドイツを旅行中でした。十二使徒定員会の地区代表をしていたブッシュ兄弟は、ベルリンでの集会で、キンボール大管長の通訳を務めたのです。その後、リフレッシュメントの時間に、彼は扶助協会室で何人かの教会指導者と席を共にすることになりました。彼はそこで、大管長の秘書であったD・アーサー・ヘイコック兄弟に、キンボール大管長の隣の席を勧められたのです。しかし、教養あるドイツ人は権威ある尊い方ご自身の勧めがない限り、そうした方に同伴することを遠慮するというしきたりから、彼はその申し出を断りました。ブッシュ兄弟が2度の勧めを辞退したとき、ヘイコック兄弟は、ぜひ大管長の隣に座ってくれるようにと丁寧にしかもはっきりとお願いしたのです。お互いにあいさつを交わしたあと、キンボール大管長はブッシュ兄弟を別室に呼び、そこで彼に、七十人第一定員会会員の召しを授けたのでした。

教会幹部として、ブッシュ長老が最初に受けた責任は、ドイツ・ミュンヘン伝道部の伝道部長の責任でした。その後1980年には（当時婚約中で現在ドイツ在住の長男マルクスを除き）、彼とその家族はユタに移住するよう招かれたのです。

今までを振り返ってみても、ブッシュ長老には、病院のベッドで主に約束したようなことが、次々に召しとして与えられてきています。彼は召しを受けたことで、家族や自分の国の言葉、受け継がれてきた文化や同僚たち、そして自分の築いてきたあらゆるもの、なつかしい様々な事柄をあとにすることになりました。しかし彼は、笑みを見せながらこう語っているのです。「皆さんがアラスカ北部を

地の果てとお考えでしたら、私はまさしく地の果てにまで召され、出て行ったことになります。」現在の彼の責任は、北極を含む北米の北西地域会長会の副会長です。

ブッシュ長老は、これまで教会で責任を受けるたびに感じてきた不安を、どのように克服してきたかを次のように話しています。「サタンの最も大きな力は、私たちに不安を抱かせ、主が私たちに望んでおられることはあまりにも大変でできそうもない、と持ちかけることです。でも、私たちが主に従えば、主は私たちを愛し、言い表わせないほどの喜びで満たしてくださるのです。もちろん、完全に主に従えるようになるまでは、いろいろな悩み、苦しみを味わうかもしれません。しかし、主のみこころに完全に従えるようになったときには、どんな状況にあり、どんな困難を抱えていても、平安に満たされ、威厳を保つことができるのです。これは私にとって、みずから手にすることのできる最も大いなる勝利なのです。」

彼を最も良く知る人、妻と4人の子供たちは、エンツィオ・ブッシュが、夫、父親として人にはないすばらしい感受性を持っていることを認めています。「宣教師さんのおかげで、私たちの生活はすっかり変わりました。彼らが残っていてくれたものは、私たちにとって、すばらしい祝福となりました。」ブッシュ姉妹はこう語っています。

姉妹はまた、ブッシュ長老の人々への接し方、特に自分の子供たちへの接し方をたたえ、このように言っています。「一番すばらしいのは、どんな人にも好感を抱いているということです。ですからどんな子でも愛し、理解し、助けを与えることができるのです。」息子のひとりが、結婚か伝道かの選択を迫られて悩んだときがありました。当時、ブッシュ夫妻はミュンヘンの伝道本部に住んでいましたが、息子と彼のガールフレンドがふたりを訪ねてきたのです。ブッシュ長老は、息子に言いました。「お父さんもお母さんも、お前を愛しているよ。どっちにするかはお前が自由に決めることだ。もし結婚する方がいいと思うのなら、それでもいい。お前に対する愛は変わらないよ。ただ、どっちにするか決める前に、一度自



ブッシュ夫婦とその家族(全員ではない)

分の部屋に入って天父に尋ねてみてほしいんだ。」息子は目に涙を浮かべ、伝道に出る決心をして部屋から出てきました。

ブッシュ長老と姉妹は、ドイツの伝統的な子育ての方法が、世代間に大きなギャップを生み出す原因になっていると考えています。「私たちは、親をばかにしたり、養ってもらっているからというだけで親のいいなりになるような子供はいやだと思っていました。また、子供たちを無理やり教会に行かせ、そのために反発をかうようなこともしたくないと思っていました。」

ブッシュ長老は、子供たちがまだ小さいうちから、彼らを同等に扱うことを、みたまによって教わったと言っています。子供が3、4歳の頃から、ブッシュ長老は彼らの意見を尊重するようにしてきました。「私たちは子供たちから学ぶことが多く、驚くと同時に感動すら覚えます。おびえることのない環境で育つ子供たちは、大人が戸惑うほど無邪気で心が清く、思いやりがあり、繊細です。」ブッシュ長老はこう語っています。

娘のマヤ(現在のポール・ウェンゼル夫人)は、父親のしつけが決して脅迫的でない、常に理にかなったものであったと言っています。「イエス様ならもっと違うことをされただろうね。」ブッシュ兄弟は、よくこう言っていたのです。

「私が窓ガラスを割ってしまったときも、父親は外に出てきて静かにこう言ったのです。『こんなことはしちゃいけないね。二度としないって自分に言いかけるためにも、なんとかしなければね。』そしてどんな罰を受けるべきかを私に尋ねたのです。こんなわけで、私は人に反抗的になったことは一度もありませんでした。」

ブッシュ兄弟も姉妹も、かえって子供たちの方が親よりも自分に厳しい罰を科すことをよく承知していました。

昨年、アルゼンチンでの伝道を終えて帰ってきた末息子のダニエルは、父親をやさしい教師であると言っています。「ぼくたちが野球の試合に勝ったときのことです。帰宅時間が夜中の2時頃になってしまったのです。車で家に帰ると、父は外に出て待っていました。ぼくはとても怖くなり、あれこれ口実を考えていました。ところが父はぼくをとがめないでこう言ったのです。『お帰り。無事で良かったよ。あした話そう。』確かにぼくが悪かったのです。それでも父は、ぼくのことを心配してくれていたのです。父はぼくの力になろうとしてくれていたのです。」

ブッシュ家の子供たちは、両親がクラシック音楽が好きなこともあり、音楽的に優れた環境の中で育って来ました。音楽一家の出であるブッシュ姉妹もパッハ

やラフマニノフの音楽がお気に入りのようです。ブッシュ長老と姉妹は普段から、美しい音楽は家庭の中に良い雰囲気をかもし出してくれると信じてきました。娘のマヤは、そのような音楽のおかげで、いつも清い思いを持つことができ、世の不謹慎な事柄をはっきり見分けることができたと話しています。

マシアス(パトリシア・クレイと結婚)は父親を、家庭の夕べのレッスンをいつも良く準備してくれた偉大な教師、すばらしい同僚であると言っています。ブッシュ長老は、スキーやランニング、ハイキング、ヨットなどが大好きな活動家です。「バルト海と一緒に航行した私たちは、一度とても危ない目にあったことがあります。でもそのような経験が、私たちの絆を強くしてくれました。あのときのことは、決して忘れることができません。」マシアスはこう語っています。長老は、のんびりと楽しく時間を過ごすこともあれば、教会への行き帰りに車中でいろいろな重みのある長い話をして時間を過ごすこともあります。

彼は、非常に家庭的であると同時に優秀なビジネスマン、教会指導者でもあります。しかし、F・エンツィオ・ブッシュ長老の本来の仕事は、飽くことなく真理を捜し求めることなのです。彼は、今まで心にかかっていた根本的な疑問への答えを、イエス・キリストの福音の中に見いだすことができました。しかし同時に、彼は生涯をみずから決心したことに捧げるという大きなチャレンジをも引き受けることになったのです。「多くの教会員が霊的に飢えています。私たちは、日常生活のいろいろな面にみたまを見いだすようにして、自分から霊性を養っていかなければなりません。人生は決して生易しいものではありません。しかし、誓約を守るときに天父が与えてくださるみたまに満たされれば、どんなことがあっても私たちは喜びを受けられるのです。そして結婚生活や親子の関係はすばらしいものになり、平安と威厳に満ちた生活が送れるようになるのです。」

F・エンツィオ・ブッシュ長老が真理を探求して行き着いた所は、永遠への始まりだったのです。

ればならない、努力しなければならぬと思いました。そして、少しでもたくさん聖典を読み、お祈りも心を込めて行なおうと頑張りました。バプテスマの当日、金沢で伝道中の妹が特別の許可をもらって駆けつけてくれました。そして、名東ワード部の皆様にも祝福していただき、無事バプテスマを施していただくことができました。

バプテスマを受けて2週間後、富山で伝

道中のフェロー長老が1通の手紙を送ってくださいました。その中に「いつも神様のことを覚えてください。どこへ行っても、何があっても、いつであっても天のお父様のことを一番にするように。もしそうすれば問題はぜんぜんありません。いつも何とかあります」そして、「河内さんを心から愛しています。永遠の友達です」と書いてありました。私は本当に感激しました。

私はバプテスマを受けたときの気持ちを忘れず、この世の嵐にもまれながら強く生きたいと思います。そして、神様からの愛、フェロー長老の愛、妹からの愛を忘れません。神様が生きておられて、末日聖徒イエス・キリスト教会が真の教会であることを証します。(こうち・のりゆき 1961年生まれ)

JMTC 第71期生

「あなたがたは
世の光である」

(マタイ5:14)



● 4月に召された日本人宣教師31名

(S:ステーク部, W:ワード部, B:支部, M:伝道部)



名 前	出 身	伝道地	名 前	出 身	伝道地
1. 菅 野 徹	東京西S/多摩B	福岡M	17. 上 里 恵 子	東京南S/千束W	名古屋M
2. 井 上 賢 一	東京S/吉祥寺W	福岡M	18. 高尾山 明 子	神戸S/神戸W	東京北M
3. 長谷川 伸 二	札幌S/豊平W	大阪M	19. 杉 山 律 子	神戸S/神戸西B	仙台M
4. 潟 沼 潤	東京S/吉祥寺W	大阪M	20. 藪 谷 由加利	札幌西S/小樽W	神戸M
5. 島 袋 徹	沖縄那覇S/首里W	神戸M	21. 秋 元 陽 子	仙台M/弘前B	神戸M
6. 新 垣 朝 光	沖縄那覇S/小禄W	仙台M	22. 笹 本 恵 子	東京北S/越谷W	福岡M
7. 宇 野 貴 秀	大阪北S/茨木W	東京北M	23. 森 み さ ほ	大阪S/枚方W	東京南M
8. 潟 沼 朗 生	札幌S/厚別W	岡山M	24. 桑 原 淳 生	福岡S/佐賀B	東京南M
9. 北 村 富 弘	大阪北S/京都洛北W	台湾台中M	25. 刈 谷 眞 爾	東京南S/渋谷W	大阪M
10. 土 田 善 樹	福岡S/北九州W	札幌M	26. 鈴 木 広 行	札幌M/帯広B	名古屋M
11. 村 井 増 恵	広島S/光W	仙台M	27. 橋 内 浩 治	東京西S/多摩B	名古屋M
12. 外 間 邦 子	沖縄那覇S/普天間W	札幌M	28. 滝 智 光	東京東S/土浦B	岡山M
13. 長 嶺 啓 子	沖縄那覇S/小禄W	札幌M	29. 幸 地 一 郎	沖縄那覇S/那覇W	仙台M
14. 伊 藤 早 苗	札幌西S/小樽W	岡山M	30. 与 座 宏 章	沖縄那覇S/那覇東W	仙台M
15. 高 橋 美 幸	仙台S/上杉W	神戸M	31. 波 田 野 隆	東京S/三鷹W	仙台M
16. 斎 藤 由 美	東京北S/越谷W	岡山M			

名 譽 に か け て



人 格の意味をひと言で説明する言葉があるとすれば、それは「誉れ」であろう。この誉れがなければ文明は長く存続しなかったであろう。誉れを持つことなしに信頼できる契約や永遠の結婚は存在しないし、信頼や幸福もあり得ない。

あなたにとって「誉れ」という言葉はどんな意味を持つのだろうか。私にとっ

てこの「誉れ」は詩人のテニスの表現にたとえられよう。「人の言葉は人の内なる神である。」(アルフレッド・テニス『アーサーの到来』『王の牧歌』132行より) 誉れある男女とは、信頼に足る人、偽りのない人、ごまかしやうそ、盗みやあらゆる詐欺行為を恥とする人である。また、悪を行なって義を感じ取ることはできないことを早くから知っている人で

ある。人の人格はいかに言葉と約束を守るかで判断される。

しかし今日、約束を尊ばないことが当たり前になってきている。有名な運動選手たちが弁護士を雇って契約を解除した話、あるいは結婚の誓約の破棄、個人による計画的な破産、ごまかしや詐欺行為などの話をよく耳にする。名誉を重んずることがあまりにもまれになって、人が誉れある行為をするとニュースになるほどである。



十二使徒定員会会長
エズラ・タブ・ベンソン

人が神と交わす誓約は 重大な意味を持っている

かをわからないままにはしておかれない。神の教会員としてどのような人生を送るべきかを非常に明確にしておられるのである。神の律法は十戒、山上の垂訓、さらに末日の啓示に表わされている。

たとえば十戒では、私たちと神、家族、同胞との関係について述べられている。ここで今一度この基本的な律法を読んでいただきたい。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。

あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。」

これら4つの戒めは神を尊び誇りに思う方法を示している。次の戒めはいかにして家族関係を尊ぶかを教えている。

「あなたの父と母を敬え。」

両親や先祖を敬うことなしに真の偉大さはありません。そして、あとの5つの戒めは、私たちと隣人との関係を尊ぶ方法を示している。

「あなたは殺してはならない。

あなたは姦淫^{かんいん}してはならない。

あなたは盗んではならない。

あなたは……偽証してはならない。

あなたは……むさぼってはならない。」
(出エジプト20：3—4，7—8，12—17)

一人一人がこれらの戒めを尊ぶならば、個人の集まりである社会が不敬を卑しめ、安息日を尊び、両親や結婚の誓約を敬い、徳を实践することは、火を見るよりも明らかである。

私たちが神の戒めに従って生活したら社会がどのようになるか想像できるだろうか。

たった一度だが、高校の試験で私の名誉を問われた思い出がある。試験は確か経済だったと記憶している。その教師は試験の間、教室の後ろで生徒を監視するのが常だった。答案用紙に懸命に鉛筆を走らせていると、鉛筆の芯が折れてしまった。私は通路をはさんだ隣の人にナイ

フを貸してくれるように頼んだ。彼が私にナイフを手渡したそのとき、通路を歩いて教師がやって来て言った。「答案用紙を渡しなさい。今晚のバスケットボールの試合に出ることは認めません。」私はチームのフォワードであった。私は鉛筆を削るためにナイフを借りようとしたことを説明したが、どんなに説明しても教師を納得させることはできなかった。

私は放課後沈痛なおももちで馬に乗って家に帰ると、その夜父に事の次第を話した。父は私の正しいことを確信してくれた。自分でもそのことがよくわかった。

私が牛の乳しぼりで外にいとこから電話がかかり、その晩体育館の方へ来てほしいということだった。教師が私に会いたがっていること、私に試合に出てもらいたいと思っていることを告げたのだった。私は気が進まなかったが、父の励ましもあって体育館へ行き、教師と会った。教師は私が不正行為をしたことを告白するように言ったが、私はそれに対してこう答えた。「やましいことは何もしていません。告白することなんて何もありません。」教師はしぶしぶ試合をすることを許可した。私はゲームにあまり熱中できず、その試合は負けてしまった。教師に対して悪感情を抱くことはなかったが（彼は正しいと思ったことをしたにすぎない）、この出来事から、自分の名前と父の名前を汚さないようにすることがどんなに大切かを学んだ。私は生涯かけてそうするように心がけてきたつもりである。

私たちは「いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについて」みずからの行ないによって神の証人になるのである。（モーサヤ18：9参照）行ないが誉れあるものであれば、神の教会と王国に名誉をもたらす、そうでなければ教会全体の名誉を傷つけることになる。

神と交わした厳粛な約束に従って生活されるように。それこそが神と同胞を誉れとし尊ぶことである。

人と人との約束が大切であることは言うまでもなく、人が神と交わす誓約はもっと重大な意味を持っている。イエス・キリストの真の教会員であるあなたは、バプテスマのときに神と誓約を交わした。「誓約の子」と呼ばれるゆえんがここにある。

その誓約の中では「いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについて、死に至るまでも神の証し人にな」と約束している。（モーサヤ18：9）

私たちはバプテスマのときに、神の戒めをすべて守ることを約束する。神はその戒めが何か、あるいは何が善で何が悪

自由, 平等, 安心感



ジムは18歳になったばかりでした。彼は不満と憎しみをあらわにしながら、いかにも落ち着かない様子で教会幹部と向かい合って座っていました。彼の言い分はきわめて率直で、待ち切れな

いとはばかりにこう切り出してきました。
「ぼくを教会から破門してください。
今すぐに!」

「教会員になってどれくらいたつのかね。」

「3年です。」

「で、破門してほしいという理由は?」

「自由意志がなくなってしまったからです。タバコが吸いたくても、教会から自由を奪われてしまって。自分でやりたいことができないんです。」

ジムには、バプテスマを受け、福音の

標準に添った生活をしようと決めたとき、すでにみずから自由意志を行使し、最も重要な決断をしたという意識がありませんでした。

ジムに教会外の友達ができたことは明らかでした。その仲間たちが、バプテスマのときに彼が抱いた霊的感受性や高揚した気持ちを徐々に鈍らせてきたのでした。

彼は、もはや自由な若者ではなくなり、ときに立派な選民を欺き、人々を真理から遠ざける悪魔の数知れぬ策略の犠牲になってしまったのです。ジムは、教会から自由を奪われたと不平をもらしました。しかし、実際は福音の真理こそが私たちに自由を得させてくれるのです。(ヨハネ 8:32参照) だれもが皆、自由を必要としているのです。

夜もだいたい更けてからのことでした。宣教師たちが聖句の輪読を終え、消灯したときです。沈黙を破って、せわしげにドアをノックする音が聞こえてきました。フランクリン長老がドアを開けてみると、そこにはいつもの笑顔も見せず、1枚の丸めた紙を手にしたスティーブが立っていました。彼は9カ月前に宣教師に導かれ、改宗した立派な若者でした。

「フランクリン長老。」若者が言いました。

「ぼくの神権聖任証明書を預かってほしいんです。問題が片づくまで、ここに置いていてください。今のぼくは、神権者としてふさわしくないと思えます。でも近いうちにきっと受け取りに来ますから。」

あとでわかったのですが、スティーブはそこまでする必要はなかったのです。ただ、自分で納得のいく解決が得られるまでは、心が騒いでどうすることもできなかったのでしょうか。心の平安、それは問題解決の鍵です。彼は、神権の召しを受けたことで心に葛藤があり、平安を得ることができなかったのです。私たちはだれでも皆平安を、心の安らぎを求めているのです。

断食証会からの帰り道のことです。家族と一緒に車に乗っていたスーは、妙に黙りこくっていました。それがあまりにも普段のスーと違っていたので、父親は時間を取り、彼女とふたりきりで話すことにしたのです。

要するに、スーは自分に福音に対する証が少しもないと思い込んでいたのです。その日の証会で、何人かの教会員が、福音が真実であるという「確信」を証として述べました。スーは涙ながらに言いました。「お父さん、私、福音が真実かどうか確信がないの。それで悩んでいるの。」

忍耐強く、理解あるスーの父親は、少しずつ証を強めていった自分の十代の頃をはっきりと思い起こしていました。

「スー。」父親が言いました。「じゃ、どうして什分の一を納めているんだい。」

「だって、それは主の戒めですもの。」すぐに返事が返ってきました。

スーの父親はこの機会を捕らえ、彼女と一緒にざっと福音の基本原則を復習し、知恵の言葉や断食の律法、聖餐にあずかること、道徳の標準、祈りなどについて話しました。スーはそのいずれに対して、肯定的な意見を持っていたのです。彼女は、父親に笑みを見せると言いました。「ね、お父さん、今お父さんが話してくれたようなことにだったら、私少し証が持てるわ。自分に理解できることだったら、証ができそうよ。」

これはだれにでもあてはまることではないでしょうか。スーは、自分の愛している教会に対して確かに少々信頼感を無くしていたかもしれません。しかし、父親から、それはいろいろな真理に対して証を強めていくひとつの段階であると聞いてからは、そのような気持ちもなくなっていました。真の確信というのは、証を強めていってこそ得られるのです。この世にあって、私たちはじっくり時間をかけて証を培い、強め、そして新たな真理を受け入れるたびに与えられる安心感に心を向けていきたいものです。安心感は、私たちだれもが必要としているものです。

世の初めから、人は自由を求めてきました。また昔から、人は安心感を得ることの大切さを身をもって感じてきました。

どんなに頑固でよこしまな人でも、心の奥底では真剣に心の平安を得たいと願っているのです。

末日聖徒である私たちは、いろいろな時代に世に与えられてきた大いなる真理の守り手です。何とすばらしいことでしょうか。こうした恵まれた立場にある私たちは、この明らかにされた真理を大勢の人々に分かちつことを、第一の目的としていかなければなりません。救い主は次のように言われました。「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8:32) 私たちは共に生ける予言者に耳を傾け、そのみ教えに従って生活していかなければなりません。

これまでもそうでしたが、現在もなお平和は世の重要なテーマとなっています。

「地には平和を」というのが、救い主の誕生を知らせた天の軍勢が宣言した大切なメッセージのひとつでした。ところが、最近の3つの戦争で、何百人もの末日聖徒の若者が、「タコつぼ」と呼ばれる単独壕の中で、迫撃砲や爆弾、ロケット砲などの危機に身をさらしてきています。不可知論者は、過去2,000年間地上には平和がなく、戦いと不和ばかりが続いているという理由で、キリスト教は衰退してしまったと主張しています。

聖典には、特に末日に、この世は争い、不和、戦い、戦いのうわさに悩まされると記されています。そのことをよくご存じであった救い主は、このように言われました。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。」(ヨハネ14:27) 主は「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安」(ペリピ4:7)、心の平安、すなわち証を持つことによって得られる平安のことを言っておられたに違いありません。ですから、たとえ「タコつぼ」の中で四方を迫撃砲や爆弾に囲まれたとしても、そのような平安を見いだすことができるのです。

平安はこれまで常に、いかなる状況にあっても「救い主は生きたもう」と証する人々の良き伴侶となってきました。確かに心に平安があると証が強まります。ただし、その強い証がいつまでも眠った

ままにしていることのないよう、気をつけなければなりません。また救い主の言われた平安を、世のもっと多くの人々に見いだしてもらわなければなりません。真の安心感というものは、父なる神と御子が、この時代の聖なる森にそのみ姿を現わされたことを知るときに、また天が開かれ、主の神聖な名で行なう権利すなわち神権の権能が回復されたことを知るときに得られるのです。何とすばらしいことでしょうか。さらに全人類の模範となられた救い主が、水に沈められるバプテスマを受けられたという確かな知識があるということは、なんと喜ぶべきことでしょうか。救い主は、その権能を持った方、すなわちバプテスマのヨハネを捜しあてられたのです。おふたりは、「たくさんの水」(ヨハネ3:23; マルコ1:5参照)のある所に行かれました。聖典には、救い主が「水の中から上がられ(た)」(マルコ1:10)と記されています。世の人々が知る必要のあるのは、このような安心感なのです。

心の平安は、個人的なものであり、天父や愛する御子との個人的な関係に基づいてもたらされます。皆さんはそのことに感謝しているでしょうか。では、真理に対する理解を深め、救い主を愛そうと努力すること以外に、証を強めてくれるものはあるでしょうか。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14:15) 救い主はこのように言われました。このみ言葉に従うときにだれもが平安を受け、それを惜しみなくほかの人と分かち合いたいと思うのです。

シオンの若者たちよ。ほかのことはさておいて、これらのことをしっかりと心に留めてください。世は皆さんの手の届く所にあるものは何でも与えてくれます。ですから、真理を見だし、それに従った生活をし、悪魔に恐ろしい手かせをはめられないように注意してください。皆さんは今、しっかりした土台形成の一步を踏み出しました。そして、神との関係を深めていくときに得られる、びくともしない安心感を持ち始めているのです。それは、主を知ろうとするすべての人に約束された心の平安なのです。

聖霊による証

アーリン・P・ネサー



高校から大学1、2年にかけての私は、真理を知るためにはかなり広範な勉強をしなければならないように思っていました。真理というものが本当にあればの話です。ですから宗教的なことについてはどちらかというと懐疑的で、人生経験も積んで髪の毛も白くなり、学問もいろいろ修めて互いに比較検討したうえでなければ真理は見いだせないだろうと考えていました。

しかし、これから述べる宣教師としての私の経験は、広く研究をするよりも先

に真理を見いだすケースがあることを教えてください。もちろん、真理を知ったらもう研究は不要になると言うつもりはありません。むしろ研究を重ねることにより、一度見いだした真理に新たな光が投げかけられるのです。この新たな光について主は、「……信仰とによりて学問を求むべし」（教義と聖約88：118）とはっきり述べておられます。

「この記録を受ける」

ふいに落ちてきた雨のしずくに、手帳に書いた通りの名前やアパートの番号が

にじんできます。そのページに走り書きで、「通りの右側の最初のアパートに住むユーゴスラビア人の婦人を訪問すべし」と書いてありました。さて、と私は思いました。「戸口で簡単に紹介するだけでいいだろう。モルモン経の説明は省略しよう。どうせ関心はないだろうから。」この日は、トレンチ・コートから雨がしみ込んでくるような本当に冷たくていやな日でした。

私の新しい同僚はどうもやる気がない様子で、また私が紹介することになりました。本当なら励まして彼にやってもらうのですが、疲れているうえに寒くて、口をきくのも面倒です。アパートの入口



「……信仰とによりて学問を求むべし」 という主の言葉の本当の意味を私に教えてくれた ユーゴスラビアの婦人

従うことができるのでしょうか。もちろん中にはドイツ語を読める人はいますが、大半は言葉に不自由を感じています。

いずれにしても、同僚と私はアパートの階段を上がって行きました。ドアをノックしようとする、両腕に洗ったばかりの洗たく物が一杯入った桶をかかえて、地下からのらせん階段を上がってくる婦人に気づきました。ごつごつした手のたこが、色白の顔と、明るい色のスカーフの下に小ざっぱりまとめられたまっ黒の髪とくっきりとした対照を見せています。

私はドアの前で彼女に道を開けながら声をかけました。宣教師であることを述べたうえで、もう遅いので出直してきてもいいのですがと、気のない声で話したのですが、彼女は私たちをアパートに招き入れました。

私たちは中へ入りました。そして私はジョセフ・スミスと最初の示現、モルモン経について、簡略化した1課のレッスンを手短かに話しました。続いて今述べたことが真実であることを証し、彼女がもっと知りたいかどうか、もちろん彼女が「いいえ」と答え「帰ってください」と言うことを期待しながら、尋ねました。期待に反して彼女は、モルモン経を持っているかどうか尋ねたのです。同僚は一日中私の背中に下がっていたナップサックから、ドイツ語のモルモン経を1冊すばやく取り出し、「僕の言った通りでしょう」とでも言うように、にやりとしました。

私は彼女に本を渡ししながら、ドイツ語が読めるかどうか聞きました。彼女は「いいえ」と答えました。いったん差し出した手を引っこめながら、彼女が読めるモルモン経を持っていないことを説明しました。しかし彼女は、ドイツ語版でもかまわないから読ませてほしいと言います。彼女のごつごつした指が、ジョセフ・スミスやモロナイの絵、古代アメリカの文化の写真の載っている紹介のページを静

かにめくりながら、矢つぎばやに質問をしてきました。そして、何日かモルモン経を借りてもよいかと言うのです。ドイツ語を話す友人がいるので、その友人に見せたいとのことでした。

私はとっさに似たような出来事を思い出しました。見せた「友達」が私たちの教会にあまり好感を持っていない地元の教派の指導者だったという話です。しかし私は、彼女にモルモン経を貸すことにとうとう同意しました。私たちは次の訪問の時間を約束しませんでした。数日したらまた訪問しますと言っただけでした。

私たちは彼女のアパートを後にしました。同僚は、この出会いは大変な成功だったと言います。本当に良い求道者に会えたと確信しているのです。私は「そうだね」と同意はしたものの、疑いの気持ちは消えませんでした。

それから何日かたったある日、同僚が伝道活動を計画する番でした。彼は、ドイツ語のモルモン経を渡したあのユーゴスラビア人の婦人のところを訪問しよう、と提案してきました。私は同意はしたものの、決してうまくいかないと思っていました。アパートを訪問した私は、モルモン経を友達に見せてどうだったかを尋ねました。私は彼女の答えに驚きました。モルモン経を読んでもらうはずだった友達がずっと家を空けていて連絡が取れなかったのも、自分でモルモン経を見て中に出ている絵を研究したそうです。それだけではありません。私が話したモロナイの言葉に従ってモルモン経が真実かどうか祈ったというのです。それから彼女は、モルモン経が神の言葉だと感じた、と言ったのです。

私は彼女の言葉に^{あぜん}啞然としました。あまりにも多くの拒絶に遭ってきたあとの私には、彼女が本当に心からそう思っているとは思えませんでした。私はもう一度、ドイツ語が読めるかどうか尋ねました。彼女はドイツ語は読めないが私たち

で、私はナップサックを反対側に移しました。ナップサックの底にはドイツ語のモルモン経が2冊入っていました。同僚が朝、私の忠告を無視して入れたもので、背中に重くのしかかっていた。

私は初めて会う人にモルモン経について話すのは気が進みませんでした。そのこととドイツ語のモルモン経を持ち歩くことの背後には、一種の合理化思想がありました。つまり、ユーゴスラビア人の季節労働者が読めるモルモン経がないということです。彼らのほとんどはセルビアクロアチア語を話します。理解できないものからどのようにして証を得るのでしょうか。本があっても読めなければ、彼らはどのようにしてモロナイの「この記録を受ける……」という勧告に

人はある事柄について詳細をすべて知らなくとも、
その真実性を知ることにはできるのです。
それは、聖霊の証の力があるからです。

が前に話した事柄についてよく考えて祈ったとくり返し答えました。私はまず不信感にとらわれました。読むことさえできない書物の証をどのようにして得ることができるのでしょうか。

そんなことを考えている間、同僚の方は彼女にモルモン経が真実であるとの証ができたことを認め、見えてきた改宗の可能性に興奮気味です。そして、彼女にレッスンの続きを教えるように促してきました。私は半信半疑のままで、もう一度ジョセフ・スミスと最初の示現のレッスンから始めました。その日はそれで終わり、その後何回かレッスンを行ないました。それから数週間して、彼女はバプテスマを受けました。また自分で読んで理解できるモルモン経も受け取りました。

私は、彼女がほかの求道者と違うことに気づきました。最初の確信を得てから後、福音の原則を学ぶ力と一生懸命理解しようとする度合が格段上なのです。彼女は大きく目を見開いて、私たちの述べるすべてのことをひとつも聞きもらすまいとしている、あたかも小さな子供のようでした。私たちの述べるメッセージの真実性を肯定するためであれ否定するためであれ、一つ一つの言葉を批判的にとらえようとする一般の求道者とは違っていたのです。モルモン経と福音に関する彼女の知識は、かつて私が教えたどの人よりも早く深まっていきました。彼女はまさにモロナイが「この記録を受け(て)」(モロナイ10：4)それが真実であることをはっきり示されると述べたときに思い浮かべた人物そのままでした。しかも、彼女はまた「この記録を読」んでもいなかったのです。(モロナイ10：3)

「……信仰とによりて学問を求むべし」

私はこの経験の意義を何度も深く考えてみました。そしてそれから長い間、研究もろくにしないで真理を見いだせるなどということは、考えられないことでした。でもやっと最近になって、あのユ

ーゴスラビア人の婦人の改宗談の意味がわかってきたのです。

人はある事柄について詳細をすべて知らなくとも、その真実性を知ることにはできるのです。それは、聖霊の証の力があるからです。真理を求める人には、たとえ広い知識がなくても、神はその人の信仰を通して、そのことが真実であることを理解させてくださるのです。そしてひとたび真理の証を受けると、人は自分の学習の焦点をその真理の証に合わせるができるようになり、「……信仰とによりて学問を求むべし」(教義と聖約88：118)という言葉が成就するのです。アルマもこう述べています。「信仰については私がすでに話したように、信仰とは完全に物事を知ることではない。それであるから、あなたたちにもし信仰があるときには、まだ見ていない本当のことを待ち望む。」(アルマ32：21)

オリヴァ・カウドリがモルモン経の翻訳を試みようとした経験からわかることですが、ある考えが真実であるという知識は、過去に学んできたことを通じて与えられるとは限りません。主はオリヴァに次のように勧告しておられます。「わが子よ。つぶやくなかれ。かくの如く^{ごとなんじ}汝を待遇したるには深き知恵われにあればなり。

見よ、汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願ひし時はこれを与えらるるならんと思えり。

されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」(教義と聖約9：6-8)

対照的に、金版を手に入れ、保管した予言者ジョセフ・スミスの経験は、何ら深い学問がなされる前に真理を理解する力が生じたよい模範です。予言者ジョセフは、金版に真理が刻まれていることをはっきりと理解していたので、暴徒と戦

うことも、迫害に耐え、金版を守るために大きな犠牲を払うこともいってませんでした。そうしたことが起こったのは、金版に刻まれている教義を学ぶ前のことです。

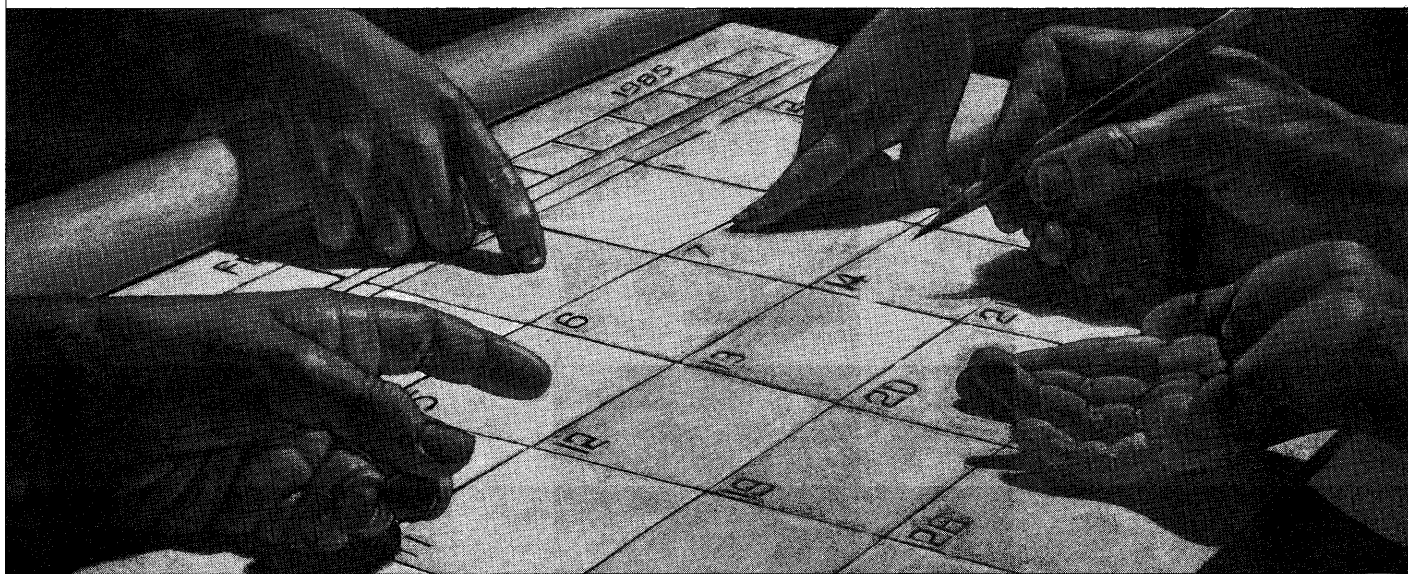
以上のふたつの経験にはなぜ明らかな違いがあるのでしょうか。確かなことは、主が私たちに、人生の中で真理をいかに応用するかに研究や学問の焦点を置くよう望んでおられる場合があるということです。そのようにして真理の応用を通して真理の証を得ると、あとは時間をかけて真実か否か考える必要はありません。日々の生活にその真理を応用していけばいいのです。

したがって、聖霊を通して真理の証を私たちに祝福される天父の業は大いなる業と言えましょう。私たちは神からの証を通して「望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認すること」(ヘブル11：1)を理解するのです。このような「確信」と「確認」が得られた人は、あのユーゴスラビア人の婦人の場合と同じように、天父からさらに光と知識を得たいと願うようになります。また私たちの学問や研究は、天父のみこころを理解する方向に、そして主の思いと主の方法を理解する方向に絞られていきます。主の思いや主の方法は、私たちの思いや方法とは異なります。

以上のことから、全力を尽くしてみたまとの調和を保つように努力することは大切なのです。そして、みたまと調和するときのみ神から真理の証を受ける資格ができ、学問や研究においても導きを受けられるようになるのです。このように私たちはみたまと調和し、しばしば真理の証を受けることにより、この世の試しの生涯をより効果的に活用し、昇栄に向かってさらに急速に進歩を遂げていくことができるのです。

*アーリン・P・ネサー：カリフォルニア州ロサンゼルスにあるワード部の長老定員会第二副会長

家族会議で共に語り合う



「集 まろう」と父親が5人の子供たちに声をかけます。聞き慣れた言葉に、家族全員が家や庭のあっちこっちから、台所のテーブルのまわりに集まります。家族会議の時間です。

教会員は家族会議と家庭の夕べには違いがあることを教えられています。「家族が毎週月曜日の夜集まって、福音を学び、互いに楽しみ、娯楽に興じる時を家庭の夕べという。」

「家族が集まって、大切な決定を下し、家族が達成したことを認め、規律を正し、行事の計画を立てる時を家族会議という。」（「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」メルケゼデク神権定員会用個人学習ガイド1983, p.162）

「家族会議は教会の最も基本的な評議会です。この会議では、父親と母親の指示の下に、家庭の問題や家計収支について話し合い、様々な計画を練り、互いに励まし合い、一人一人のため、また家族全体のために祈りを捧げることができます。」（「家族」p.6）このような会議を開けば、家族は組織され、教会幹部からの勧告にひとつのユニットとして一致して対応することができます。

それに対して、ひとりの子供だけに關する問題や決定、たとえば伝道のことやしつけの問題などは、一対一で話し合っ

た方がより効果的に解決できるでしょう。

家族会議の前に、両親は家族で話し合う必要のある項目を決めておくべきです。ある母親は、家族会議を通して夫との一致がはかれたと話しています。「意見の異なるところは会を開く前に調整しておきますので、話し合う事柄については前もって合意に達しています。また、家族が何を目標しているかお互いに理解していますし、主が望んでおられることを理解できるように、靈感を求めて共に祈るようになっています。」

もちろん、どのくらいの頻度で集まるかは自由です。この会議は各々の家族の必要に応じて、いつ開いてもいいのです。でも、あまり頻繁に開くと、ありがた味がなくなります。ある家族は毎週家庭の夕べの後に家族会議を開いています。また、日曜日ごとや断食日曜日ごとに、あるいは何か特別な必要が生じたときに開いている家族もあります。

会議の内容は個々の家族によって異なりますし、家族の必要に応じて変わっていきます。たとえば、系図の仕事を計画するための家族会議は、活動を計画したり、あるいは家族の規律を正すための会議とは趣の異なったものになるでしょう。

理想的には、父親が管理します。父親のいない家庭では、母親が行ないます。必要であれば、両親は子供のひとりに、

話し合ったことや決定したこと、責任の割り当てなどを記録する責任を与えることができます。この会議は祈りで始まり、祈りによって終わります。

家族会議ですから、家族全員が参加します。各自がアイデアを出したり、提案をしたりするように求められます。ある父親はこう回想します。「最初私は何も意見を言わないでいる一人一人に、『グレイ、そのことをどう思う。』『シルビア、どんなふうに感じるね』などと尋ねなければなりません。でも、私たちが本当に意見を聞きたがっていることを理解すると、貴重な意見を物おしせずに出してくれるようになりました。」ある父親は、特別な家族の問題について、1週間考えてみるように家族全員に責任を与えました。次の家族会議までに各自が可能な解決方法を考えてくるというものです。この方法は子供たちに、自分が何を言いたいのか十分に考えさせる時間を与えるものだったので、会議は活気に満ちたものとなりました。

「家族会議を実りあるものとするためには、人の話によく耳を傾け、率直に話し合い、人の意見や気持ちを尊重することが欠かせません。」（「家族」p.6）一番下の子供が、次の家族の活動である釣り旅行のためにミミズをつかまえに行くことを提案しても、年上の子供たちはくだ

家族会議の各々の家族の必要に応じて、いつ開いてもいいのです。でも、あまり頻繁に開くと、ありがた味がなくなります。

らない考えだなどと言うべきではありません。決定する前にみんなが意見を出し合えば、家族全員がもっと互いに相手を尊重するようになり、いろいろな物の見方があることを理解できるようになるのです。

家族全員が意見や気持ちを述べたあとで決定がなされるわけですが、理想は、その決定に全員が賛成することです。全員一致の賛成が得られないときは、もっと深く考えて祈るように皆に求めますが、そのうえでまだ意見の食い違いがある場合は、両親が管理者として最終決定を下します。両親は自分たちの経験を生かし、権利として与えられている靈感を通して、全員の提案を入念に検討したうえで決定を下さなければなりません。「うちはその問題はないんですよ。」ある父親はそう語ります。「決定のプロセスに加わったという気持ちがあるので、決定されたことには喜んで従ってくれます。自分たちの意見が尊重されていることを知っているんです。私たちの決定をみんなが支持し、それに喜んで従ってくれるというのはうれしいことです。」

家族会議で話し合われる事柄の中には、内密にしなければならないものもあるかもしれません。そうした事柄について子供たちには、内密のことなので家族以外の人には話さないように教える必要があります。この約束がきちんと守られると、家族の中に忠誠心と団結心が育まれます。

家族会議は家族の問題すべてを解決するための場ではありません。両親が家族の導き手として、子供との話し合いの場を設けずに決定すべき事柄もあるでしょう。また家族会議は、神の律法の賛否を問うために使われるべきでもありません。たとえば、家族のだれかが正直の律法に従うか否かを話し合うというようなことは意味がありません。

家族会議は、家族の問題点や必要な手続きを話し合うために使うことができます。家族会議にふさわしい議題には次のようなものがあげられます。みんなが納得のいく家事の分担をするにはどうするか。どのくらいの時間テレビを見るか、またどの番組を選ぶか。必要な家具を買うために、どれくらいの費用を出すことができるか。どのようにすれば、より秩

序ある家にすることができるか。けんかをなくするために、家族として何をすることができるか。どのような家族の規律を決めるか。安息日を聖く保つために勧められている活動にはどのようなものがあるか。

家族会議が成功するか否かは、会議の中で問題をどれだけ効果的に解決できるか、また家族のためになることをどれだけ考えられるかによるのです。

また家族会議は、個人や家族の活動の計画や調整に使うこともできます。たとえば、だれか家族の助けを必要としている人がいた場合、家族会議でその人を助けるための計画を立てることができます。ある家族は家族での活動がスムーズにっていますが、その方法はこうです。まずみんなから、自分が計画していることを出してもらいます。次に計画のぶつかる部分を調整し、皆の意見も求めたうえで、大切なことを先にすることができるように優先順位を決めるのです。

スケジュールが折り合わないことはしばしばあります。どちらかに決めたり、時間を調整したりすることが必要になってきます。こうした問題を避けるため、ある家族は大きな余白のあるカレンダーを準備し、約束や学校の行事、誕生日、そのほか特別な家族の計画などを書き込むようにしています。家族会議でめいめの次の1週間の活動をあげ、それをカレンダーに書き込みます。朝、そのカレンダーを見れば、その日の各人のスケジュールがわかるという仕組みです。

家族会議の最終的な目的は、家庭の中に福音の業を育むことです。このことについては、神権の4つの基本分野を進歩の計画や評価をするためのガイドとして用いるとよいでしょう。では次の項で、その4つの原則がどう応用されるか見てみましょう。

個人と家族のための基本となるポイント

系 図

あなたの覚えの書のバインダーを見てください。どうしようもなく薄っぺらで、表紙の神殿の絵を見るたびに、「ああ、やっていないなあ」と思わせるような状態ではありませんか。あなたと子供の個人

の記録は、いまだ記録されず、とりとめもない記憶のままにとどまっていなくていいでしょうか。どのくらい神殿に参入していないのでしょうか。こうしたことについて家族会議で話し合ったらいいのでしょうか。家族で系図探求の目標を決めることができます。もしかしたら、何をしたらいいか、どこから手をつけたらいいかだれも知らないのかもしれませんが。系図表に書き込む名前を家族みんなで見つける計画を立てるのもいいでしょう。また、祖父母やほかの親戚にインタビューする責任をだれかにあげることができます。あるいは、情報や確認のための書類を請求する手紙を書いてもらうこともできます。

また家族会議では、個人の歴史と一緒に作成することもできますし、その編さん方法や記録を最新の状態に保つ方法についてブレンストーミングをすることもできます。それに、系図の活動や仕事にどれだけの時間をかけるか、いつまで完成するかも、家族会議で決めることができるでしょう。

次に神殿です。年少の子供たちは、家族の中で神殿推薦状を持っている人たちが神殿に参入できるように、お手伝いができると思います。神殿から遠く離れた所に住んでいる人たちは、神殿訪問の旅費を蓄える計画を立てることができると思います。

物質的な福祉

今着ている洋服が少しくなくなっていないでしょうか。食糧貯蔵の棚が空になっていないでしょうか。毎月の支払いはどれだけありますか。あなたの十代の子供たちは、経済的な安定をもたらす職業について、きちんと計画しているでしょうか。

ここでも家族会議が力を発揮します。家計については、現状をきちんと説明すれば、子供たちの方から助けを申し出てくるでしょう。新しい自転車など、欲しがっていたものを自分から進んでがまんするようになるのです。ある家族は、家族会議の決定に従って、クリスマスプレゼントとして各自に貯蔵食品を送ることに決めました。

あなたの家族には健康増進に一生懸命な人がいるかもしれません。もししたら、

家族のための健康増進プログラムを作ってもらってはどうか。ほかの人も参加しますか。はい、家族会議で前もって話し合っていれば大丈夫です。

伝道活動

あなたは毎日ある人の家の前を通って出勤します。福音を紹介しなくてはと思うのですが、いつもただ通り過ぎてしまいます。また、あなたには14歳の息子がいます。その子は伝道に出る準備をしているのでしょうか。貯金はどうですか。あなた方はどうでしょう。夫婦で伝道に出ることを計画していますか。

この伝道については、家族で話し合うことができます。家族会議の後に、伝道のための特別な預金口座を作ることにしてはどうでしょう。全員がその口座に献金をするのです。また、あなたが出勤時に通り過ぎる家の人と親しくなる方法を家族会議の中で話し合い、決定することができます。あなたの娘さんはその家の娘さんと友達ではないでしょうか。その辺からスタートしてみてください。

霊的福祉

最後に、家族の霊的な成長があげられます。家族全員での聖典の勉強や祈りをいつするか、家族会議で決めましょう。また、家族での奉仕活動の計画もできます。お父さんが執事定員会のアドバイザーであれば、お父さんが責任をよく果たせるようにどんな助けができるでしょうか。ローレルのクラス会長であるスーザンについてはどうでしょう。彼女が召しを果たす時間を取れるように、弟がお手伝いを代わってあげることができるかもしれません。

家族会議は、家族で働き、遊び、共に成長するためのものです。家族会議を開くことによって、人の気持ちを大切にようになります。また家族の目標を決め、進歩を評価することができます。そして互いに尊敬し、理解し、一致しようとする雰囲気がかもし出されていくのです。家族で行なういろいろな計画は、全員で力を合わせて作ったものですから、子供たちもきちんと従うようになります。そして家族は霊的に成長し、互いへの愛が育まれるのです。

家族会議は、家族で働き、遊び、共に成長するためのものです。家族会議を開くことによって、人の気持ちを大切にできるようになります。また家族の目標を決め、進歩を評価することができます。



病んでいる仲間のために

マリリン・ブリック・タフト

紫色のイソギンチャクや子ガニやヒトデが採集家の手から守られて生息する禁漁区が、カリフォルニア沿岸の所々に散在します。そこでは岩場を散歩する人も、潮の満干に伴って動く海中の生き物をただ見るだけで、触れることはできません。

しかし別の海岸では、人々はもっと自由に海の生き物たちとつき合っています。嵐で岸に打ち寄せられたものは、それを生業としている人たちの立派な収穫となります。彼らは海水をくんだ鮮やかな色のバケツにその獲物を入れ、遠く内陸へと運び去ります。

生物学者のローレン・アイスリーがこうした海岸でのひとつの経験を語り、それは生物保護の有名なたとえ話ともなりました。彼はある早朝、嵐のあとの海岸で何かを捜し歩いているひとりの人に出会いました。

「貝拾いですか。」

「いえ、ヒトデだけです」とその人は答え、海岸から遠く打ち上げられたくねくねするヒトデを、沖合目がけて放り投げながら、「生きているやつだけですけどね」と言いました。

「ヒトデは投げるとよく飛ぶんです。人の手を借りてですけどね。」（「ヒトデを投げる人」p.172）

アイスリーが「ヒトデを投げる人」と呼んだこの人は、月並な採集家ではありませんでした。願いはただひとつ、ヒトデを興味本位の観光客から救うこと、海に生きるヒトデの権利を守ることでした。

キリストに従う者にとって最も基本的な責任に、「人を捜し求めること」、つまり霊の命を求めてあがいている人々を捜し、その手助けをすることがあります。言ってみれば、近くの海岸に難破した人たちがいるのです。福音から離れて漂流するか、さもなくば船を見失ってしまった人々たちです。彼らは救い主のたとえ話に言われた迷える羊、なくした銀貨です。私たちのワード部、ステーク部、隣人の

中に、また親しい友人の間に彼らはいいます。ひとたび改宗しながら離れていった人々たちです。

トーマス・B・マーシュがバプテスマを受けて間もなく、予言者ジョセフ・スミスは彼の頭に手を置き、励ましの祝福と力ある勧告を授けました。「見よ、われ汝に告ぐ、汝は教会員にとりて病を医す者とならん。」（教義と聖約31：10）

教会員にとって病を癒す者の責任は何かでしょうか。おそらくマーシュ兄弟は、教会にあって霊的な癒しの必要な人々のために働くことを命じられたのだと思います。キリストに従う者の大切な責任は、ヒトデを投げる人の言葉で言えば、「ヒトデを捜すこと」、主の言葉で言うなら「教会員にとっての医者」になることです。新しい改宗者を捜すのに熱心なあまり、改宗してから離れていった人々たちを忘れてはなりません。伝道に気おくれする人々にとって、福音を処方する医者となり、人に喜びと健康をもたらすことはすばらしい機会です。人に無理やり癒しの靴をはかせるではありません。自分で靴をはけるように、靴のそばまで行くのをただ手伝うだけなのです。

教会を破門されて、友だちやワード部の教会員の多くから見放されたスティープンという友人のことを思い出します。彼は別のワード部に移りましたが、その隣人たちはスティープンを受け入れ、彼の可能性を見つめ、わけへだてせず活動に誘いました。彼らはスティープンのことを心にかけ、教会に戻ってほしいと願ったのでした。

彼のバプテスマがあったのは、風が強く、寒くて湿っぽい晩でしたが、新しい友人や隣人が50人以上も集まりました。皆、彼を心にかけている人々でした。会の終わりに、閉会の歌のために指揮者が立ちあがりました。ところが、スティープンのまなざしに燃える思いを読みとったその指揮者は、彼の手に讃美歌を渡しました。スティープンは、聴衆と共に歌うだけの立場から再び抜け出たのです。今やスティープンは教会のさっそうたる働き手でした。友を指揮して賛美の歌を歌っているときの彼の喜びにあふれた表情を、私はいつまでも忘れません。

エリザベスのことも思い出します。生活習慣や生き方が違って教会から離れた友人です。10年以上もたってから、彼女



は教会をまた見てみたいという思いに駆られました。日曜の朝、車を運転して教会堂の横を通りかかると、中に入りたいという気がしました。その日、彼女は私たちのワード部に出席しました。彼女の様子や服装はほかの人とかなり違って、自分は場違いではないかと気にかけていましたが、新しい友人たちはつゆほども気にせず、彼女を活動に迎え入れ、彼女は持っている芸術的才能を教会の発展のために生かしてくれました。家庭訪問教師は実に誠実に、単に責任を果たただけでなく、エリザベスを心から愛しました。違う町に住む現在も、いまだに親交は続いています。

やがて、エリザベスが教会員としての資格をすべて回復し、扶助協会の教師に召されるときがやってきました。新たな召しに支持されたその夜、彼女が足早に

教会から去るのを見て、私はもしや召しが重荷ではないかと心配になり、彼女に声をかけました。

すると彼女は言いました。「いいえ、支持を受けたことを早く帰って母に知らせたいんです。召しを受けたときは、ふたりして台所中を踊りまわったんですもの。『いつか、あなたが扶助協会で教えるって、前からわかってたのよ』と、母は何度も言うんですよ」と。

キャサリンのことも思い出されます。福音の教えに疑問を抱き、何年も霊的にさまよっていた友人です。自分から離れ、暗やみに入り込んだ彼女でしたが、キャサリンには、あきらめず、徹夜してまで真理を説き、疑問に答えようとする友人たちがいました。先日キャサリンは神殿で自分のエンダウメントを受けましたが、そうした大勢の友達と一緒にでした。考えられないことでしょうか。迷い悩んでいた頃のことからすれば、確かに考えられ

ないことです。では不可能でしょうか。いいえ、必要としたときに彼女のそばに友人たちがいたことを思えば、不可能ではありません。

では、迷う人々を捜し求める人はどうでしょうか。何も報われず、ただ与えるだけということはありません。与える人は、内にみたまのささやきを感じる機会を持ちます。生活の再建に手を貸すことを許してくれる相手の人から、一番大きな祝福を得るのです。私たちの証に頼ってくれる彼らから、力を受けます。そして、信頼されることで、信頼することを教えられます。経験を聞くことで、ものを見る目が開けてきます。また、その悔い改める姿から、贖罪の真実性を深く教えることができるようになります。人を捜し求め、教会員の医者となる機会こそは、言い尽くしがたい喜びをもたらすものです。

*マリリン・ブリック・タフト：ソルトレーク・シティのワード部日曜学校教師



キリストに従う者の大切な責任は、ヒトデを投げる人の言葉で言えば、「ヒトデを捜すこと」、主の言葉で言うなら「教会員にとっての医者」になることです。

私にできる世間のために
私は祈る

主は完全なお方です。 私は恐れません

ジョアン・ブレイ

私の看護学校在学中に、病院で末期患者のお世話をしながら、死そのものについて学ぶ実習がありました。勤務は8時間交替で、受け持ちの患者さんの体や心の要求に応じてあげる仕事でした。私はそのような患者さんと接するのにとっても気おくれしました。自分にはできないと本当に思いました。具合が悪いと言って学校に電話しようと考えましたが、成績につながるの、そうもできませんでした。

その日、私は不適任だという思いを抱きながら、病院のエレベーターに乗りました。昇っていくエレベーターの中で、夜通し心を傾けて祈り続けたその祈りが、

なかば答えられたのでした。

「心配はいらない。」その声はささやきました。

私は問い返しました。「でも、何と言え方がいいの？ 末日聖徒でない人に、死を何と説明したらいいの。」心のつぶやきは続きました。「クラスで末日聖徒は私ひとり。職員にも患者にも末日聖徒がひとりもない病院がいくつもあるのに。」

4階に着いたとき、私は担当患者の看護記録を見ました。看護記録を見る前に患者に接するのが普通で、それが勉強でもあるのですが、私のしたことは手順が違っていました。でも、部屋に入る前に記録を見なさいと促すものがあつたのです。「イブ・クリスプ 末期癌^{がん}」そしてそのすみの宗教の項に、「末日聖徒」とありました。

私はすぐ、暗い彼女の部屋にそっと入って行きました。彼女の手を取り、ケイン姉妹ですと自己紹介したとき、何カ月もの苦しみに光を失っていた彼女の目が、ほんの少し輝きました。

看護のお世話をしながら、楽に話できました。患者さんには家にまだ数人の子供がいること、まだ47歳であること。そして彼女は教会のことや、総大会に出かけて行ったときのことを話してくださ

いました。それは彼女のなつかしい思い出でした。私は次の日曜日の朝に、4月の大会の様子がテレビで放映されることを教えました。彼女はほほえみました。

その日、彼女は大やけどで廊下の端の部屋に入院してきた男の子のうめき声を聞いては「ああ、かわいそうに。あんなに苦しがつて」と同情していました。彼女の頭にあるのは、ひどく苦しんでいる人への思いやりと共感だけのように見えました。私は驚き、また彼女の態度に胸を打たれました。交替の時刻はすぐにやってきました。私は部屋を出る前に、彼女の枕を直し、ベッドシーツの上の呼び出しベルを取り、それを彼女の手握らせました。すると彼女は私の手をしっかりと握り返して、私が聞けずにいたことの返事を告げたのです。「主は完全なお方です。私についての主の計画も完全です。主が私を愛しておられることはよく知っていますよ。」

私は彼女を抱きしめて、無言のまま廊下に出ました。大きくひと呼吸してから中央デスクへ戻り、看護記録にこう記入しました。「クリスプさんのテレビを、日曜日午前6時、末日聖徒の総大会に合わせて見せてあげてください。お願いします。」私はそれから反省会に行き、教会員ではないクラスの人たちに、クリスプさんに私の判断を喜んでいただけたらうれしいですと証しました。

翌日の月曜日、私は授業中に主任教師から部屋に呼ばれました。クリスプ姉妹は日曜日の朝、総大会のテレビを見終わって間もなく、息を引き取られたとのことでした。クリスプ姉妹、ほかならぬあの姉妹のために涙がとめどなく流れてきました。たくさんのことを彼女から教わりました。「主は完全なお方です。主の計画も完全です。主が私を愛しておられることを知っています。」

*ブレイ姉妹はオクラホマ州タルサに在住

あの場所は今

カメラによる教会史跡巡り

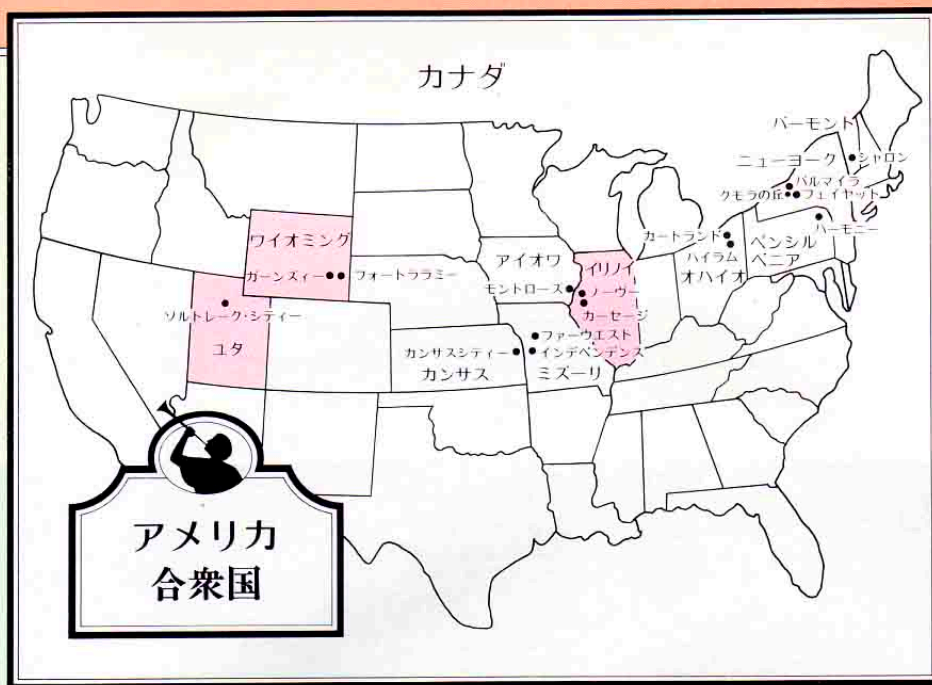
教 会史跡のカメラ探訪、その最終回である今回は、美しいイリノイ州ノーブーの風景と住居や建物から始まる。

住居や建物の多くは、かつて迫害を受けた聖徒らがグレートソルトレーク盆地に安住の場を求めて果てしない荒野へ旅立

ったときに、あとに残したもので、今は見事に復元されている。撮影はエルドン・リンショテンとジェド・クラーク。



イリノイ州ノーブーの訪問者センター。庭園には1978年夏に献納された扶助協会記念像が建っている。



アメリカ 合衆国

ノーヴーのジョナサン・ブラウニング家と作業場。ブラウニングは連発式ライフル銃発明者のひとりであり、ユタ州オグデンに入植した息子のジョン・モーゼス・ブラウニングは自動機関銃を発明した。



ノーヴーのウィルフォード・ウッドラフ家を正面から見る。

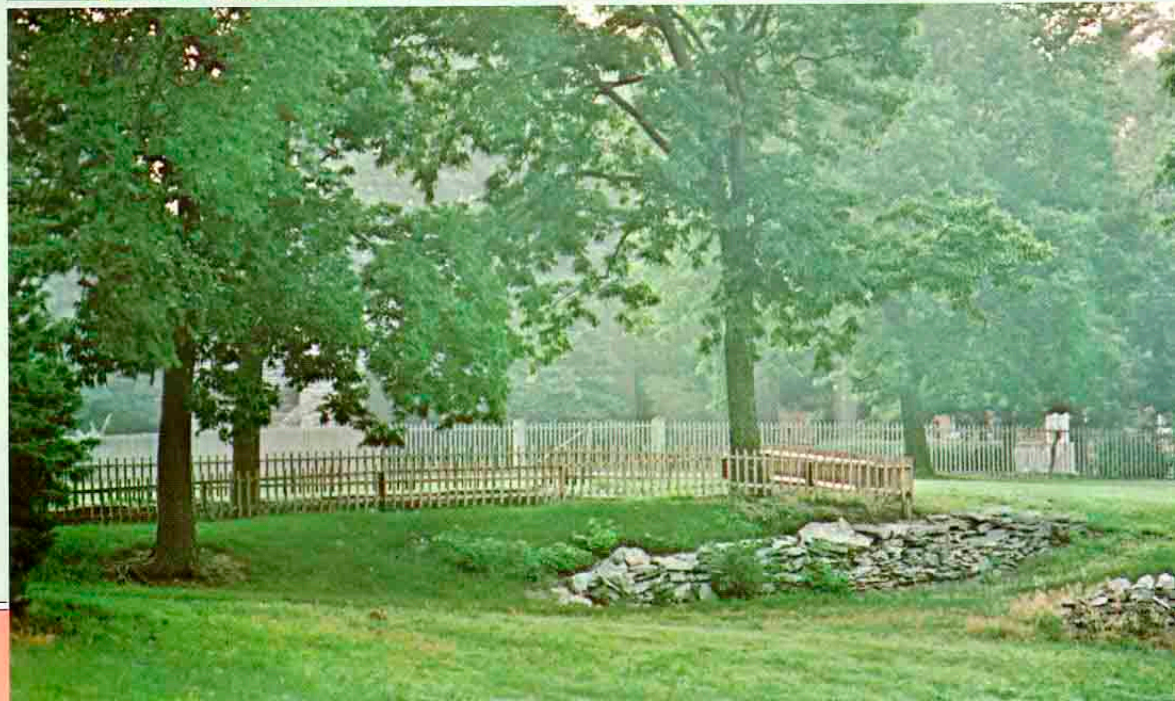


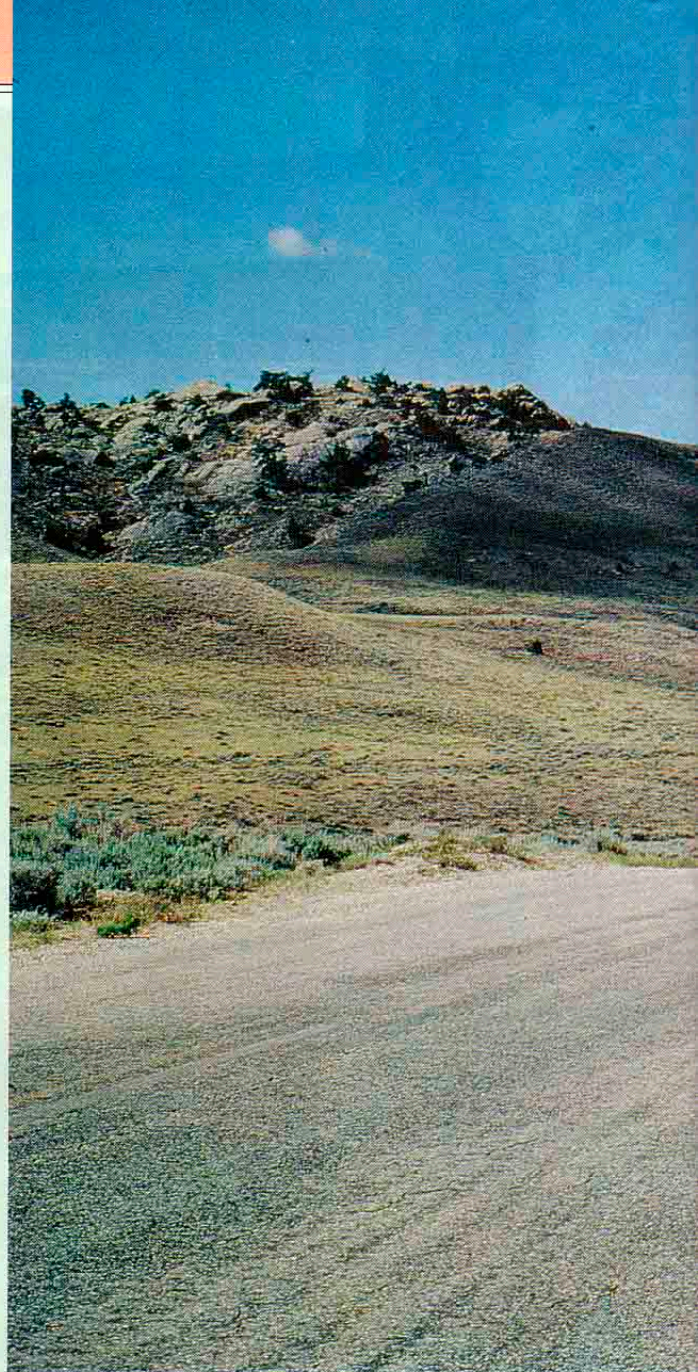
左上：再建されたノーヴーの七十人会館。1843年から翌年にかけて建てられ、講義や勉学、礼拝に用いられた。

右上：カーセージ牢獄の1階。収容された彼らはここで最初の夜を過ごした。

中央：カーセージ牢獄。1844年6月27日、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスがここで殉教。

下：スミス家の墓地。墓標にはジョセフとエマの墓の所在が記されている。ここには、予言者の両親のルーシー・マック・スミスとジョセフ・スミス・シニア、および兄のハイラム、幼くして死んだふたりの息子、ドン・カーロスとサミュエル、そのほか数名の友人が葬られている。





左上：ワイオミング州ララミー砦から西 8 キロの地点。高度 3,000 メートルのララミー山頂は西部山脈の始まりである。

2 番目：ワイオミング州グレンドの西にあるホースシュークリーク近くのヒーバースプリングズ。青々とした草原は聖徒たちの憩いのキャンプ地であった。泉の名称は、乗馬に秀で、偵察に活躍し、ここを最初に見つけた末日聖徒、ヒーバー・C・キンボールにちなんで名づけられた。

3 番目：1847 年 9 月、ソルトレーク盆地からウインタークォーターズへ引き返す途中のブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、そのほか数名は、ワイオミング州グレンロックに近いディアクリークを登っていて母親の（北米西部産の大きな）灰色ぐまに出くわし、岩の絶壁をよじ登ってようやく逃れたという。

下：ワイオミング州ガーンズビーに近いプラット川沿いのメキシコ山から西を望む。岩間を縫う小道は険しく、幌馬車からコップを落とせば後方の牛たちの鼻面をかすめただろうと、開拓者たちは伝えている。



上：エミigrant・ギャップから西を望む。西部への道にいくつもある「エミigrant・ギャップ（移民峡谷）」のひとつで、ワイオミング州デビルズ・ゲイト近くのものである。西部を目指す末日聖徒は皆ここを通った。

左：インデペンデンスロックから西を望む。ワイオミング州のこの有名なキャンプ地で、末日聖徒の子供たちは岩登りを楽しみ、大人たちは岩に名前の頭文字を彫りつけた。

現在のソルトレーク盆地。山間のソルトレーク・シティーは発展を続けている。



断食とは
どういうことでしょうか。
ただ飲食を
断つだけのことでないと
聞いていますが。



解答者
J・ロジャー・フラマン
ワシントン・スポークン伝道部長

確かにその通りです。ただ食を断つ以上のことが断食には含まれています。次のことを考えてみてください。

1. 主を礼拝するために、もっと多くのことを知ろうと断食をする。
2. 自分の霊性と主イエス・キリストに対する信仰を深めるために断食をする。

3. 福音に対する証を得、またそれを強めるために断食をする。
4. みたまの声を聴き、靈感を受けるために断食をする。
5. 救いの計画と、自分が主に頼っていることをもっとよく理解できるように断食をする。
6. 病気の人や特別な祝福が必要な人たちのために断食をする。
7. 断食献金を通じて貧しい人々を援助するために断食をする。

断食をする理由はまだありますが、自分にとって大事だと思われることを上にあげてみました。

イザヤ書58章3—12節には、まことの断食について記されています。ここに断食をする理由が列挙されていますので、具体的にあげてみましょう。「悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、……また飢えた者に、あなたのパンを分け与え(ること)」(6—7節)、それに断食から得られる祝福も書かれています。「また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、あなたが叫ぶとき、『わたしはここにおる』と言われる。」(9節)私は、これらの聖句に感銘を受けました。どのように断食をしたらよいのか、またそれによってどういう祝福を受けるのかを理解することができたのです。

断食と祈りはどちらも大切です。聖典にはよく両方一緒にして書かれています。

アルマは、自分の言葉は真実だと述べて、「私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った」(アルマ5:46)と述べています。断食には必ず祈りが伴わなければなりません。

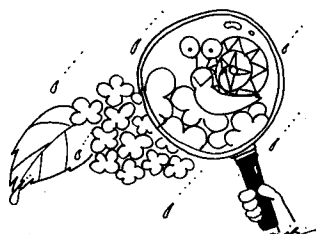
また、これみよがしに「偽善者がするように、陰気な顔つき」で断食をしてはならないことも忘れないでください。(マタイ6:16—18; IIIニーファイ13:16—18参照)

私は断食についてすべて理解しているわけではありません。私たちが断食をするとうなるか、またどうしてそうなるかということは、言葉ではうまく説明できません。しかし断食をしたときの気持ちは神聖で、またとても力強いものがあります。私たちは鼓舞され、教化され、鍛えられて強くなります。私は断食とそのときの感情とは密接なつながりがあると思います。

私の息子のスペンサーは、2年前にバプテスマを受けたときから、頑張って断食をしています。そうした小さいときから断食をするようにしむけたわけではありませんし、いつも私たち大人と同じ時間、断食をしているわけでもありません。その息子が以前の断食証会で、私に「お父さん、証してもいい？」ときさやきました。私はにっこりしてうなずきました。彼の真剣な証は私の心を打ちました。彼は何かを感じていたのです。私もそうでした。私たちは断食を通して霊的に成長します。それは確かなことです。



各地の たより



カット：泉谷美樹子(高3)
(札幌西ステキ部藻岩ワード部)



十二使徒定員会会員 ブルース・R・マッコン キー長老逝去

去る4月19日、癌のため長い間闘病生活が続けていた十二使徒定員会会員ブルース・R・マッコンキー長老が、ユタ州ソルトレーク・シティの自宅で息を引き取った。69歳であった。

マッコンキー長老は昨年1月に結腸癌の手術を受けたが、その後、治療を継続しながら使徒としての職務を遂行していた。それが最近になって病状が悪化し、入院。今回の総大会での説教が彼のこの世での最後の説教となった。こう証している。

「私は主の証人のひとりであり、いつの日か主の手と足の釘跡に触れ、主の足を涙でぬらすことでしょう。しかし、主が神の全能の御子であられ、私たちの救い主、贖い主であられ、また救いが贖いの血以外の何ものからももたらされないとの知識は、今と何ら変わることがないのです。」

ブルース・R・マッコンキー長老は、1946年10月、31歳の若さで教会幹部に召された。その後、ハロルド・B・リー大管長の副管長としてマリオン・G・ロムニー長老が召されたのを受けて、1972年10月に十二使徒評議員会会員となった。

マッコンキー長老の説教は常に昇栄に至

るための福音の原則を説き明かすものであり、そこに脈打つ救い主への愛は、人々の胸を打たずにはおかない。また生涯にわたる聖典の研究は多くの著作を生み、中でも「モルモンの教義」(Mormon Doctrine)は、非公式ながら教会の信条を網羅したものとして広く活用されている。

その低音と堂々たる体軀は他を圧倒するものがあったが、また逆に、宝石細工などの細やかなセンスや技術を要する趣味も持っていた。

遺族はジョセフ・フィールディング・スミス大管長の娘である妻アメリカと4男4女である。

日本の伝道初期の改宗者 熊谷たまの姉妹17歳の 日記に見る信仰の息吹き

レポーター：倉見 光男(札幌ステキ部白石ワード部)



北海道の教会員の草分けであり、慈母のように慕われていた熊谷たまの姉妹が亡くなられてから7年になります。

先般ご遺族から熊谷姉妹の日記帳、書簡などの記録類を教会の資料にと提供を受けるとともに、公開についても承認をいただきお預かりしていましたが、潟沼札幌ステキ部長の助言により、札幌伝道本部の資料室に保管していただくよう準備を進めているところです。

熊谷たまの姉妹は1892年(明治25年)の生まれで、伝道初期の時代に宣教師より福音を伝えられ、1908年大変な偏見と迫害の中で改宗されました。

当時大谷高等女学校に在学中でしたが、仏教の学園の中でただひとりのクリスチャンとして全校の注目的になりました。ただひとり清川先生という方だけは、「自分の信ずるままに進みなさい」と励ましてくれ、そのおかげで信仰を貫くことができたのです。姉妹の堅い信仰はやがて校内の偏見を信望と賞賛に変え、卒業してからも同窓会の会長に推され、その責任を長い間献身的に務められました。また再三バザーを開いて益金を寄付するなど、母校のために尽くされたのでした。

また北海道における女性新聞記者の第1号としても有名で、北海道新聞の前身であ

る北海道タイムズで活躍されました。低温研究で有名な北海道大学の中谷宇吉郎教授が「青函連絡船で北海道の美しい婦人記者を見た」と話されたのは、若き日のたまの姉妹のことであり、この言葉からもさっそうとした女性記者ぶりが目に浮かびます。

1901年9月1日、ヒーバー・J・グラント大管長が横浜において、東アジアで最初の伝道地として日本の地を奉獻して以来、23年間におよそ88人の宣教師が伝道しました。しかしながら、幾多の障害から改宗者は非常に少なく、惨たんたる結果で、ついには1924年8月、日本伝道部は閉鎖されることになりました。

その後大戦を経て、1948年、クリソード伝道部長によって伝道が再開されるまでの24年間の暗黒時代に、孤立無縁の状態かんで艱難を耐え忍ぶことは並大抵のことではなかったことと思われます。この間の詳細については「聖徒の道」1975年11月号 517ページ「日本 日出づる国の福音の光」を参照していただきたいと思います。もし私たちが今同じ立場となったらどうでしょうか。伝道部が閉鎖され宣教師もひとり残らず引き揚げてしまい、数少ない友も次々と教会を去り、ついには自分ひとりだけとなったとき、24年間も耐え続けることができるでしょうか。姉妹の「百万年といえども我行



●1970年10月にソルトレーク・シティーを訪問したときの熊谷たまの姉妹(右端)。左から奈良富士哉兄弟と源子姉妹ご夫妻、尾古子ヨ姉妹。

かん」という信仰に心を打たれます。

伝道部再開後間もなく、若き宣教師ポール・C・アンドラス長老(後の伝道部長)が北海道で伝道を開始すべく札幌の駅頭に降り立ったとき、この荒廃した北限の地にもや出迎える人などいまいという思いに反して、涙を流して出迎えたひとりの姉妹がいたのです。この姉妹こそ、その日を24年間待ち続けていたたまの姉妹にほかなりません。アンドラス伝道部長はある大会で、このときの様子を次のように話してくれました。「このとき熊谷たまの姉妹が電話ボックスに飛び込んで、『大事件です。札幌に偉大な人が来しました。これから札幌に偉大なことが起こります』と新聞社に報告し、翌日の新聞にふたりの若い宣教師の記事が大きく載せられました。」

私は1960年4月、旭川支部から札幌支部に移った際に初めてお会いしましたが、その後長い間ホームティーチャーとして熊谷姉妹のご家族を担当させていただいたこともあり、よく白石区本通りのお宅から教会(現藻岩ワード部)まで車で送り迎えをしたことが思い出され、いつも喜んでおられた姉妹の姿が心に残っております。そして1965年の第1回ハワイ神殿訪問、1970年10月の総大会出席とソルトレーク神殿訪問などのツアーにご一緒させていただいたことを幸福に思っております。また1975年8月に東京で行なわれた地域総大会にも元気で出席され、キンボール大管長の東京神殿建

築の発表に驚くとともに、大変喜ばれていました。

それから約3年後の1978年6月2日の早朝、心筋梗塞により86歳で亡くなられました。そのわずか2カ月後の8月13日に、札幌ステーキ部が組織され、さらに1980年には東京神殿が献堂されましたが、ご一緒に出席できたらどんなに喜ばれたことでしょう。

さて熊谷たまの姉妹の日記についてですが、モルモン経よりひとまわり大きいノートに黒インクで、1909年(明治42年)4月1日から5月3日までの日常生活について詳細に記しており、教会員としての喜びが生きてと伝わってきます。1909年といえば熊谷姉妹が会員になられた翌年であり、モルモン経の初訳本(文語体)が印刷出版された年でもあります。日記の文章は文語体で、文字も変体がなを用いており、内容も「若い女性」の年代である17歳にしては大人そのものであると感じました。

私はこの日記から、日記は正確な記録であるとともに後の世の人を鼓舞するために非常に有益であり、すべての教会員に強く勧められている意味がよく理解できます。そして日記を通して、日本の伝道の原点である伝道初期の当時の様子、また明治のはつらつとした息吹きを感じることができました。以下に、変体がなは書き改めてその一部をご紹介します。

—熊谷たまの姉妹の日記より—

「April 4, Sunday 1909

晴天にて実に故郷の空の偲ぶる時期なり。今日は月の第1の日曜日にて世界における兄弟は凡て断食する日なり。午前9時頃、日曜学校に行き10時まで愛らしき女兒等と共に聖書を研究せり。11時より主の晩餐会あり。此の間にセリ、メリアト、高橋、小川兄弟、松木様、自分等の話あり楽しく此の会を終えたるは12時半頃なりき。

2時より聖書研究会あり。今日は、本教会の組織に付きて少しく学びぬ。それも又斎藤様等の面白き質問ありて甚だ興味深かりき。

4時に此の会は終はりて直に帰宅し、夕飯を食して6時半頃家を出て南5条染物屋まで至りしにその途中懐しき諸留先生に逢ひたり。先生の態度は常に謙遜なり。吾等の嘆賞する所なり。7時15分前に教会に行き7時半より説教はじまりたり。

本日はラスケリ、カツラ両兄弟のみ非常に熱誠を籠めて話されたり。

9時に終りて30分ばかり遊びて帰宅せり。今日は終日教会において過したり。

ああ実に実に愛する聖き当教会よ。願はくは神の恵みに依りて日々に栄えんことをキリスト様の御名によってお願い申し上げます。アーメン。11時過ぎ就寝。」

(くらみ・みつお 1936年生まれ、白石ワード部大祭司グループリーダー)

神殿宣教師に 召されて

—入院中に目にしたモルモン経によって改宗—

東京神殿宣教師
森田 喜四郎

●永遠の結婚(結び固め)の儀式を受けたときの森田ご夫妻(息子さんご夫妻と共に)



私たち夫婦は、昨年の暮れに神殿宣教師に召され、今年の元旦から正式にその任務に就きました。以来1カ月あまり、温かい神殿長会のご指導のもと、信仰深い兄弟姉妹たちに助けられて、厳しくもまた楽しく、懸命に頑張っております。今は、毎日聖なる「主の宮居」に参入して、神聖な儀式に奉仕できる幸せをかみしめています。

私が改宗して教会員として確認されて神権を授けられ、さらにこのたび神殿宣教師として召されたことは、無上の祝福であり、過去を振り返ってみますと、まことに感慨無量なるものがございます。

私の妻はもう20幾年も前からの会員で、長男一家も俗に言うところのモルモンの家庭ですが、私は周囲の期待を意識しながらも、改宗を頑強に拒んでおりました。

私の生家は曹洞宗で、年を重ねるに従って信仰心の深かった両親の影響を受け、次第に仏教に親しむようになりました。光陰矢のごとしで、時は流れていつの間にか還暦を迎えてしまいました。不思議なもので、その頃から死んでいった父や母の夢をよく見るようになったのです。やはり親の死の年齢に近づいたからでしょうか、楽しかった幼い頃のことや、後年悔いを残している親への不孝が、いろいろな形で夢の中に現われました。そのたびごとに親への思慕が増して、目が覚めたら枕を濡らしていた、ということもございます。

その頃、かつての勤め先のOB会の会報に出した随筆の一部には、このように書いています。「また、父は鎮守様や菩提寺の世話役を長いことやった。菩提寺は曹洞宗で、大本山は越前の永平寺だが、当時の住職は真田田信房という学者で、書家だった。村の学校を卒えた部落の子弟が本堂で書道や論語を習ったという。

父はこの和尚と昵懇で、母は珍しいものをつくると、ご先祖様にあげるのだと言っては庫裏に重箱を運び込んだ。世話役ということもあって、本堂の修復の折には特に力を尽くし、その功績が認められたということである。

今、寺の境内には、書家の住職の筆になる立派な記念碑が建っている。

父は昭和32年に76歳で生涯を終えた。死ぬ前にやせ衰えた体を家族の者に支えられ、羽織を肩にかけさせ、はるか西方に向かってしばしの間合掌していたという。それから2、3日後に苦しみことなく静かに往生した。私は急を聞き、岡山から駆けつけ、最後の別れができたことは幸せであった。

母はそれから5年おくらせて父のあとを追った。父と母は寺から特別の院号を贈られた。

私はもう幾年もの間、父母の命日と戒名を毎年手帳の巻頭に書き留めて、いつも胸においている。まことにあって、還暦を迎えたきょうこの頃、父母への思慕はますます募るばかりである。

このように、親が残した些細な事柄が大きく私に作用したことから、今後は立場を変えて、私の考え方や行動が私の子や孫に大きく影響することは必定で、その責任はまさに大なりと言わなければならない。

私の場合、誇り得るものは何もない。今はただ残された人生を大切に、元気で楽しく過ごしていくことが私にできる唯一

の方法で、これがすなわち親が子や孫に対する当然の義務ではあるまいか、と考えている次第である。」

私は還暦から数年後にライフワークから離れたとき、今後どうやって老化を防止しようかとか、老後をいかにして快適に過ごそうかとか、いろいろ考えました。「終わりをければすべてよし」とはよく言われる言葉ですが、私のささやかな人生の終期をいかに生きるべきかについて真剣に考えたのです。いかに生きるべきかということは、結局はいかに死すべきかということと同義語であるということだけがわかりました。

人間としての存在はこの世に生まれたときに始まり、死によって終わると考えられています。しかし靈魂不滅という言葉もあるように、死んだ人の霊の行方とか、死とは一体何なのだろうか、となると皆目見当がつかません。まさに形而上学的問題なのです。人間は最後はどこへ行くのか、この世の旅の終着駅はどこなのか、しよせん人知ではわからないことなのです。

私がたまたま病気で入院し、時間をもって余していたとき、妻がこっそり荷の中へ忍ばせておいたモルモン経を生まれて初めて手に取りました。試みにページをめくって目を通しました。私は読むうち次第に引き込まれていきました。そして遂にはのめり込んでいったのでした。

1980年の12月に教会の門をたたき、求道者として宣教師について学びました。実はその前に、もう腹は決まっていたのです。翌年6月にバプテスマを受け、間もなくアロン神権を授けられ、それから1年足らずでメルケゼデク神権を授けられました。

その間私は聖典と真剣に取り組んできました。でも教義を理解すればするほど、反対に信仰上の悩みに襲われ出したのです。その根本原因は、私の信仰の弱さから「へりくだる心と悔いる精神」が欠落していたということになりました。

長老に聖任されてから1年過ぎ、ステーク部垣から神殿参入を期待されるようになりました。そのときは完全に落ち込んでいて、不眠症や神経性胃炎に悩んだりしましたが、幸いにも日頃敬愛しているある姉妹や信頼するホームティーチャーの助力により、ようやく立ち直ることができたのです。

1983年8月20日は忘れられない日となりました。兄弟姉妹たちの温かい励ましにより、私ども夫婦が初めて神殿に参入して、

聖なる儀式を受けた日なのです。当日は雲ひとつない好天に恵まれて、東京神殿に行きました。俗界を離れて「主の宮居」に入り、儀式を待つ間に黙想していたとき、心は本当に洗われるようでした。エンダウメントを受け、その後私ども夫婦が結び固められてから、さらに息子との親子の結び固めの儀式を執行していただきました。

それ以降、神殿宣教師の召しをいただくまで、週に1度のペースで神殿の儀式を受けに通いました。小松元神殿長はじめ、神殿長会の方々から温かく迎え入れられ、奉仕しておられる宣教師の方々とも次第に顔見知りとなりました。言葉を換えて言えば、たびたびの参入によって、私たち自身が霊的に高められた、と言うことができるのではないのでしょうか。

私は神殿の儀式が聖なる神権の権能により行なわれ、生者はもとよりすでにこの世を去った死者も含めて人に救いをもたらす最も神聖な儀式であり、昇栄するために欠かすことのできない儀式であることを知っています。

昨年の暮れには、私の父母や、すでに死んだ実兄のための身代わりの諸儀式を執行していただきました。そのときの感激は忘れることができません。エンダウメントの儀式はそれぞれ日を変えて受けたのですが、新しい名をいただいたときには、胸にジーンと響いてきて、熱いものを感じたのです。そのとき、この鍵の言葉は終生忘れるものかと胸に刻み込みました。現世を去ったあとに、やがては日の光栄の王国において夢にまで見た肉親と再会できますようにと、私は儀式を受けながら懸命に誓約をいたしました。

旧約聖書にあるマラキの予言通り、この末日に予言者エライジャによりもたらされた権能によって、私たちの先祖とこれから増え続けるであろう子孫とが、愛によって完全に結ばれる基礎作りができたのです。何とすばらしい祝福ではないのでしょうか。

「彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」(マラキ4:6)の聖句を厳粛な儀式を通して証としていただいたのです。

本文の前の方に私の拙文の一部をあえて転載させていただいた所以は、まだ真の福音を知らないうちに書いた原稿がその精神において、この聖句に偶然にも相通じるも

のがあることに気づいたからです。私が意識すると否にかかわらず、私自身がすでに神のみ手の中にあったことを知り、その偉大さを改めて思い知った次第です。

今は一日も早く先祖の霊を慰めるべく、引き続いて糸図の探求に努めています。

私は死者の身代わりとして働くために、神殿にたびたび参入するすばらしい兄弟姉

妹に対して最大の敬意と感謝の意を表するとともに、彼らのうえに主の豊かな祝福のあらんことを祈らずにはおられません。

そして私は聖徒としての道をよく守り、妻と共に、18カ月の宣教師としての任期を全うできますよう、心から願っています。

(もりた・きしろう 1917年生まれ、東京ステーキ部吉祥寺ワード部出身)

とに対する^{あんど}安堵の気持ちで一杯でした。

福音によって私の疑問は解けました。すべての判断がキリストの福音によることで、私の生活の基盤も確固たるものとなり、自信もわいてきました。

2度目の聖餐会のお祈りのときでした。体中が突然カットと熱くなり、今度は涙がふれて止まらなくなりました。それらの様様な不思議な体験をして、1月6日、ついにバプテスマを受けました。ジョンソン長老の流暢な言葉に続いて見事に水に全身をつけられたそのとき、水の中がとても明るくキラキラして、本当に鮮やかな水面が見えた気がしました。

このようにして、やっと私も神の国へのドアをひとつくぐることができました。

妻と知りあった頃、彼女が末日聖徒とは知りませんでしたが、何の違和感もなく、今こうして彼女と同じ究極の道に進むことができたことを考えると、どうしてもそこに神の導きを感じないわけにはいきません。

次は神殿結婚による結び固めの儀式を受けられるように、本当に頑張らねばなりません。これまで以上にサタンの誘惑も激しくなり(それは実感していることですが)、また裁きの日もそう遠い未来のことではないことを考えると、恐ろしさで一杯になりますが、負けてはいられません。くじけることなく、いつも助け合えるよう、神様が私たちふたりを結びつけ、そして祝福して下さることをどんなときでも感じています。

私は祈ることで、モルモン経が本当に神の力によって書かれたものであることがわかりました。そして末日聖徒イエス・キリスト教会が唯一、正しい教会であることを証します。(かじはら・あつし 1959年生まれ、尼崎ワード部書記補助)

「主人が真っ白い服に身を包んで、私の前に立ったとき……」

尼崎ワード部
梶原 馨

年末年始の1カ月の間に、私たち夫婦に起こったすばらしい出来事をお話ししたいと思います。

私は今から約12年前、平野勝也兄弟の導

人生の目的を 探し求めて

—お休み会員であった妻に
導かれ—

神戸ステーキ部尼崎ワード部
梶原 淳司



私は今年の1月6日、新年最初の安息日にバプテスマを受けるという幸運に恵まれました。

私の改宗のきっかけは妻との結婚にありました。妻とは、私が会社に入って1年後の春に結婚し、そして転勤のため、大阪に住むことになりました。学生時代から私はほかの大勢の人々と同様に、人はなぜ生まれ、死んでいくのか、また死後はどうなるのか、そして宇宙の存在とは何か、などの疑問を抱き続けていました。けれどもそれらの問いを投げかける勇気も、また相手もありませんでした。

一方妻はここ5年間ほど、教会員として不活発な時期を送っており、教会や福音に関する話は私たち夫婦の会話にはのぼりませんでした。

ところがある日、夕食を終え、とりとめない会話をしているうちに、話題は生きる目的や死後の世界、また我々をとりまく宇宙とは何かという意味のものになっていきました。結論も出ずに話し疲れて時計を見ると、午前4時という有り様でした。

今考えれば、妻はそのときに答えを知っていたはずですが、自分の不活発さゆえに私を説得できないと思い込んでいたのでしょう。それでは教会に行ってもその答えを聞いてみるべきだ、と言うのでした。私はその夜、何ら答えが見いだせないまま床に就くしかありませんでした。

それから数カ月たったある日、宣教師からの電話がありました。早速、教会に出向いた私たちを玄関先で迎えてくださったのが、高橋長老とジョンソン長老のおふたりでした。そして、監督室に通され、原田監督にお会いしました。何とも温かい雰囲気の中でお話ししてくださったのですが、そのときはまだ私自身はかたくなな心のまま、今抱えている疑問に対する答えをもらうだけでいいのだと考えていました。

その日の夕方、宣教師のおふたりはただちに私どもを訪問してくださり、レッスンが始まりました。もちろん最初は福音に対する畏敬の念はあっても、それを真実だと信じるまでにはいきませんでした。

しかし不思議なことに2回目のレッスンからは、自分でも驚くほど素直にモルモン経や福音に入っていけるようになりました。また、この頃から、好きだった酒とタバコもすっかりやめました。そして、これも不思議なことに、それらを楽しみたいという気持ちも、何かもっと大きな力で押し溶かされていくのでした。

ともあれ、福音に素直に入っていけたのは、宣教師たちによる本当に心のこもったレッスンの賜であり、またモルモン経を読み進むにつれ、私の心が今までどのようなにも得られなかった平安な気持ちになったからでした。そして何よりこれまで探し求めていたものが、今ついに見つかったこ

きでこの教会を知り、当時の北海道旭川支部でバプテスマを受けました。小学校6年生のときでした。

その1年後、東京に引っ越し、小岩ワード部に移りました。小岩ワード部では青少年の活動やオルガニストの責任を通して、多くのすばらしい経験をさせていただきました。

しかし、もうすぐ20歳になろうという頃から私の足はだんだん教会から遠のき、いろいろな理由をつけて自分を正当化し、とうとう教会に行かなくなりました。そしてそのまま数年たち、昨年5月、結婚しました。主人はとても優しく、私を大切にしてくれて、毎日本当に楽しく暮らしていました。

そんなあるとき、ふたりで話をしていると主人が「何のために生きていて死んだらどうなるのか、神は存在するのか」という疑問を私に投げかけてきました。私は言葉に詰まってしまいました。自分の知っている限りの説明をしようとしたのですが、私は真理を知っていながらそれを行っていませんでした。自分が恥ずかしくて主人に胸を張って福音について紹介することができなかったのです。また、私自身、教会に戻る勇氣ありませんでした。でも、主人はそのことについてどうしても話を聞いてみたいというので、私は仕方なく小岩ワード部の友人に電話をして「私の家から一番近い教会はどこにあるのか調べてほしい」とお願いしました。

そしてある日、私たちにとって重大な結果をもたらすことになる電話のベルが鳴りました。尼崎ワード部の宣教師からでした。友人から巡り巡って宣教師へと連絡がいったのです。早速、12月9日の夕方、自宅でレッスンを受けることになりました。

最初のレッスンのとき、長老たちは「この7回のレッスンが終わったとき、あなたの持っている疑問はすべてなくなります」と言われました。その言葉の通り、主人の持っていた疑問は一つ一つ解決されていきました。レッスンは週2回のペースで進めていただきましたが、主人は回を重ねるごとに目に見えて変わっていきました。

最初のレッスンを受けた次の日の朝、彼はひとりで声を出して神様に祈っていました。そして2度目のレッスンのときにはすでに知恵の言葉を守ってましたし（主人はタバコを1日1箱以上、お酒もほとんど毎日飲んでいました）、仕事に行くときも、モ

ルモン経を持ち歩くようになりました。また、1度だけ安息日に教会に行けない日があったのですが、そのとき主人は気持ちが悪く不安定になり、「教会に行きたい」と言いました。

私の方とは言えば、教会に戻る決心がなかなかつかず、ずっと悩んでいましたので、この主人の急な変化に本当に驚き、「何が起こったのだろう」とただただ唖然とするばかりでした。

でも、主人は自分が変わることによって、私に模範を示してくれたのです。それほど長老たちの教えてくださる内容はすばらしく、この伝道のプログラムが神様の完全な教えであることをはっきり知ることができました。

主人は私の今までの悪い模範があつたにもかかわらず、1月6日、みずから望んでバプテスマを受けました。レッスンを始めてから約1カ月後のことでした。私も主人のバプテスマによって、心からの悔い改めをし、どんなことがあっても2度と教

会から離れない決心をしました。

主人が真っ白い服に身を包んで、私の前に立ったとき、バプテスマの儀式で水の中に沈められ、そして聖霊の賜を受けたとき、私のこの胸の内がどれほどの喜びと、感激で満たされたことか……。とても言葉で言い表わすことはできません。

主人と結婚したときは、まさかこの人と共に信仰生活を送ることができるなどとは、考えてもみませんでした。私はこのことを通して、私が福音の道を外れたとき、神様がどれほど悲しまれたか、そして私たちをどれほど愛してくださっているのかがはっきりわかりました。

私たちをここまで支えてくださった高橋長老、ジョンソン長老、そして教会から遠のいていた私をずっと見守ってくださった平野兄弟姉妹と、小岩ワード部、尼崎ワード部の兄弟姉妹に心から感謝します。

（かじはら・かおる 1960年生まれ、尼崎ワード部扶助協会書記）

人生の岐路で 触れたみたまの ささやき

北陸地方部
金沢支部
山田 憲彦



まだ名古屋にいたときのことで。結婚後しばらくして、新しい仕事を探すことになりました。すでにふたりの子供に恵まれており、貯金もなかったので、1日も早く安定した職業につく必要に迫られていたのです。何度も名古屋駅の近くにある職業安定所に足を運び、面接を受けに行きましたが、これはという仕事はなかなかありませんでした。

そんなある日、やはり職業安定所で求職のリストを繰っていますと、その中のひとつに妙に私の心を引くものがありました。それは非破壊検査と呼ばれる職種の会社で、放射線や超音波、あるいは磁力線などを使って、金属構造物の欠陥の有無を調査する仕事でした。私はリストをよく読み、しばらく考えたあとにそこの係員に相談するこ

とにしました。しかし、その係員は誠実な態度で「放射線を扱う仕事は危険ですから、よした方がいいですよ」と言われたのです。「リストに放射線手当1日500円と書いてあるでしょう。それが危険であることの証拠ですよ」とも。

私はいくら落胆してそこを去り、駅に向かってしょんぼり歩いていました。すると、先程の会社に行かなければならない、という気持ちが心の中にわきあがってきました。これまでに何度か感じたことのある不思議な力でした。私はその力に従うことにしました。幸いその会社名を覚えていたので、早速電話番号を調べ、連絡を取りました。

その後、ことは順調に進み、1週間ほどして私はその会社に入社しました。仕事は、

おもにガスプラントや石油コンビナートにある石油の貯蔵タンクなど大型構造物の保守検査でしたが、物珍しさも手伝って毎日楽しく働くことができました。しかし、ひとつだけ大きな問題がありました。仕事の性質上、長期間の出張をあいっいでしなければならなかったのです。入社して1週間もたたぬうちから社命で、兵庫、岡山、大阪、和歌山、そして愛媛と、私は数人の同僚と共に飛び回らなければなりませんでした。

1カ月のうち、20日以上も家族と離れて生活するのです。家族を守るためだからやむをえないんだ、と自分に言い聞かせてはみても、心は次第に重くふさがっていききました。「主のみたまに従ってこの仕事を選んだのに、これは一体どういうことだろう？」夜、出張先の宿で横になりながら、何度もそのことについて考えました。教会の責任も、もう長い間行なっていないのです。

そんなある日、久しぶりに名古屋に戻り、事務所で同僚たちと待機していたときのことです。3カ月の予定で金沢市のある工場に出張していた同僚のひとりが、1週間ほどで勝手に職場を離れ、逃げ帰ってきたのです。仕事がむずかしくて失敗を繰り返し、何度も出先の上司から文句を言われて耐えきれなくなったとのことでした。社長は言うにおよばず、全員が驚き慌ててしまいました。事情はともかく、会社の信用にかかわることだったからです。先方に連絡して陳謝したあと、社長はすぐに代わりの作業員を送ることを約束して電話を切りました。

その後、しばらく何事か思案していた社長は、思い切ったように私たちの方を向き、「誰か代わりに言ってくれないか」と言いました。しかし、誰も答える人はいませんでした。3カ月という期間があまりにも長かったことや、仕事の内容もラジオ・アイソトープを使う危険でむずかしいものだったからです。みたまのささやきがあったのは、そのときでした。「あなたが行きなさい」「えっ」と私は思いました。妻と子供たちの顔を頭をかすめ、教会の責任のことも考えました。3カ月の出張などとてもできるはずがありません。会社の中はしんと静まりかえっていました。誰も口を開こうとはしません。そんな中で、みたまのうながしは次第に強くなっていきました。鼓動は早くなり、胸の中は熱いものでふさがれて息苦しくさえなってきたのです。私は早く楽になりたい一心で口を開きました。「社

長、私が行きます。」

金沢での仕事は想像以上にむずかしいものでした。それに前任者の不祥事もあって、上司の態度はこのほか厳しく、緊張した毎日が続きました。そこでは原子力発電所で使用するバルブの部品の放射線撮影をおもに行なっていました。次第に仕事に慣れ、少しずつ光が見え始めてくると、新たに仕事への喜びが感じられ、今度の仕事が、自分によく合っていることに気づきました。また、一生懸命働くことによって上司の信頼を得、心が通じ合うようになってきました。家族に会えないことだけが残念でしたが、それにも主の祝福があって、月2回、会社の負担で名古屋に帰れるようになりました。私は心から主に感謝しました。

3カ月はあっという間に過ぎました。出張の任期が終わりに近づいたころ、上司が「これからここで働いてくれないか」と言ってくださいました。私は驚きと喜びで涙が出そうになりました。そのような言葉は想像もしていなかったからです。しかも、上司は続けて「もしそうしてくれるなら、家を見つけて、奥さんたちと住めるようにしてやるよ」とも言ってくださったのです。その話は社長が渋ったため水泡に帰しましたが、金沢を去る日、その上司は「もし何かあったら、いつでも俺のところへこい。いくらでも助けるからね」と言葉をかけてくれました。

名古屋へ戻ると、また日本のあちこちを飛び回る生活が始まり、やがて1年間の和歌山出張という社命が下りました。もち

ろん単身赴任です。条件も金沢のときよりずっと悪いものでした。ここに至って私は長い間考えてきたことについて決心し、それまでの会社を退職して、金沢のかつての上司のもとに行くことにしました。上司は喜んで、私と家族を受け入れてくれました。

それから2年半、約束通り家を与えられ、愛する家族と共につつましく幸福な日々を送っています。もちろん、もう出張することもなく、金沢の教会でも妻と共に、大切な責任を与えられて働く機会を得ています。

今、振り返って思うことは、主はきょうの日のことをご存じのうえで、あの日落胆しながら職業安定所を出た私に、みたまを遣わしてくださったということです。また、金沢へ行くようにというみたまのうながしも、そうだったのです。もし、主のみたまに疑いを持ち、従っていなかったとしたら、今頃私の家庭は荒廃し、私は主に叱責を受けていたに違いありません。

主のみこころは、初めはわかりにくいかも知れませんが、しかし、やがて主はやはり正しく、人は主に従順であることによって祝福を得られることもわかってきます。

受けている祝福に比較すると、私が主にお返しできることは、本当にわずかなことでしかありませんが、これからも家族がよく一致して、主に仕えていきたいと思えます。確かに主が生きておられ、私たち一人一人の生活に心を配ってくださっていることを証します。(やまだ・のりひこ 1954年生まれ、金沢支部伝道主任)

「私は自由意志でこの家庭に生まれてくるのを選んだと感じます」

名古屋伝道部専任宣教師

河内 博美

●改宗した河内典幸兄弟と共に



私の家は専業農家です。父は私が母の胎にいるとき、町会議員に立ち、みかんブームに乗って農業パイロット事業として4町の山や田を切り開きました。両親はそのミカンを育てるために、1年中農業づけになり、身を粉にして働きました。やっ

とみかんが立派になり始めたころ、生産過剰でみかんの値段は暴落、両親は体を壊し、母はほとんど目が見えなくなりました。

父は体を壊したことで無農薬、有機農法に第1歩を踏み出しました。父が有機肥料を作るために始めたことは、近くの町へ毎

日朝夕、残飯を集めてまわることでした。私は作物や自然を守ろうとする両親のひたむきな姿に励まされましたが、世間の人々が卑下して見ることに對して、どうしようもないくやしさを覚えました。母は「目的あつての残飯屋よ」と、よく私たちに言い聞かせてくれました。そんな両親から、忍耐、正義、犠牲ということを学びました。

こうして両親は、人の命をあずかる大切な作物を作る仕事で、人に笑われようとも、苦しくとも、まず自然の偉大な力による農法を始めたのでした。その後、だんだん世間の人々も、この農法が将来性のあることを知ると、父が一心に作った仕事を取りあげようとなりました。父から仕事を取りあげ、足を引っばる大人の汚れた世界を、私はじっと見ることにできませんでした。あまりの苦しさ、家族の中はいつもけんかの毎日でした。

私が中学3年のとき、家族の不幸が相次ぎました。上の兄が、ある宗教によって人が変わり、家出をしました。その年の11月、母が交通事故で入院しました。仕事の中に父が誤って母がトラックの後ろにいと知らずにひいたのです。母の胸はぐちゃぐちゃにつぶれ、助かる余地はないほどでした。母は幸い気力で奇跡的に助かりましたが、私はどうしてそのような不幸が続くのかわかりませんでした。

このようなことから、私はどうして生まれたのか、なぜこの家族と共に生活しなければならないのか、真剣に考えるようになりました。私は、上の兄が元のやさしい兄に戻ってくれるために何かしなければならぬと思ひ、宗教に関する本を読みあさりました。間違つたことを信仰することは、人を不幸にします。サタンの力が恐ろしいものであることも痛感しました。

高校に入学して私はますます深く真理について考えるようになりました。いろいろな本を読めば読むほど、私の心の中はかき乱され、大人の汚れた世界を見、失望し、人を信じることをさへできなくなりました。

そんなとき、宣教師に出会つたのです。宣教師は、澄んだ目でほほえみながら、「真理はひとつしかありません」と教えてくれたのでした。ジョセフ・スミスの最初の示現を知つたときの喜びは、忘れることができません。まさしく私の求めている真理はこれだったのだ！とみたまが教えてくれました。

私はそれから、両親の反対もありましたがバプテスマを受けました。私の村は交通の便が悪く、学校まで15キロ、教会まで約20キロありましたが、自転車で通わざるを得ませんでした。高校のときは剣道部に入っていましたので、自転車通学とクラブ、勉強、そして教会と、肉体的にも精神的にも大変なチャレンジでした。でも私には、信仰と希望と愛の3つを強めたいという目標がありました。また将来、私をこんなにも幸福にしてくれた宣教師のようになりたいという夢がありました。ですから雨の日も風の日も、夏も冬も、自転車で教会に通うことを決心しました。そしていつも「宣教師になるためには、これしきのこと」と励ましていました。

もうひとつの夢は、家族と永遠に住む、ということです。短大を卒業し、去年の春、伝道に備えるために上京しました。名古屋に住んでいた下の兄に福音を知ってもらいたいと思ひ、伝道本部に電話をし、手紙で住所を知らせました。それから兄が福音を

聞くようになり、私は伝道の召しを楽しみに待っていました。待っている間に、兄は就職の勉強で教会を離れてしまいました。そして11月に来た私の召しは、名古屋伝道部でした。

今兄は、教会員として出発しています。家族も少しずつ変わってきました。私の伝道、兄のバプテスマを賛成してくれ、「社会の幸せのため、自分の成長のため努力しなさい」と母が励ましてくれました。

この現世は人間が神に会う用意をしなくてはならない時期です。戒めを守り、従順に従うならば、神様はあふれるばかりの恵みを神様の子供一人一人に用意されていることがわかります。福音の喜びは実践してみなければわかりません。福音は人を変えます。私は自由意志でこの家庭に生まれてくるのを選んだと感じています。

両親と父なる神様に心から感謝しています。この喜びを多くの人と分かち合いたいと思います。(こうち・ひろみ 1963年生まれ、東京ステークス部三鷹ワード部出身)

神様の愛を受けて

名古屋ステークス部名東南ワード部 河内 典幸

私は1984年12月30日にバプテスマを受けることができました。5月の中旬、妹の紹介で宣教師が初めて私のところに訪れた頃、私は7月中旬にある教員採用試験に向けて、仕事を終えてから夜は受験勉強をしていました。この頃の私は、受験への不安もあり、酒もよく飲んでいましたし、またタバコも吸っていました。そして、何かとても寂しくて愛に飢えていた気がします。また、何か完全なものにすがりたい気持ちがありました。

そんなとき、宣教師から神様の存在と永遠の生命の話聞き、これこそが完全なものではないだろうかと思いました。その後、週に1度、宣教師と会ってお話を聞くようになり、試験が終わってから毎週日曜日、教会に通うようになりました。そして9月30日にバプテスマを受けることが決まりました。しかしこのとき、私の心の中に、自分中心の高慢な気持ちが生まれ、心がたくなくなって、それまで受けてきた愛に背を向け、教会から去っていく結果となりました。このときの私の信仰は、本当にまだ

小さなものだったのでしょう。

改宗するまでの間、神様の愛を受け、信仰を持って生きていきたいという気持ちと、それとは逆に、捨て身でどうにかなるという気持ちがいまも交錯していました。しかし信仰を持って生活しているときには、体内からみなぎる充実感のようなものを感じました。教会から帰るときにはいつも、何かが温まり、穏やかな気持ちよさを感じました。フェロー長老やエルスワース長老と話しているとき、心が熱くなり、涙を流したこともありましたが、これはきつとすべて、神様からの愛だと思ひます。それとは逆に、信仰を持たず、人間社会の中で流されて生きていくと、神様の愛をわかっていながらも、自分を見失ひ、ただ時間が過ぎ、この世的な快樂に心は揺り動かされました。

1度は神様から遠ざかった私ですが、神様は確かに私を連れ戻してくださいました。12月1日に二次試験の不合格発表の通知が届きました。私は再び教会に通うようになり、12月30日に再びバプテスマを受けることが決まつたとき、私は、早く準備しなけ

ればならない、努力しなければならぬと思いました。そして、少しでもたくさん聖典を読み、お祈りも心を込めて行なおうと頑張りました。バプテスマの当日、金沢で伝道中の妹が特別の許可をもらって駆けつけてくれました。そして、名東ワード部の皆様にも祝福していただき、無事バプテスマを施していただくことができました。

バプテスマを受けて2週間後、富山で伝

道中のフェロー長老が1通の手紙を送ってくださいました。その中に「いつも神様のことを覚えてください。どこへ行っても、何があっても、いつであっても天のお父様のことを一番にするように。もしそうすれば問題はぜんぜんありません。いつも何とかかなります」そして、「河内さんを心から愛しています。永遠の友達です」と書いてありました。私は本当に感激しました。

私はバプテスマを受けたときの気持ちを忘れず、この世の嵐にもまれながら強く生きたいと思います。そして、神様からの愛、フェロー長老の愛、妹からの愛を忘れません。神様が生きておられて、末日聖徒イエス・キリスト教会が真の教会であることを証します。(こうち・のりゆき 1961年生まれ)

JMTC 第71期生

「あなたがたは
世の光である」

(マタイ5:14)



● 4月に召された日本人宣教師31名

(S:ステーク部, W:ワード部, B:支部, M:伝道部)

名 前	出身	伝道地
1. 菅 野 徹	東京西S/多摩B	福岡M
2. 井 上 賢 一	東京S/吉祥寺W	福岡M
3. 長谷川 伸 二	札幌S/豊平W	大阪M
4. 潟 沼 潤	東京S/吉祥寺W	大阪M
5. 島 袋 徹	沖縄那覇S/首里W	神戸M
6. 新 垣 朝 光	沖縄那覇S/小禄W	仙台M
7. 宇 野 貴 秀	大阪北S/茨木W	東京北M
8. 潟 沼 朗 生	札幌S/厚別W	岡山M
9. 北 村 富 弘	大阪北S/京都洛北W	台湾台中M
10. 土 田 善 樹	福岡S/北九州W	札幌M
11. 村 井 増 恵	広島S/光W	仙台M
12. 外 間 邦 子	沖縄那覇S/普天間W	札幌M
13. 長 嶺 啓 子	沖縄那覇S/小禄W	札幌M
14. 伊 藤 早 苗	札幌西S/小樽W	岡山M
15. 高 橋 美 幸	仙台S/上杉W	神戸M
16. 斎 藤 由 美	東京北S/越谷W	岡山M

名 前	出身	伝道地
17. 上 里 恵 子	東京南S/千束W	名古屋M
18. 高尾山 明 子	神戸S/神戸W	東京北M
19. 杉 山 律 子	神戸S/神戸西B	仙台M
20. 藪 谷 由加利	札幌西S/小樽W	神戸M
21. 秋 元 陽 子	仙台M/弘前B	神戸M
22. 笹 本 恵 子	東京北S/越谷W	福岡M
23. 森 み さ ほ	大阪S/枚方W	東京南M
24. 桑 原 淳 生	福岡S/佐賀B	東京南M
25. 刈 谷 眞 爾	東京南S/渋谷W	大阪M
26. 鈴 木 広 行	札幌M/帯広B	名古屋M
27. 橋 内 浩 治	東京西S/多摩B	名古屋M
28. 滝 智 光	東京東S/土浦B	岡山M
29. 幸 地 一 郎	沖縄那覇S/那覇W	仙台M
30. 与 座 宏 章	沖縄那覇S/那覇東W	仙台M
31. 波 田 野 隆	東京S/三鷹W	仙台M

ボーイスカウト特集



日本における末日聖徒の スカウト活動の現況

LDSエリアスカウト協議会委員 天野 昭



1980年、当時地域代表役員であった菊地良彦長老により、末日聖徒イエス・キリスト教会 (LDS) エリアスカウト協議会が組織された。第1回の公式行事は日本伝道開始80周年の記念プログラムのひとつとしてLDSスカウトジャンボリー (全日本大会) が1980年7月31日から8月3日にわたって神奈川県座間市の米軍キャンプ地内で行なわれた。そして第2回大会は1983年9月15日、若い男性中央管理会会長会の一員であるバックマン長老をお迎えして東京都江戸川河川敷で大勢のスカウトとリーダーが参加し、第1回スカウトラリーを行なった。

これらのスカウトプログラムを通して今まで各団各様であった、教会が育成団体であるスカウト団が一致するようになった。現在、下記教会所属団は16団あり、今後ますます増える傾向にある。現況のスカウトは教会員の子弟と非教会員の子弟の割

合がほぼ半々であるが、ここ4-5年の間に現在の2、3倍の教会員の子弟がスカウトとして登録され、活動するようになると思われる。

スカウト活動は右に掲げる標語の通り、「ちかい」と「おきて」のプログラムを骨子として青少年を育成しており、教会の教義を実践するプログラムである。これは教会というアロン神権組織に従属するひとつの活動プログラムである。

神権の指示のもとでのスカウト活動は、青少年にアロン神権者としての証を育む経験を与え、定員会の目的を補い、救い主を愛し、救い主に仕えることを助けるとともに、青少年に自己信頼、奉仕、指導力、非常時の備え、資源の保存などを学びとらせ、進んで社会、学校、教会でのやりがいのある奉仕活動に取り組むことを教えるものである。

「ちかい」と「おきて」の実践を通して

ちかい

私は、名誉にかけて、次の3条の実行をちかいます。

1. 神(仏)と国とに誠を尽くしおきてを守ります。
1. いつも、他の人々をたすけます。
1. からだを強くし、心をすこやかに、徳を養います。

スカウトのおきて

1. スカウトは 誠実である
2. スカウトは 忠節を尽くす
3. スカウトは 人の力になる
4. スカウトは 友誼に厚い
5. スカウトは 礼儀正しい
6. スカウトは 親切である
7. スカウトは 従順である
8. スカウトは 快活である
9. スカウトは 質素である
10. スカウトは 勇敢である
11. スカウトは 純潔である
12. スカウトは つつしみ深い

主として野外活動によってスカウトみずからが人格を陶冶し、社会人としての心構えを培うと同時に、健康的な強い肉体を作り、健全な精神を育むなど青少年の特性を成長させるのを助けるのがスカウト活動である。

末日聖徒イエス・キリスト教会ボーイスカウト団体一覧表(創立順)

●団体名

1. 東京連盟武蔵野第6団
2. 東京連盟江戸川第6団
3. 神奈川県連盟横浜第92団
4. 北海道連盟旭川第15団
5. 愛知県連盟名古屋第89団
6. 北海道連盟札幌第23団
7. 東京連盟町田第18団
8. 東京連盟中野第12団
9. 埼玉県連盟新座第4団
10. 埼玉県連盟川越第12団
11. 北海道連盟札幌第31団
12. 群馬県連盟高崎第23団
13. 東京連盟大田第21団
14. 沖縄県連盟那覇第22団
15. 大阪連盟堺第28団
16. 千葉県連盟千葉第26団

(6月30日に東京連盟江戸川第6団より分封の予定)

●ステーク部名

- (東京ステーク部)
- (東京東ステーク部)
- (横浜ステーク部)
- (札幌ステーク部)
- (名古屋ステーク部)
- (札幌ステーク部)
- (町田ステーク部)
- (東京北ステーク部)
- (東京ステーク部)
- (東京北ステーク部)
- (札幌西ステーク部)
- (高崎ステーク部)
- (東京南ステーク部)
- (沖縄ステーク部)
- (堺ステーク部)
- (東京東ステーク部)

●スカウト/リーダー数

- 25名/10名
- 43名/27名
- 42名/22名
- 42名/13名
- 33名/29名
- 52名/24名
- 30名/14名
- 50名/24名
- 26名/12名
- 27名/16名
- 20名/12名
- 15名/12名
- 22名/15名
- (沖縄ステーク部)
- 19名/10名
- 26名/8名

●団本部(末日聖徒イエス・キリスト教会)

- 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-7-7
- 東京都江戸川区西小岩5-8-6
- 神奈川県横浜市港北区篠原西町6-28
- 北海道旭川市6条西1丁目
- 名古屋市名東区猪高町猪子石鱈廻間25-85
- 北海道札幌市白石区厚別中央1条7-14-1
- 東京都町田市本町田1391
- 東京都中野区江原町1-8-14
- 埼玉県新座市栗原4-11-1
- 埼玉県川越市熊野町9-3
- 北海道札幌市西区手稲東3条南3-3-4
- 群馬県高崎市並榎町275
- 東京都大田区南千束2-25-11
- 沖縄県那覇市泊1-9-9
- 大阪府堺市向陵西町4-7-38
- 千葉県千葉市稲毛東2-5-12

現在12名のスカウトが当教会の宗教章授与基準によってキリスト教章を取得している。教会がスカウト活動を援助しているのは、神権の永遠の目的を達成する助けと

なるからである。少年および若い男性が家庭と教会との緊密な関係を維持するうえで助けとなる活動が、各ユニットで展開されている。(あまの・あきら)

ボーイスカウト菊賞を受けて

町田ステークス部町田第2ワード部
(東京連盟町田第18団ボーイ隊)

佐瀬 正幸

●ボーイスカウト東京都連盟から菊章を受ける佐瀬兄弟



去る2月2日、僕はボーイスカウトで菊賞をいただき菊スカウトになることができました。菊スカウトになることは、ボーイスカウトに入ってから一つの目標でした。今はその目標を達成することができて、とてもうれしいです。今度は菊賞の上のはやぶさ賞、富士賞をいただけるよう頑張りたいと思います。

僕がこのボーイスカウト活動を始めたのは小学校3年生のときで、今年で7年目を迎えます。この6年間、スカウト活動の中でいろいろなことがありました。苦しかったことやつらかったこともありましたが、それらを乗り越えたときには必ずすばらしいものがありました。

それらの思い出の中でも特に印象深いのは、あるキャンプでのキャンプファイヤーのときの出来事です。

ある日曜日の朝、朝礼で「キャンプファイヤーは安息日にふさわしいものを、班(ボーイスカウトはいくつかの班によって構成されている)の出しものとして考えるように」とボーイ隊の隊長が言われました。

その頃、班長だった僕は班員たちと、その出しものについての相談をしましたが見がまとまらず、キャンプ地から近い教会で神権会や聖餐会に出席している間にキャンプファイヤーのことなどすっかり忘れてしまいました。

キャンプファイヤーのことを思い出したのは、夜の食事を作っているときでした。食事を作りながら相談し、いくつかよい意見が出ましたが反対意見なども出て、うまく決めることができませんでした。

とうとう食事の時間になってしまい、よ

い出しものを早く決めることができるようにと皆で祈りました。食事の途中でも話し合い、食事が終わりに近づいたとき、ひとりの班員が「ジョセフ・スミスが神様とイエス・キリストに会った話はどう?」と言いました。僕はこれなら安息日にふさわしいし、話の内容もよく知っているのでもういくのではないかと班員に尋ねると、全員が賛成し、配役もすんなりと決まりました。

その後、食事を速く済ませて、早速練習に取りかかりました。練習もスムーズにすることができ、出しものの準備が整いました。

いよいよキャンプファイヤーになり、あっという間に僕たちの班の出しものの番になりました。間があいてしまったり、せりふをうまく言えなかったりしましたが、とてもあれだけの時間でやったと思えないほどのできばえで、隊長もほめてくださいました。

キャンプへ行って自然と触れあうたびに神様の偉大さを感じますが、この出来事によって改めて神様は生きておられて、いつでも弱い僕たちに救いの手を差し伸べてくださることを知りました。このキャンプに参加することができて本当によかったと思います。

ボーイスカウトの活動があるときは、いつも快く行かせてくれる両親に感謝しています。また、いつも楽しい活動を用意してくださっている指導者の方々に感謝しています。そして、このすばらしいボーイスカウトの活動を僕たちに与えてくださった神様に感謝しています。

これからも、ボーイスカウトを続け、将来この活動で身につけたことを教会や社会などで何らかの形で役立てることができるならば幸いです。(させ・まさゆき 1970年生まれ、町田第2ワード部教師定員会第一副会長)

創立10周年を迎えチーフを作成

神奈川県連盟横浜第92団
団委員長 遠藤 大

横浜第92団は昨年12月で創立10周年を迎えました。年末の12月に記念式典を行い、アトラクションにはクリスマスパーティーをして楽しく有意義な日を過ごしました。

この日のために特別にチーフを作成し、記念品としました。チーフのかもめは横浜の鳥、青い空と海の間を自由に飛ぶ鳥を表わします。

また当団のシンボルと決めたまさかりは、キャンプになくてはならない道具であり、使い方を間違えるとけがをします。日頃から使い方などを学んでよく手入れをしなくてはなりません。鉄と木でできたまさかりは美しく機能的で、形にむだがありません。

下にはBE PREPARED「そなえよつねに」のモットーが書いてあります。地色は真紅、正義と勇気の色を象徴しています。

(えんどう・だい 横浜ステークス部高等評議員)



●昨年創立10周年を迎えた横浜第92団

●チーフ

YOKOHAMA
TROOP 92
Be Prepared

10年目を迎える 旭川第15団

北海道連盟旭川第15団
団委員長 安田 琢三

●旭川第15団(スキー大会)



旭川第15団は現在カブスカウト13名、ボーイスカウト25名、シニアスカウト6名、リーダー14名の合計58名の世帯です。まだシニアは班組織ですし、それほど大きくない団ですが、発団以来できるだけ多く会員の子供たちを入団させるよう努力しています。現在スカウト44名中21名と、約半分が会員です。

年間に少しでも多く野外活動をさせたいと計画しています。恒例になっているのは、1月と3月のスキーツアーです。今年は2回とも北海道の中央やや南寄りの日高山脈

のふもとの日高とトマムのスキー場へ、1泊と2泊してきました。近くに良いスキー場がたくさんあるので、冬はもっぱらスキーです。夏はキャンプですが、一昨年は大雪山を縦走しました。

恒例といえば、今年も5月にバザーをします。30万円くらいの純益を予定しています。また7月6日は10周年記念式典も行ないます。友団の皆さんのご参加もぜひお願いし、相共に青少年活動を一層盛り上げたいと思います。(やすだ・たくどう 札幌ステーキ部旭川西ワード部監督)



「自分たちの子弟を 何とかしなくては…」

愛知県連盟名古屋第89団
団委員長 中井 宗雄

●昨年7月、愛知県連野営大会で
宗教行事を開催

「ボーイスカウト運動は、決してきれいごとのボランティア活動ではありません。自分の息子を何とかしなくてはならない、とせつばつまった親たちのエゴイズムから始まった運動です」とは、私が初めて参加したボーイスカウト指導者講習会での地区コミッショナーのお話でした。

スカウティングは、子供たちが日曜日に英国教会で教えられたことをまったく理解もせず、実践する機会も与えられずに、善からぬ遊びをしていることに激しい危機感を抱いたバーデン・パウエルによって創始されました。私たちもまた、段々と誘惑が多くなっていく時代の中で、むずかしい年代(青少年期)にさしかかっていく自分た

ちの子弟を、何とかしなくてはならないとの危機感からボーイスカウトの団を発足させる決心をしました。ちょうど10年前のことです。

新規に発足する団のほとんどは、既存の団が大きくなって分割する形で始まります。それに比べてわが団は、指導者も、備品も、伝統も、ほぼ皆無の状態から始まったのです。多くの試行錯誤を繰り返して、現在ではスカウト40余名、指導者20名を要するに至りました。ひとえに神権指導者各位と関係者の努力の賜です。

当団のスカウトの半分と指導者の3分の2は名古屋・名古屋西両ステーキ部の会員で、そのほかは団本部の近隣に住む方々で

す。教会員の子弟の訓育と地域社会への働きかけのふたつの目的が、おおむね理想に近い形でバランスが取れていると自負しています。10周年を期して、さらに「ちかい」と「おきて」の実践に努めていきたいと思っています。

今後は、名古屋市内と同様に、岐阜、岡崎方面の会員にもスカウティングの恩恵が及ぶように、当団を足がかりに、まず組や班、そして次に隊、さらに団の分割をと夢を広げております。(なかい・むねお 名古屋ステーキ部高等評議員)

「感動」と「がまん」の 経験

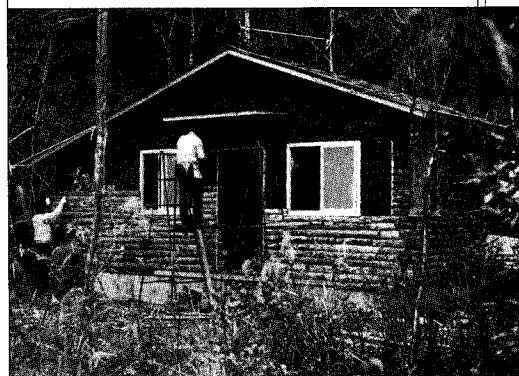
東京連盟町田第18団
団委員長 坂井 圭

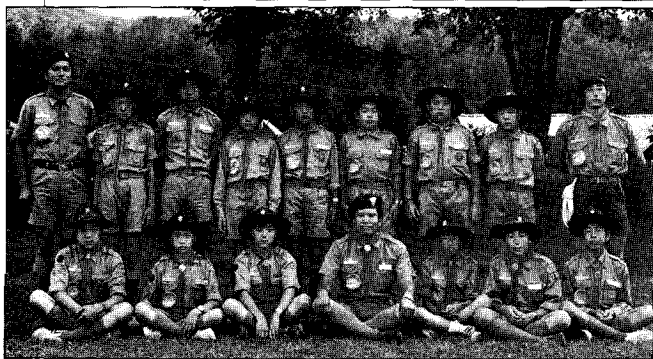
ボーイスカウト町田第18団は、7年前に発団しました。当時は小学3年生から5年生のカブ隊だけでしたが、子供たちの成長とともに、現在はボーイ隊(小6-中3)とシニア班(高校生)が組織されています。団員30名の内教会員は25名で、残り5名は教会員のお友達です。

初等協会やアロン神権の少年たちが、ボーイスカウトの制服を身につけ、野外活動に励んでいます。あるときは「押せば、お湯が出る」という便利な生活から離れ、「水をくみ、運び、まきを集め、火をつけ、沸かし、やっとお湯を得る」という生活に挑戦しています。

大自然の中で、仲間たちと寝食をともにし、「感動」と「がまん」の経験を積んでいる彼らが、将来宣教師として奉仕するとき、このスカウト活動が大いに役立つようにと願っています。(さかい・きよし 町田ステーキ部第二副ステーキ部長)

●手作り中の町田第18団スカウト山荘





青少年の健全なる育成に向けて

北海道連盟
札幌第23団委員長
成田 紀夫

●札幌第23団(ボーイスカウト北海道大会)

厚別ワード部の地域は、現在札幌市の副都心として急速に発展しているベッドタウンです。

隊員の中で教会員は隊員数52名(カブスカウト25名、ボーイスカウト22名、シニアスカウト5名)の内13名で「地域青少年の健全なる育成」と伝道に大きく寄与しています。

発団から今年で9年目、来年は発団10周年になりますので盛大に記念式典を行なう予定です。2月には団オリジナルのチーフも作り、大きく飛躍をしようとしています。さらに私も団委員長として、2月のボー

イスカウト北海道連盟主催の団委員長特修所に入所、2泊3日の特修に耐え、無事終了書を授かりました。各指導者の献身的な奉仕に助けられて団運営がなされていることに感謝しています。また、育成会よりの援助、さらにこのプログラムを授けてくださった神様に感謝申し上げます。

私たちはこれからも、世界の宝である青少年の健全なる育成に神様の力を借りて、ボーイスカウト活動にますます努力いたしますので、各方面関係の方々のご協力、ご理解をよろしくお願い申し上げます。(なりた・のりお 札幌ステークス部高等評議員)



●中野第12団のスカウト

体力作りで明けた年

東京連盟中野第12団団委員長
児玉 栄治

新春特別行事の「山手線一周散歩」が1月4日に行なわれ、朝5時40分に団本部を出発し、夕方6時20分に帰着。約40キロの距離をスカウト9名と小学校5年生の女子2名が、山口隊長と共に完歩しました。

歩き始めは元気な声が飛びかっていたが、半周過ぎてからは声も少なく、足を引きずりながらのゴールとなりました。

団本部への到着後、温かいおしるこで元気を回復。隊長から筋肉を鍛える話などを聞いて散会しました。

また、去る3月25日にはカブ隊の入隊式が行なわれ、9名のスカウトが隊長の前でそれぞれ「やくそく」と「さだめ」を述べ、入隊が許可されました。「うさぎスカウト」として歩むべく、隊長よりスカウトの首にチーフが巻かれうれしそうでした。

引き続き行なわれたカブスカウトからボーイスカウトへの上進式では、ボーイ隊長が「ちかい」と「おきて」を説明すると、上進するボーイスカウトがそれを守ると誓いをたてました。(こだま・えいじ 東京北ステークス部幹部書記)

監督会全員が団委員会の委員に

埼玉県連盟川越第12団
ボーイ隊長 天野 昭

ボーイスカウト川越第12団は、本年発団5周年記念の年を迎えています。現在はカブ隊とボーイ隊を有し、今秋にはシニア班が発足予定です。永井正利団委員長は、川越地区副協議会長として、また私は、川越

富士をぶっち切れ!

埼玉県連盟新座第4団
ボーイ隊長
藤崎 和夫

●新座第4団のスカウト



昨年、夏のキャンプで富士登山を行ない、指導者2名、スカウト9名が2日間の予定で行きました。

須走口新五合目まではバスで行き、夕食後星空のすそ野で仮眠をしました。丁度夜空に星が流れた夜10時、私たちは起床し、出発しました。

まず、不調を訴えたスカウトと付き添いを残し、9名が先発しました。しかし、懐中電灯を頼りに登るうち、睡眠不足や、酸素不足による体調悪化者が続出、たびたびシュラフ(寝袋)で仮眠休憩をとりながら、翌朝やっと七合目にたどり着くことができました。後発のスカウトは翌日には元気を

回復し、フラフラしていた先発組に七合目で追いつきました。そこで、親切な山小屋のご主人が高山病に苦しむスカウトに回復法の指導をしてくださり、勇気が出ました。

午後になって予報はずれの雷雨に遭い、本八合目の小屋に避難することになりました。雨水を食器に受けて飲んだりしたあと、雨も上がって全員頂上へ向けてスパートをかけ、極めることができました。

帰りは、約2時間で一気に五合目まで下り、無事に下山しました。

途中お世話になった、山小屋のご主人に感謝いたします。(ふじさき・かずお 東京ステークス部幹部書記)



●川越第12団(第11回日米フレンドシップパトローリーにて)

地区組織拡張委員長として奉仕の輪を広げています。さらに監督会全員が団委員会の委員として奉仕しています。

川越ワード部の若い男性は、アロン神権定員会の週日の活動にスカウティングを活用しています。当団は、カブ隊とボーイ隊の合同活動として、赤い羽根の共同募金、緑化募金、ユニセフ募金などを恒例として行ない、地域社会に奉仕しています。

現在5名の1級スカウトは菊章を目指しており、将来富士スカウトの誕生を夢見ながら、毎週土曜日午後7時の集いに皆が喜んで参加しています。埼玉県少年少女の集いなど県連盟および川越地区運動会などの地区行事にも、スカウトやリーダーが積極的に参加して友好の輪を広げ、スカウト生活を楽しんでいます。(あまの・あきら 東京北ステークス部高等評議員)

ボーイスカウトの活動に寄せて

北海道連盟札幌第31団
団委員長 杉本 希世

当団は昭和56年4月1日に札幌23団より分封し、現在ボーイ隊、カブ隊によって活動しております。

結団以来、早くも満40年が経過いたしました。この間、特別な事件もなく、先輩諸兄姉のご指導のもと活動をして参りました。

●札幌第31団のカブ隊



た。これもひとえに、団委員指導者の絶大なご尽力と、ご父母のご協力とご支援の賜と厚く感謝申し上げます。

特に、各隊歴代の隊長、副長ならびに、指導者の方々の献身的な働きに心から感謝申し上げます。

青少年のため熱心に奉仕して下さる姿は、スカウトの一人一人にかけがえのない

わが隊のユニークな活動

群馬県連盟高崎第23団
デンマザー 浜田 晴世

●高崎第23団のカブ隊

高崎第23団は、昭和58年4月1日に組織され、現在12名のカブ隊員と3名のボーイ班員で活動しています。隊員の半数が教会員です。

わが隊では、次のようなユニークな活動を行なっています。①高崎なんでも博士(郷土の施設を見学したり、地元出身の俳人について研究し、物知り博士になる)。②カブ号出動(奉仕一教会の近辺から空き缶を拾い集め、大きなおみこしを作り、お祭り

模範となり、まさにスカウトの精神をもって学ぶ最高の機会でもあります。その労に改めて感謝申し上げます。

来年は結団5周年に当たります。より一層充実させ、多くの健全な青少年育成と成長を糧として、飛躍する年にしようと決意しております。(すぎもと・まれよ 札幌西ステークス部高等評議員)



に参加する。また市の福祉協議会から点字の解説書と点字を打つ道具をお借りし、自分の名前を打ったり両親に点字の手紙を書く。③ぼくらは迷コック(りんごの皮むき訓練と料理)。④ぼくらは偉大な豆記者(新聞社を見学し、カブの新聞を発行する)。⑤ぼくらは忍者たち(忍者屋敷「三日月村」を見学し、実地訓練により忍者のすげれた生活ぶりを学ぶ)。(はまだ・はるよ 高崎ワード部)



3年前に4人の子供で発団

東京連盟大田第21団
団委員長 酒田 達雄

●朝礼を行なう大田第21団

3年前、教会員の子供ふたりとその友達ふたりの4人でカブ隊を作り、活動を始めました。今年からは新たにボーイ班も発足させることができました。当時、指導者も経験のない人ばかりでしたので、子供たちと一緒に勉強してきました。

22名の隊員の内会員の子供は6名ですが、キャンプのときなどお父さんお母

さんの協力も得られ、楽しく活動しています。

子供たちも以前に比べてとても成長している様子がうかがえます。将来きっとよい指導者になってくれると信じております。スカウト活動を通し、主のみ業のすばらしさを感じることができ大変感謝しています。

(さかた・たつお 洗足ワード部監督)



今年3月に発団しました

大阪連盟堺第28団
団委員長 柏木 徹

高吉弘志大阪堺ステークス部長より、若い
男性の活動にボーイスカウト活動を取り入

●産声をあげた堺第28団

れるようにと言われ、昭和58年9月15日の
東京で行なわれた第1回LDSスカウトラ
リーヘリダーが参加しました。

このスカウトラリーにおいて、バックマ
ン長老のお話を聞き、指導者たちが一致し
てボーイスカウト活動を援助しておられる
のを目にし、神様が定められた活動である
証を得ました。その後、アロン神権委員会
の半田泰章評議員、志野年昭評議員と共に
発団の準備を進め、本年3月1日付で堺第
28団として発団することができました。

発団間もない未熟な団ですが、青少年の
ため、より充実したスカウト活動を行なえ
よう頑張りたいと思います。(かしわぎ・
とおる 大阪堺ステークス部高等評議員)

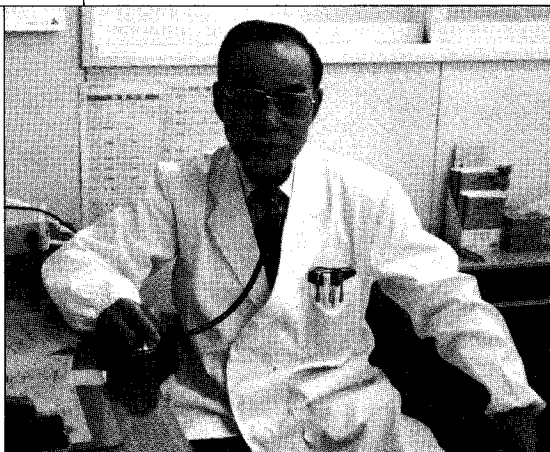
●職業と信仰シリーズ②⑥

病院の窓から

ー 私たちは「心の医師」ー

札幌伝道部函館支部長
内科医

古川 廉一郎



医学部を卒業してもう36年になろう
としています。勤務医生活26年、開
業して約9年あまりを経ました。その間多
くの病に悩む人々に接し、数多くの死に出
会い、患者さんとその家族の悲しみと涙と
を見てきました。

今から約8年前の早朝でした。救急隊か
ら往診の依頼があり、駆けつけたところ、
その方はすでに死亡しており、何の手当
てもできませんでした。貧しい家庭であるこ
とはすぐわかりました。亡くなったのは40
代の男性で、中学2年の男の子と、小学
5年の女の子がボソソと座っていました。
子供たちの、私にすがりつくような目で「も
うだめなのでしょうか」と尋ねたその声が、
今でも私の耳にこびりついてます。聞く
と母は離別して行方不明、父は毎日酒びた
りの荒んだ生活であったと言います。ほか
に頼るべき身寄りもないとのことでした。

私は診察を終えて病死であることを確認
してから、正座して無言の祈りを捧げまし

た。祈り終わって目をあげると、ふたりの
子供もきちんと正座して私の祈りに合わせ
て手を合わせていました。「これからは兄弟
ふたりで力を合わせて一生懸命生きるのだ
よ、お互いに助け合って頑張るのだよ、い
いね」と私が言うと、コックリと素直にう
なずいたその姿が忘れられません。幼くし
て父母と別れたふたりに、どんな生活が待
ちうけているか。私の心は痛みました。

またこんなことも経験しました。33歳で
胃の痛みを訴えて来院した男性を検査した
結果、胃癌ですでに手術不能でありました。
約2カ月半の短い入院生活でこの世を去ら
れました。小学生の子供といまだ30歳前後
の若い妻を残して。

亡くなるまでの妻の必死の看病ぶりは痛
痛しく、亡くなられてからの悲しみも、と
ても表現できません。

その患者さんは死も間近く、ほとんど食
事はのどを通らず、わずかのジュースを飲
むのが唯一の楽しみでした。回診のとき「こ

んなにジュースがおいしいとは知りません
でした。これが唯一の楽しみです」と私に
話をしたのが最後で、間もなく昏睡状態と
なり、この世を去られました。

この方の家庭は、それまで将来に対して
何の不安も感ずることなく、安らかで平和
な生活が続くと考えておられたのでしょうか。
その思いがわずかに数カ月の闘病生活で、は
かなくも崩れ去ったのです。亡くなった方
も無念であったでしょう。残された家族は
どれほど悲しまれたことか。涙を流して夫
にすがりつく妻と子の姿を見て、この世は
悲しみと不合理に満ちていると、私は感ぜ
ずにはおられませんでした。

現在の生活がこのまゝいつまでも平穩に
過ぎていくと考えるのは錯覚であり、何の
根拠もないことを、私はしばしば経験して
きました。

1976年に改宗して初めて、私は人生の意
義と、試練や悲しみがなぜ私たちに与えら
れるのか知り得るようになりました。また、
医師として病める人を診るうえで必要なこ
とは、単に病を癒すことではなく、その人
の心を癒すことにあり、それが真の治療で
あるとつくづく感じるようになりました。
そして私たち医療に携わるすべての人の心
に、イエスを信ずる信仰と愛とがその根底
になければならぬと悟るようになりました。

肝疾患や心疾患などで来院する人々に、
酒をやめなさい、タバコをやめなさいと、
いくら説明しても実行できる人はごく一
部です。「私から酒を取ったら、何の楽し
みもありません。会社の帰りに一杯飲み、
マージャンやゴルフをするのが楽しみです。
そのために仕事をしています」と言う方が
あまりに多すぎます。また、仕事をやめた
あと、何を頼りに、何を目的として生きて
よいか見いだすことができず、定年になっ
て鬱病のようになる方もいます。

毎日の診療を通して感ずるのは、多くの
人々は生きる目的、真の心の支えを持つこ
となく、また求めようとしません。また、
求めようと努力している方々も、それ
がどこにあるのか迷っているのです。そ
のような方々を見ていると、病は心のひと
つの表現と思われる場合が多々あります。
この世に何のために生まれ、そしてどこに
行くのか。それらのことをもっともっと、
私たちは宣べ伝える必要があると感じます。

教会員と、一般の方々の病気の経過には
差があります。同じ薬を投与しても、治り
方に差があります。知恵の言葉を守ってい

ることも、その理由のひとつでしょうが、信仰が最大の原因と感じています。信仰の強い方は、治りが早いのです。私の独断かも知れませんが、病の治り方と信仰の強さは比例しているようにも思えるのです。目に見えぬ力が、会員の一人一人の上に働いている、そう思うことがたびたびです。

医師としての立場から、ときどき私は、その人の生命を左右するかも知れぬほどの決定を迫られることがあります。

今から5年前、ある会員の方が重い病気にかかりました。高い熱が続き、抗生物質もまったく効果がありません。それはちょうど4月下旬で連休の最中でした。検査センターも休みで、十分な検査は何ひとつできません。高い熱、尿中に赤血球が多く出現していること、高度の血沈の促進、しかし白血球数は正常であること、それが検査のすべてでありました。私は苦慮しました。本を調べ、そして祈りました。

ふと私にある疾患名がひらめきました。その疾患と断定するには複雑な検査が必要でした。しかし検査センターでは、連休でとてもできないし、結果がわかるには休みが終わって7日間もかかるとのことでした。私は聖別された油を会員の頭に注ぎ、癒しの儀式を行ない、会員の上に神権の力と、また私に力を与えてくださるように祈りました。そして、ある劇薬を大量使用しました。その薬は、もし私の診断が誤りなら、その方の生命と予後に重大な結果をもたらす危険なものでした。幸いにして高熱はうそのように下がり、一般状態もよくなりました。危機は突破されたのです。私の祈りを主は聞きとどけてくださったのです。

多くの人が私の診療所を訪れます。ほとんどの人は病気以外には何の悩みもないように見えます。しかし、実際はそうではないのです。病気は、その人の苦しみの一つの現われにすぎません。

ニコニコしていても、「何かご心配なこともあるのではありませんか。悩んでいることがあるのではありませんか」と尋ねると、家庭の不和、親子の断絶、夫の浮気、そのほか多くの悩みを訴えられる方がとても多いのです。それらの方々には、自分の悩みを聞いてもらえる人がいないのです。相談したくとも、相談できる人がいないのです。

現在の日本は物に恵まれ、飢えに苦しむ人はほとんどおりません。しかし病院の窓からこの世を見ると、心の荒廃、心の貧し

さが、とても目に映るのです。人々の表面は豊かであっても、その内面は寒々として心は飢えているのです。愛のない不毛の地が、私の目には見えるのです。

皆さんの隣人がどんなに幸福そうに見えても、人には容易に言えぬ悩みを持っていることを理解してほしいのです。愛と慰め、思いやりを注いでほしいのです。何気ない微笑み、挨拶、会話、それらがどれほど人々を慰め、生きる力を与えているかわからないのですから。

私たちは「心の医師」にならなくてはなりません。すべての方がそうなるはずです。



医者となって やっと宣教師に なれました

大阪伝道部専任宣教師

増田 和之

私が伝道に出る決心をしたのは、もうずっと以前のことで。高校生のとき、セミナーで学んで宣教師の大切さを知り、伝道に行く決心をしました。問題は、伝道に行く時期でした。いろいろな人の話を聞くと、大学在学中に休学して行くのが一番よいのではとのことで、そのように計画を立て準備を始めました。

大学に入るとすぐに学生担当の教官を訪ね、伝道のために2年間休学できるかどうか聞きました。その先生は「前例がないが可能だろう」と明るい見通しを与えてくれました。

次に両親に話しました。両親は教会のことをよく知っていましたので、私が宣教師になりたいと言いつづけるのは予測していたようでしたが、在学中に伝道に行くことを賛成しませんでした。「卒業してひとり立ちしたら、あなたの意志で伝道に行くかどうか決めなさい」と言いました。私は医学部の学生でしたので、伝道を遅らせれば遅らせるほど、進級や国家試験に不利になることや（医学部は学年が進むごとに学ぶことが

格段に増えていきます）、国家試験に合格して医師になってから2年間のブランクを持つことは、学生の間2年間よりも代償が大きいことを話しましたが、私が年若いせいもあって話が感情的になり、よい結果は得られませんでした。

そのうち、父の仕事が思わしくなくなり、父は転職と失業を繰り返すようになりました。そのうえ父は交通事故に遭ったり、運動中に骨折したりして入院することが多く、私の家族は大変な時期を迎えました。また私自身も大学の勉強が忙しくなり、休学するよいチャンスである年度変わりの時期に試験に追われて伝道に出るのがどんどん先に延びていきました。

やがて私は大学を卒業し国家試験を受けて医師となりました。しかし伝道に出たいという気持ちは消えず、医師として何科を専門とするかを決めるときにもそのことが頭を離れませんでした。私は学生の頃から麻酔科医になりたいと考えていました。というのは、私が学んだ大学の麻酔科の教授は医師として、また人間としてとても尊敬

できる方でしたし、手術室でさっそうと働く麻酔科医の姿にもあこがれていました。また麻酔科は比較的小さな科で、伝道のための休職も容易なのではないかと考えました。

そういうわけで、私は麻酔科研修医として大学病院で働くようになりました。麻酔科医の仕事は予想通りとても魅力のある楽しい仕事でした。その仕事を愛すれば愛するほど、伝道に行く気持ちが弱くなっていました。また麻酔科が小さな科で伝道に行くのに有利と考えていたのはまったく逆で、人手が少ないために自分ひとりでもわがままを言うのは迷惑なことに思えました。私はここまで伝道を引き延ばしたので、もうあきらめようかと考えました。

ある晩、私は伝道に行くかどうか最終的に決めなくてはならないときがきたと感じました。私の祝福師の祝福には「健康が守られ、多くの障害が取り去られて伝道に行くことができる」と約束されていました。私はどのようにしたらこの約束を達成できるか深く考えました。そして、麻酔科の先生方にも、両親にもよく理解していただき伝道に出ることができるよう、もう一度計画を考えました。その計画が神様のみこころにかなうかどうか、ひざまずいて祈ると心の中に熱いものを感じました。

次の日、麻酔科の医局長の先生や同僚たちに伝道のことを話しました。彼らは驚いたようでしたが、私の気持ちを理解してくれました。また両親にも、もう一度話しました。両親はもはや強い反対はしませんでした。その日から私はすばらしい準備の日を過ごしはじめました。私は仕事のうえで、さらにすばらしい先生方や勉強の機会に恵まれました。急患で夜通し手術、その次の日は朝から勤務ということもよくありましたが、とても充実した日々でした。すばらしい祝福のひとつは、父がよい職に恵まれたことでしょう。父の働きによって私の家は経済的に安定し、私は伝道資金を少しながら蓄えることができました。両親は伝道に必要なものをすべて買いそろえてくれました。

やがて伝道の召しが来ました。日本大阪伝道部ということで、両親（特に母）は安心したようでした。なぜなら私の家から比較的近い伝道部だったからです。

出発の日が近づいたある日、父は麻酔科を訪れ、教授に私のわがままで麻酔科の先生方に大変迷惑をかけることをわびました。

教授は父にこう尋ねました。「お父さんは息子さんの伝道について賛成しておられますか。」父は答えました。「特に賛成という訳ではありませんが本人が強く希望していますので許すことにしました。」教授は言いました。「そうですか。お父さんがもし伝道に反対しておられるなら、私がお父さんを説得してでも息子さんを伝道に行かせてくれるように頼むつもりでした。私はモルモン教を信じている訳ではありませんが、モルモン教会はすばらしい教会です。」父は教授のこの言葉を聞いて大変安心したそうです。

JMTCに入るため熊本を離れる日、両親は空港まで見送りに来てくれました。伝道地についた晩、同僚と共に最初の戸別訪問を行ないました。自分の姿や態度、声が少しでも周りの人々の幸福につながるようにと祈りながら一軒一軒訪問しました。その答えはほとんど「結構です」ばかりでしたが、中には親切に応答してくださる方もいて心がなごみました。伝道を終えてアパートに帰り、同僚と共に祈りました。祈りの中で、きょう訪問したすべての人に祝福があるように祈ると、一人一人の顔が思い出されて涙があふれてきました。祈り終わるとひざの前には涙の水たまりができていました。

伝道の決心をしてから今日までたくさん

の障害がありましたが、すべて神様の力を借りて克服することができました。今、神様のみ恵みを数えあげるときに、この伝道の業が確かに主のみ業であると証できるのです。（ますだ・かずゆき 1958年生まれ、熊本地方部熊本支部出身）

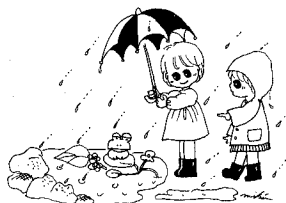


編集室から

●「子供のページ」が4、5月号から4ページ増えて16ページとなりました。そのために従来ローカルページ（現各地のたより）で扱っていました子供の証を「子供のページ」で紹介できるようになりました。子供たちによる証のみならず、家族の似顔絵、また聖典の言葉を使ったクロスワードパズル、クイズ、まんがなどをどしどし送ってください。

●「各地のたより」「子供のページ」への投稿のあて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03-440-2351(代)

●9月号掲載分の締切は7月5日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。



渋谷ブックセンターから



若い女性記念像

40個限定販売(輸入品)高さ108ミリ

定価 2,500円

若い女性「成長する私」の表紙やメダルに使われている記念像は、成長する若い女性の姿を象徴しています。「成長する私」のプログラム修了記念などでお役立てください。